



令和3年度

世界遺産研究協議会

「整備」をどう説明するか（第二部）

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所

世界遺産研究協議会

「整備」をどう説明するか (第二部)

World Heritage Seminar, FY 2021

How should we describe *Seibi*? (part 2)

東京文化財研究所

令和3年度

■ 例言

- 本書は、東京文化財研究所文化遺産国際協力センターが令和3（2021）年度に開催した世界遺産研究協議会「『整備』をどう説明するか」（第二部）及び第44回世界遺産委員会の報告書である。
- 本書が報告する世界遺産研究協議会は、二つのセッションに分けた動画配信によるオンライン開催である。セッション1は、令和3年8月30日から10月1日にかけて、セッション2は、令和4年1月14日から2月28日にかけてYouTube上で参加登録者に限定配信された。
- 本書の原稿は、西和彦（東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター）、松浦一之介（同）、境野飛鳥（国際日本文化研究センター、東京文化財研究所客員研究員）が執筆した。
- 本研究協議会の内容は、松浦が文字起こしし、西及び友田正彦（東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター長）を加えた3名で内容を確認した。
- 本書は、西及び松浦が編集し、友田、西及び松浦が校正を行った。
- 本書に使用した図表は、全て報告者から提供された。
- 本書における世界遺産関連用語は、東京文化財研究所刊行の『世界遺産用語集（改訂版）』（2017）に準じた。
- 本書における訳語の扱いについては可能な限り統一を図ったが、一部の用語に関しては、使用される文脈を考慮して差異を許容した。
- 本書の表紙に使用した写真は、縄文遺跡群世界遺産保存活用協議会が撮影し、一戸町教育委員会が所管する「御所野遺跡 秋の風景」（<https://jomon-japan.jp/archives/asset/16020>）であり、「世界遺産 北海道・北東北の縄文遺跡群」公式ウェブサイトが規定するライセンスの条件に従って加工・転載した。

刊行にあたって

東京文化財研究所文化遺産国際協力センターでは、世界遺産研究協議会を平成 29（2017）年度より毎年開催してきました。本協議会の主な目的は、世界遺産制度をはじめとする文化遺産保護に関連する国際動向をいち早く共有するとともに、同分野で国際的に議論されているトピックや近年新たに導入された概念等を、国内で文化遺産保護に携わっておられる関係者の皆様に向けて、わかりやすい形でお伝えすることです。また、世界遺産を有し、あるいはこれから登録を目指そうとする自治体等で多様な課題と日々向き合っている担当者の方々に、同様の悩みを抱える同士が意見を交換し、先行事例に学ぶことのできる機会を提供することも本協議会の重要な役割と認識しております。

これまでに世界遺産の OUV や遺産影響評価（HIA）といったテーマを扱ってきましたが、昨年度からは若干視点を変えて、わが国の文化財保護の現場で広く共有されている考え方や実践されている取り組みが国際的舞台では必ずしもすんなりと受け容れられない場面も少なくないという問題意識から、「整備」という概念をどのように対外的に説明するか、という課題を取り上げることとしました。初年度はまず論点整理として、当該分野における「整備」という語に込められた概念と、そのもとに行われてきた行為、さらには国際的コミュニケーションにおいて何が問題となるのか、といった諸点について国内の専門家へ知見を提供していただきました。そして今年度はこれを受けて、文化遺産保護分野で国際的に活躍されている海外専門家に参加いただき、考古遺跡の「整備」にまつわる議論を行いました。議論の前段として、日本における大規模史跡整備の実例をその背景にある考え方とともに紹介していただき、英米の専門家にはこれに対する受け止めや自国での考古遺跡保存の状況についてもお話しいただきました。討議では方法論をめぐる見解の違いも浮き彫りになりましたが、私たちが「整備」を通じて目指そうとする文化遺産活用の方向性とその意義についてはかなり共有できたのではないかと考えています。

さきに協議会の開催目的として挙げたうち、意見交換の場の提供という点については、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない状況下でオンライン開催とせざるを得なかったため、本来の役割を果たせなかったことを非常に残念に思っています。一方で、そのような中でも国内外の第一線の専門家による討論を実現できたことは大きな収穫であったと自負しています。この成果を広く活用いただくとともに、さらなる議論に向けての出発点として本報告書が一助となることを大いに期待しております。

末筆ながら、ご協力いただきました専門家各位、ならびに関係機関の皆様へ、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月
東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター長
友田 正彦

目次

刊行にあたって	3
目次	4
■ 世界遺産委員会の最新動向	
1. 第44回世界遺産委員会の報告	7
■ 「整備」をどう説明するか	
2. はじめに	19
本論	
日本における先進的史跡整備の事例	
3. 変化する遺跡公園 – 実験・検証による整備と活用 –	21
4. 史跡公園を目指した一乗谷の遺跡整備	27
英語圏における遺跡の保存活用からみた日本の整備	
5. イングランドのヒストリックサイトにおけるリコンストラクションの取り組み	33
The approach to reconstruction at nationally important historic sites in the UK	
6. 世界遺産の真正性と「整備」	43
World Heritage Authenticity and <i>Seibi</i>	
討論	
7. わが国の「整備」をどう考えるか	51
総括	
8. まとめに代えて	85
9. 考古遺跡保護の国際思潮 – 環境・文脈・景観についての概念から –	87
資料	
文化遺産サイトの解説及び展示に関するイコモス憲章 (2008年ケベック憲章)	95
The ICOMOS Charter for the Interpretation and Presentation of Cultural Heritage Place	



世界遺産委員会の最新動向

第 44 回世界遺産委員会の報告

境野 飛鳥（東京文化財研究所 客員研究員）

1. はじめに

第 44 回世界遺産委員会は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、当初予定より 1 年開催が延期され、2021 年 7 月 16 日（金）から 31 日（土）にかけて、開催地である中国の福建省福州市と中継でつなぐ形で、オンライン開催された。議長は Tian Xuejun 氏（中国）、決議案の修正や発言者の意見を取りまとめるラポルトゥールは Miray Hasaltun Wosinski 氏（バハレーン）が務めた。委員国は表 1-1 の 21 カ国であり、そのうちバハレーン、グアテマラ、ハンガリー、スペイン、ウガンダが副議長国を務めた。

オンライン開催にあたっては、例年とは異なる様々な留意点が事前に告知されていた。まず、世界遺産委員会は Zoom を用いて開催され、委員会中に発言を許される参加者（active participants）を 1000 人まで収容することができるとされたが、この枠は各委員国と諮問機関には 5 つ、オブザーバーとして参加している締約国には 3 つ、その他のオブザーバーには 1 つずつ用意された。また、委員会運営を円滑に進めるため、既存の世界遺産の保全状況や新規資産の登録推薦の審議の際には、時差を考慮し、地域ごとに議題を取り扱っていくことが決められた。さらに秘密投票を実施するために、委員国は自国のパリ駐在者が委員国の代表者として UNESCO 本部に赴き、そこで実施される秘密投票に参加することを保証する必要がある。その他にも、技術的な問題等で委員会開催時に手続規則の第 17 条¹に定められた定足数に至らなかった場合は会合が延期され得ること、参加者には会合参加の 15～30 分前までに当該会合に接続し、

表 1-1 第 44 回世界遺産委員会の委員国一覧

国名	任期	選挙区分
オーストラリア	2017-2021	アジア・太平洋
バハレーン	2017-2021	アラブ諸国
ボスニア・ヘルツェゴビナ	2017-2021	ヨーロッパ・北アメリカ
ブラジル	2017-2021	カリブ・ラテンアメリカ
中国	2017-2021	アジア・太平洋
エジプト	2019-2023	アラブ諸国
エチオピア	2019-2023	アフリカ
グアテマラ	2017-2021	カリブ・ラテンアメリカ
ハンガリー	2017-2021	ヨーロッパ・北アメリカ
キルギス	2017-2021	アジア・太平洋
マリ	2019-2023	アフリカ
ナイジェリア	2019-2023	アフリカ
ノルウェー	2017-2021	ヨーロッパ・北アメリカ
オマーン	2019-2023	アラブ諸国
ロシア	2019-2023	ヨーロッパ・北アメリカ
セントクリストファー・ネイビス	2017-2021	カリブ・ラテンアメリカ
サウジアラビア	2019-2023	アラブ諸国
南アフリカ	2019-2023	アフリカ
スペイン	2017-2021	ヨーロッパ・北アメリカ
タイ	2019-2023	アジア・太平洋
ウガンダ	2017-2021	アフリカ

¹ 規則第 17 条 定足数

第 17.1 条 全体会議において、定足数は委員国の過半数とする。

第 17.2 条 補助機関の会議において、定足数は当該機関の

構成国の過半数とする。

第 17.3 条 委員会又はその補助機関のいずれも、定足数が満たされていない限り、いかなる事項についても決議を行ってはならない。

発言をする時以外はミュートにしておくこと、積極的参加者は発言の際には Zoom の挙手ボタンを利用して発言の意思を伝えること、技術的な問題及び議事手続きの問題を指摘する時にはチャットを利用することなどが周知された。

また、開催期間や時差等の条件が限られている中で円滑に審議を進めるため、以下の議題については現地での審議なしに決議案の採択が行われることとされた。

- 議題 4: 第 43 回世界遺産委員会(バクー、2019)のラポラトゥールによる報告
(Report of the Rapporteur of the 43rd session of the World Heritage Committee (Baku, 2019))
- 議題 5A: 世界遺産センターの活動と世界遺産委員会の決議の実施について、同センターによる報告
(Report of the World Heritage Centre on its activities and the implementation of the World Heritage Committee's Decision)
- 議題 5B: 諮問機関による報告
(Reports of the Advisory Bodies)
- 議題 5C: アフリカの資産、持続可能な開発及び世界遺産に関する進捗報告
(Progress report on Priority Africa, Sustainable Development and World Heritage)
- 議題 5D: 世界遺産条約と持続可能な開発
(World Heritage Convention and Sustainable Development)
- 議題 6: 世界遺産人材育成戦略及び世界遺産カテゴリー2 センターの進捗報告のフォローアップ
(Follow-up to the World Heritage Capacity-Building Strategy and Progress report on the World Heritage-Related Category 2 Centres)
- 議題 8A: 締約国より提出された暫定一覧表
(Tentative Lists submitted by States Parties)
- 議題 8C: 世界遺産一覧表及び危機遺産一覧表の更新
(Update of the World Heritage List and of the List of World Heritage in Danger)
- 議題 8D: 締約国による資産の登録範囲の明確

化
(Clarifications of property boundaries and areas by States Parties)

- 議題 8E: 顕著な普遍的価値の遡求的言明の審査と承認
(Review and approval of retrospective Statements of Outstanding Universal Value)
- 議題 9A: アップストリーム・プロセス
(Upstream Process)
- 議題 10C: 定期報告第二サイクルに係る実行計画について、全ての地域の進捗報告
(Progress report on the implementation of the Action Plans for the Second Cycle of Periodic Reporting in all regions)
- 議題 10D: 定期報告第三サイクルについて、その他の地域の進捗報告
(Progress report on the Third Cycle of Periodic Reporting in the other regions)

このような形で世界遺産委員会の初のオンライン開催が実現するまでには長い道のりがあった。そもそも委員会自体が延期になったことはこれまでなかった²ため、委員会の延期の決定や開催の方法が確定するまでは例年にない調整が必要であった。世界遺産委員会のビューローは 2020 年 4 月、コロナ禍に鑑み第 44 回世界遺産委員会を当初予定されていた 2020 年 6~7 月から延期することを決定し、10 月 16 日のビューロー会合では 2020 年中に同委員会を開催する条件が整っていないと判断した。11 月 2 日には手続規則の第

2.1 条³を一時差し止めるために、第 14 回世界遺産委員会特別会合 (Extraordinary session of the World Heritage Committee) が開催され、手続規則の第 4.1 条⁴に基づき、委員長からビューローに第 44 回世界遺産委員会を延期することが要請された。また、委員会の実際の開催日については、締約国からの聞き取りを元に、第 44 回世界遺産委員会後に保全状況報告書や推薦書のサイクルを正常化すること、手続規則の差し止めは最低限とすること、2022 年の第 45 回世界遺産委員会の議題を第 44 回世界遺産委員会の最後に採択すること、

合する。

⁴ 規則第 4 条 開催日及び開催地

第 4.1 条 委員会は、各会合において事務局長と協議し、次回会合の開催日及び開催地を決定する。開催日及び/又は開催地は、必要に応じて、ビューローが事務局長と協議して変更することができる。

² 中国の江蘇省蘇州市で開催予定であった第 27 回世界遺産委員会や、バハレーンのマナーマで開催予定であった第 35 回世界遺産委員会がそれぞれ SARS やバハレーン騒乱の影響で、パリの UNESCO 本部で開催されたことはあった。

³ 規則第 2 条 通常会期及び臨時会期
第 2.1 条 委員会は少なくとも年 1 回、通常会期において会

ビューローの選挙サイクルに混乱が生じないことを念頭に、世界遺産センターがシナリオを作成し、2021 年の 6～7 月に第 44 回世界遺産委員会拡大大会合 (Extended 44th session of the World Heritage Committee) という形で実施することが提案された。こうしてなんとか実現に向けて条件が調整されたが、この拡大大会合はあくまでも新型コロナウイルス感染症により生じた前代未聞の状況に対処するための例外的措置であり、今後の委員会開催の際に前例として利用されることはないということも確認された。

オブザーバーとして参加しただけでも、こうした様々な事前調整の痕跡を目の当たりにし、コロナ禍においてオンラインで世界遺産委員会を無事開催できた背景に世界遺産センターと開催地である中国をはじめとする関係機関の並々ならぬ苦勞があったことが垣間見えた。

2. 世界遺産の保全状況

議題 7：世界遺産の保全状況 (State of conservation of World Heritage properties) では既に世界遺産一覧表に登録されている資産の保全状況が報告されることになっており、議題 8B：世界遺産一覧表への推薦 (Nominations to the World Heritage List) に次いで一般から高い関心が持たれている。今年は 2020 年に開催予定であった第 44 回世界遺産委員会が延期され、2021 年に第 44 回世界遺産委員会拡大大会合として開催された関係で、2020 年の第 44 回世界遺産委員会及び 2021 年の第 45 回世界遺産委員会での報告を予定されていた議題をまとめて報告することとなった。その結果、議題 7A：危機遺産一覧表に記載された世界遺産の保全状況 (State of conservation of World Heritage properties inscribed on the List of World Heritage in Danger) の 53 案件と、議題 7B：世界遺産一覧表に記載された世界遺産の保全状況 (State of conservation of World Heritage properties inscribed on the World Heritage List) の 202 案件を合わせた 255 の案件⁵について報告することとなった。このように今年は特殊な事情で 7B の審議件数が大幅に増えた⁶が、いずれにしても年々世界遺産の数が増え、報告件数が増えていることから、近年の世界遺産委員会では議題 7 については以下の場合に限り会場で実際に審

議をし、それ以外の場合は決議案の採択のみをすることとなっている。

- 危機遺産一覧表からの登録抹消が提案されている場合
- 危機遺産一覧表への登録が提案されている場合
- 世界遺産一覧表からの登録抹消が提案されている場合

これ以外に審議対象としたい案件がある場合は、委員国は書面にて議長にその旨を伝えるとともに、その理由を明記する必要がある。今年度は文化遺産、自然遺産、複合遺産を合わせ、議題 7A で 4 件、議題 7B で 16 件が審議対象とされた。

2.1. 危機遺産一覧表に登録された資産の保全状況

第 44 回世界遺産委員会で審議された危機遺産の地域的分布は表 1-2 の通りである。例年と同様、アフリカとアラブの件数が占める割合が高くなっている。

表 1-2 地域ごとの危機遺産の件数

	危機遺産の 件数	全体に占め る割合
アフリカ	16 件	30%
アラブ	21 件	40%
アジア・太平洋	6 件	11%
ヨーロッパ・北米	4 件	8%
ラテンアメリカ・カリブ海	6 件	11%

今年の議題 7A では、特に英国の「リヴァプール-海商都市」が世界遺産一覧表から登録抹消となったことが大きな話題となった。「リヴァプール-海商都市」は、イングランド北部の海商都市であるリヴァプールが 18～19 世紀にかけて世界でも重要な交易地のひとつに発展したことを示す資産として、2004 年に登録基準(ii)(iii)(iv)に基づき、文化遺産として世界遺産一覧表に記載された。しかし 2012 年に世界遺産委員会は、開発事業 (Liverpool Waters) が実施されれば世界遺産登録の

⁵ この他、議題 7A にはイラク、シリア、コンゴ民主共和国の危機遺産全体にかかる一般決議が 3 つある。

⁶ 参考までに第 43 回世界遺産委員会では議題 7A は 54 の案件、議題 7B は 112 の案件を取り扱った。

根拠となった資産の属性 (attribute)⁷及び完全性が不可逆的な損害を受けるとして、同資産を危機遺産一覧表に記載した。この際、当該開発事業が承認され、実施された場合には、同資産を世界遺産一覧表から登録抹消することも視野に入れられるとともに、翌年の世界遺産委員会での審議のため、危機遺産一覧表からの登録抹消のための望ましい保全状況 (Desired state of conservation for the removal of the property from the List of World Heritage in Danger, DSOCR)⁸をまとめることも求められた。しかし 2013 年には、コミュニティ地方政府大臣 (the Secretary of State for Communities and Local Government) により国は当該開発事業に関与しないことが決定され、リヴァプール市が開発事業を承認したことが報告された。以降、締約国と諮問機関である ICOMOS は対話を繰り返し、DSOCR の作成に取り組んできたが合意には至らず、毎年世界遺産委員会の場で、開発事業が進展して同資産の状況が懸念される状況であることが報告されてきた。第 44 回世界遺産委員会の決議案では、同資産が危機遺産に登録されて以後、世界遺産委員会は幾度も世界遺産一覧表からの登録抹消を示唆してきた⁹にも拘らず状況が改善されなかったとして、改めて世界遺産一覧表からの登録抹消が提案された。「リヴァプール-海商都市」の審議は、例年どおり長引いた。締約国にもう少し猶予を与えるべきとの意見や、オンライン会合という特殊な状況下で重大な決断を下すべきではないとの見解も示されたが、ノルウェーやバハレーンを中心に、これまで開発事業や建設許可に承認を与えないよう世界遺産委員会で繰り返し要請してきたにも拘らず事業が進展し、既にビルやスタジアムが建設され、ドックが埋め立てられており、世界遺産登録時点の顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value, OUV) が失われてしまっていることが指摘された。日を改めて審議を継続しても結論が出なかったため、手続規則第 41 条¹⁰に基づいて秘密投票を実施

することとなり、パリの UNESCO 本部で実際の投票が行われることとなった。再び日を改め、「決議案に賛成するか否か」、つまり「リヴァプール-海商都市」を世界遺産一覧表から登録抹消するか否かについて、秘密投票が行われた。欠席が 1 件、無効票が 2 件あったため、有効投票数は 18 件で、うち賛成票が 13 件、反対票が 5 件であった。これを受け、「リヴァプール-海商都市」は「アラビアオリックスの保護区」及び「ドレスデン・エルベ渓谷」に続き、世界遺産一覧表から登録抹消された 3 例目の事例となった。

「リヴァプール-海商都市」が世界遺産一覧表から登録抹消される事態になったことは、非常に残念ではあるが、状況的には仕方ないと言わざるを得ない。同資産に現在も何らかの遺産価値があるとしてもそれはすでに世界遺産登録時の価値ではなくなってしまったこと、戦争や自然災害による制御不能な危機とは異なり、論理的には開発事業を止めるという選択肢も存在している中で締約国が開発事業を進めてきたこと、諮問機関との対話不足で誤解等が生じていた訳ではなく、DSOCR を含めて具体的な考え方で合意に至れなかったことに鑑みれば、今回の世界遺産委員会の決断は当然の帰結と言える。世界遺産という制度に則って資産を登録したいのであれば、その制度のルールに従うのは当然のことであるはずだ。

2.2. 世界遺産一覧表に記載された資産の保全状況

議題 7B では、決議原案においては以下 7 件の資産を危機遺産一覧表に記載することとされていたが、最終的にはいずれも危機遺産には登録されなかった。

- カトマンズの谷 (Kathmandu Valley) (ネパール)
- ドナウ河岸、ブダ城地区及びアンドラーシ通りを含むブダペスト

⁷ 属性とは、資産の推薦の根拠として提示される文化的価値が、真正性の条件を満たしているかどうかを評価する際の観点であり、以下のような種類がある。

- 1 形状、意匠
- 2 材料、材質
- 3 用途、機能
- 4 伝統、技能、管理体制
- 5 所在地、周辺環境
- 6 言語その他の無形遺産

⁷ 精神性、感性

⁸ その他の内部要素、外部要素

⁸ 危機遺産一覧表からの登録抹消を実現するために資産が到達すべき目標のこと。

⁹ 決議 36 COM 7B.39、37 COM 7A.35、38 COM 7A.19、40 COM 7A.31、41 COM 7A.22、42 COM 7A.7

¹⁰ 規則第 41 条 秘密投票

秘密投票が 2 カ国以上の委員国から要請され、又は議長によって決定された場合には、決議を秘密投票に付すものとする。

(Budapest, including the Banks of the Danube, the Buda Castle Quarter and Andrassy Avenue) (ハンガリー)

- ヴェネツィアとその潟
(Venice and its Lagoon) (イタリア)
- オフリド地域の自然遺産及び文化遺産
(Natural and Cultural Heritage of the Ohrid region)
(アルバニア、北マケドニア)
- W-アーリー-ペンジャリ保護地域群
(W-Arly-Pendjari Complex) (ベナン、ブルキナ
ファソ、ニジェール)
- グレート・バリア・リーフ
(Great Barrier Reef) (オーストラリア)
- カムチャツカ火山群
(Volcanoes of Kamchatka) (ロシア)

このうち、ネパールの「カトマンズの谷」は東京文化財研究所で技術的支援を実施している関係もあり注目していたが、世界遺産委員会の場では相変わらず残念な議論が続いている。「カトマンズの谷」は、ヒンドゥー教と仏教の7つの遺跡群が登録基準(iii)(iv)(vi)に基づき、早くも1979年から世界遺産一覧表に記載されている。2003年には、急激な都市化を受けて危機遺産一覧表に記載されたが、2007年に危機遺産一覧表から登録が抹消されている。その後、2015年4月25日にネパール中部ゴルカ地方を震源とするマグニチュード7.8の大地震が発生し、多大な人的被害をもたらしただけでなく、世界遺産やそのバッファゾーンの資産にも被害が及んだ。地震直後からUNESCO事務局長の呼びかけもあり、同地域の文化遺産に対して様々な国際的支援が行われてきたが、一部で十分な根拠なしに復元が進められたり、世界遺産委員会が求めてきた遺産影響評価(Heritage Impact Assessment, HIA)が実施されなかったり、復興計画において7つの遺跡群ごとに詳細な指針が定められていなかったりと、依然として問題が多く残されている。そのため、世界遺産委員会やリアクティブ・モニタリング・ミッション¹¹はこれまでも、同資産を危機遺産一覧表に記載し、DSOCRを定めることが有効であると指摘してきた。「カトマンズの谷」は、2015年の第39回世界遺産委員会以降毎年、決議案において危機遺産に登録することが提案され、それが世界遺産委員会の場で

覆されるということが続いている。特に前回の第43回世界遺産委員会では、長時間に及ぶ議論の末に、締約国に最後にもう一度だけチャンスを与えるということで最終的に委員国の意見が一致したはずである。それにも拘らず、今回の第44回世界遺産委員会においても、同資産が危機遺産に登録されることはなかった。

ネパール政府が危機遺産登録を国家の恥と捉え、それを毎回なんとか回避しようとしていることは心情的には理解できなくはない。あるいは、海外の専門家が自国の文化や状況を理解せず、好き勝手に評価していると不満を抱いているのかもしれない。確かに世界遺産という国際的な仕組みである以上、そういった問題があることは否定できないが、いずれにしても世界遺産委員会で指摘されている懸念事項に対応せずに事態を長引かせれば長引かせるほど、世界遺産制度の求める遺産保護の観点からは状況が悪化していることは明らかである。さきの「リヴァプール-海商都市」のように、世界遺産一覧表からの登録抹消の可能性があったとしても世界遺産の制度には従わずに独自路線を進むというのであれば、それもまた一つの選択ではあるが、そうした覚悟なしにただ危機遺産登録を避けようとしているのであれば、その考え方を改め、危機遺産に登録された上でそのメリットも享受して欲しい。

世界遺産条約の本来の目的は危機に瀕している遺産を国際的に援助することである。危機遺産になれば、制度に則り国際的支援を得ることができる上、遺産保護のために具体的に達成すべき項目がDSOCRを通じて明文化されるというメリットもある。事実、2013年以降に危機遺産一覧表から登録抹消され、通常の世界遺産に戻った資産はDSOCRを作成したものだけである。客観的に考えれば、問題点を明らかにし、国際社会の協力を得て対処法を模索する姿勢を不名誉に感じる必要性はないはずである。また、目下の世界遺産制度の潮流に鑑みて、本当に自国の文化に対する理解不足で海外専門家が不当な評価を下しているのであれば、DSOCRの作成過程で直接対話を続けることによって解消できる問題も多いのではないだろうか。

¹¹ 何らかの脅威に晒されている特定の資産について、関係締約国との協議の上で、資産の状態、資産が晒されている危険、資産が適切に修復される可能性などを確かめること、又は改

善措置の進捗を評価することを世界遺産委員会より要請されて実施されるもので、世界遺産センターと諮問機関による世界遺産委員会への公式な報告の一部として扱われる。

世界遺産センターも危機遺産制度が誤った印象を持たれていることを問題視しており、現在、マーケティング戦略等を専門とする業者に、危機遺産登録が否定的に受け止められている理由や、その考え方を肯定的なものに改める方法を検討することを依頼している。第 45 回世界遺産委員会ではその結果が報告される予定であり、今後の動向が期待される。

3. 世界遺産一覧表への推薦

第 44 回世界遺産委員会では 42 件の推薦書が審議に付された¹²。このうち 36 件が新規の推薦書であった。世界遺産委員会開催までに、これらの推薦書は ICOMOS や IUCN の評価を受け、その内容を世界遺産センターが決議案としてまとめる。そして委員会の場でこの決議案の是非が審議されることとなっている。第 44 回世界遺産委員会で審議に付された推薦書の決議案と最終的な決議の結果を表 1-3 にまとめた。

表 1-3 決議案と決議の比較

決議案 \ 決議	記載	情報照会	記載延期	不記載	取り下げ	その他
記載	20件	0件	0件	0件	0件	0件
情報照会	7件	1件	0件	0件	0件	0件
記載延期	7件	0件	0件	0件	0件	0件
不記載	0件	0件	0件	0件	6件	1件

第 44 回世界遺産委員会では、34 件の資産が新たに世界遺産一覧表に記載された。また、世界遺産委員会から情報照会を決議された推薦書は 1 件、その他通常の判定以外の例外的措置を受けた推薦書が 1 件あった。締約国が取り下げた推薦書は 6 件あった。こうした最終的な決議のうち、表 1-3 で色をつけたセルについては、決議案の評価内容が委員会の場で覆っている。

特に、今回は決議案で記載延期を勧告された全ての案件が委員会の場で記載決議されている点が注目される。記載延期は、推薦された資産に OUV が存在する可能性はあるものの、十分に証明できていない場合に下される判定である。記載延期の

判定を受けると推薦書の再提出から審議に至るまで新規推薦と同様の時間が必要となる一方、情報照会の判定では諮問機関の現地調査は必要なく、最短で 1 年で推薦書の再評価を受けることができるため、記載延期勧告を情報照会決議に繰り上げしようとする動きはこれまでも表 1-4 のように見られてきた。しかし、今回はこれがさらに進み、記載延期から記載を得ようとする動きが加速したことは大変残念なことであった。

表 1-4 記載延期が勧告された決議案の最終的な決議 (過去 3 回の委員会)

決議案 → 決議	第 42 回 WHC	第 43 回 WHC	第 44 回 WHC
記載延期 → 記載	2件	2件	7件
記載延期 → 情報照会	1件	1件	0件
記載延期 → 記載延期	2件	3件	0件

今回、決議案で記載延期を勧告されたにも拘らず結局記載を決議された 7 件は、OUV が証明されていない中で登録に至っており、今後議題 7B において資産の保全状況を報告する際に何を拠り所にして資産のモニタリングをするのが問題になっていくはずである。少しでも早く世界遺産登録を実現したいという国内の圧力があることは想像に難くないが、登録後の保管理の報告を考えると、登録時点で遺産の何をどのように守るのかを推薦書の段階で明確にし、国際社会と公約を交わすことが結局は地元自治体や担当者の負担や予算の軽減にもつながると考える。

こうした中で、モンゴルの「鹿石とその関連遺跡-青銅器時代の文化の中心 (Deer Stone Monuments and Related Sites, the Heart of Bronze Age Culture)」は決議案で勧告された情報照会を受け入れ、決議でも情報照会がそのまま採択された。モンゴルが世界遺産条約の手続きを尊重し、再度国内条件を整えた上で次回世界遺産委員会に臨むことを選択したことについて、オーストラリアとノルウェーからわざわざ称賛の意が述べられたことは印象的であった。各国それぞれが抱えている事情はあると思うが、そうした事情に翻弄されず、条約の精神を尊重する国が増えていくことを祈るばかりである。

¹² 登録範囲の変更は含まない。

この他、表 1-3 のような数字には現れてこない問題も生じていた。特に紛糾したのが、オーストリア、ドイツ、ハンガリー、スロバキアの 4 カ国が共同で提出した「ローマ帝国の国境線-ドナウのリーメス (西側区間) [Frontiers of the Roman Empire - The Danube Limes (Western Segment)]」の推薦書に係る審議である。本推薦書は決議案で記載が勧告されていたが、諮問機関の評価後にハンガリーが、作業指針第 152 段落¹³に基づき、構成資産 175 件のうち自国の資産 98 件の推薦を取り下げると連絡したことで、議題 8B の中でもっとも議論が紛糾することとなった。作業指針第 152 段落は、通常は決議案で不記載を勧告された締約国が自国の資産の推薦を取り下げのために活用しているが、今回は決議案で記載を勧告されている中での取り下げという例外的な状況であった。前回の第 43 回世界遺産委員会でも同じ資産の推薦手続きにおいて、諮問機関の評価後にハンガリーの一つの資産が取り下げられたことを受け、決議案で記載が勧告されていたものの情報照会の決議が採択され、締約国間での再調整を促したという経緯があったことに加え、今回は前回は大幅に上回る 98 件の資産の取り下げを行うということが状況をさらに複雑にしている様子が窺えた。諮問機関である ICOMOS は、記載を勧告した評価書はあくまでも 175 件全ての資産が揃った状態での評価であり、ハンガリーが資産を取り下げた場合は ICOMOS の推薦書も有効ではなくなると説明した。世界遺産センターからも、諮問機関の評価後に推薦書がこれほど大規模に修正された事例はなく、現在の推薦内容と一致していない推薦書と評価書に基づき委員会が判断を下したことはないことが説明された。ノルウェー、オマーン、オーストラリア、バハレーンはこれに同意し再び情報照会を決議す

るべきだと主張したが、その他委員国は、同資産が過去に 2 回記載を勧告されている事実や、同資産が「ローマ帝国の国境線」という各地域で推薦が進んでいる大きな枠組みの一部として推薦されていることから全体として見れば価値がないはずがないというような論法で反論し、条約の第 11.2 条¹⁴を根拠に OUV の有無は委員会が最終的に判断する権限を有しているとした法律顧問の解説も拠り所にして、今回の委員会での記載を求めた。議論は混迷を極め、決議案を起草するワーキング・グループも日を跨いで開催されたが、結局コンセンサスには至らず、さらに日を跨いで秘密投票が実施されることとなった。その結果、欠席が 2 件、無効票が 1 件あったため、有効投票数 18 件のうち、賛成 15 票、反対 3 票で「ローマ帝国の国境線-ドナウのリーメス (西側区間)」が世界遺産一覧表に記載されることとなった。

オブザーバーとして参加したため、審議の背景にある各国の思惑を窺い知ることはできないが、公に議論されている内容を見る限りでは同資産の記載を求める委員国の主張には全く同意できるところはなかった。推薦書に記載されている資産の半分以上が取り下げられ、諮問機関が評価できないと判断したものをどういう理屈で登録すべきだと考えているのか、理解に苦しむ。無形遺産条約の審査手続きでは、世界遺産条約で実施されている一部の海外専門家による資産の価値評価にまつわる問題を省みて、敢えて遺産の価値を評価せずに書類審査に徹しているが、今回の事例は結果的に遺産の価値評価も書類審査も経ていない登録であり、かなり問題があったと考える。奇しくも本委員会では、そうした事態を避けるべく作業指針の第 152bis 段落¹⁵の改定が提案されており、これ

¹³ 第 152 段落 締約国は、自らが提出した推薦書の審議が予定されている委員会会合開催前の任意の時点で、推薦を撤回することができる。その場合、締約国は、推薦の撤回の意思について事務局に書面により通知すること。締約国は、当該資産の推薦を(撤回後)再提出することができるが、その場合は、新規の推薦として、第 168 段落に示した手続きとスケジュールに基づいて審査が行われる。

¹⁴ 第 11 条 2 世界遺産委員会は 1 の規定に従って締約国が提出する目録に基づき、第一条及び第二条に規定する文化遺産又は自然遺産の一部を構成する物件であって、同委員会が自己の定めた基準に照らして顕著な普遍的価値を有すると認められたものの一覧表を「世界遺産一覧表」の表題の下に作成

し、常時最新のものとし及び公表する。最新の一覧表は、少なくとも二年に一回配布される。

¹⁵ 第 152bis 段落

国や国境を越える資産の推薦において、1 カ国以上の推薦国が同国内の全ての構成資産あるいは全ての資産の地域を取り下げる意図を書面にて事務局に伝えた場合、事務局はその他の推薦国に直にその旨を通知し、当該資産の推薦手続きは全て終了したものとみなされる。締約国が望む場合は、当該資産の推薦を再提出することができるが、その場合は第 168 段落に示されている手続きとスケジュールに従い、新たな推薦とみなされる。

が無事に承認されたため、今後はこうした事態が避けられることだけがせめてもの救いである。

4. 世界遺産制度の改定の検討

第 44 回世界遺産委員会では、世界遺産の制度そのものについても審議された。議題 11: アドホック・ワーキンググループの作業方法及び成果に対する評価と監査にかかる勧告のフォローアップ (Follow-up to Recommendations of Evaluations and Audits on Working Methods and outcomes of the ad-hoc working group) や議題 12: 作業指針の改訂 (Revision of the Operational Guidelines) などで提案された作業指針の改定は、今後の世界遺産制度に大きな影響を及ぼすものであった。

作業指針の改定に向けて前回の第 43 回世界遺産委員会では、現行の審査手続きについての検討結果を踏まえ、世界遺産一覧表の信頼性と代表性を高めていくもっとも効果的な対策は推薦書作成の初期段階からの締約国と諮問機関の対話を実現することによって質の高い推薦書を委員会の場に提出することだとの結論に至り、予備評価 (Preliminary Assessment, PA) という段階を現在の推薦書の評価段階の前に設けることを決定した。この決定をもとに、地域やジェンダーのバランスも考慮した専門家による小規模な起草グループが設けられ、2020 年には作業指針の改定に向けて具体的な起草作業が進められた。今日の委員会に提出された作業指針改定案はこの起草グループが中心となって作成したものであった。かなり大規模な改定のため、ここで全ての変更箇所を説明することはできないが、PA について規定する第 122 条の概要は以下の通りである。

- 締約国と諮問機関の一層の対話を促すために PA を設ける。
- PA は全ての推薦において必須の手続きである。
- 今後、審査は二段階制となり、PA はこれまでの推薦手続きに先んじて行うべき、推薦手続きの第一段階となる。
- PA は、締約国からの要請を受け、締約国の暫定一覧表に記載されている特定の資産に対して実施される。

- PA の結果は締約国が推薦書を提出する少なくとも 1 年前までに提出する必要がある。
- PA は資産の OUV を証明できる可能性についての指針を示すものである。
- PA の結果の如何によらず、推薦を進めるか否かの決定は締約国の権限に属する。
- 締約国は、作業指針第 168 段落のスケジュールに従い、付属資料 3 の書式に沿って、PA の要請を提出する。場合によっては、諮問機関から追加情報が求められることもある。
- 諮問機関との対話のため、締約国側で専門的な担当者を定めることが推奨される。
- PA は ICOMOS 及び IUCN により、机上検討のみで実施される。現地へのミッションは行われない。
- PA 後には諮問機関から PA 報告書が提供される。そこでは、資産の OUV を証明できる可能性と、それが可能である場合には締約国のその後の推薦書作成の助けとなるような指針や助言が明記される。
- PA 報告書の内容は最大で 5 年間有効である。5 年目の 2 月 1 日までに推薦書を提出しなかった場合は、新たな PA が必要となる。
- 締約国はいつ何時でも PA の要請を取り下げることができる。
- 毎年世界遺産委員会では、PA の要請があったところと PA を実施したところの一覧が報告されるが、その詳細は報告しない。ただし、推薦書が提出された場合は付属資料として PA 報告書が添付される。
- アップストリーム・プロセス (upstream process)¹⁶と PA は別物である。アップストリーム・プロセスは必須の手続きではなく、現地ミッションも可能である。また、アップストリーム・プロセスは特定の資産のこのみならず、締約国の暫定一覧表の改定等に対する一般的な助言も行っている。一方、PA は暫定一覧表に記載済みの特定の資産を推薦するにあたっての必須の手続きで、ミッションは行わない。アップストリーム・プロセスは PA の前に実施すべきも

¹⁶ 世界遺産一覧表への推薦書を提出する前に実施される助言・協議・分析のこと。アップストリーム・プロセスは締約国からの要請に基づいて実施するものであり、必須の手続き

ではないが、締約国は暫定一覧表の策定・改訂を行なう段階から、アップストリーム・プロセスを実施することが推奨されている。

のである。

また、締約国、諮問機関、委員会がこうした改革に対応できるよう、PA は移行期間を設けて導入することとなり、決議 44 COM 12 において以下が決められた。

- 2023 年 9 月 15 日を締め切りとして、まずは自主的な PA の要請を受け付ける。
- 移行期間は 2027 年に終わり、以後 PA は必須となる。2028 年以降は PA のある推薦書のみが世界遺産委員会で審議に付されることとなる。

PA は元々、委員会場で諮問機関の勧告を覆す事例が多いことを問題視して導入された制度である。これが有効に機能することを願っているが、そもそもは委員国が諮問機関の勧告を覆さなければ良だけの話でもある。諮問機関側に問題があり、委員国がその勧告を覆そうとしていることもあることにはあるが、現実には殆どが納得できる理由なしに数の力で勧告を覆している印象を受ける。PA を導入すると推薦書 1 件あたり \$15,732 かかるという試算もある¹⁷が、これは委員国が無理に勧告を覆さなければ不要であった費用である。新たに予算をかけてまで状況を打開すべく導入した PA がどの程度有効に働くか、今後の動向が注目される。

この他、こうした作業指針の大改訂の影に隠れて目立たないが、今回実施された形式的な改定によって、作業指針における一部用語の使い方も整理された。例えば、第 47 条の文化的景観の分類に関する規定で用いられていた category という語は、一般に文化遺産、自然遺産、複合遺産という分類を表す際に用いるもののだとして、type という語に置き換えられた。その他 nomination、nomination dossier、nomination file、nomination process や、site、property、nominated property 等の使い分けについても検証された。これらについては作業指針での統一までには至らなかったようであるが、英語を母語としない日本人にとっては、これらの用語が具体的に何を指しているのかを専門的に検討する機会が得られたのは有益だったと考える。今後もこうした機会に際して専門家に検討を依頼できるよう、国内の推薦書作成過程で判明した、定義の不明確な用語や表現が統一されていない用語をま

めておき、作業指針の改定時に議題として挙げていけば、国内での不要な混乱は避けられるのではないか。

PA の導入と並び、世界遺産制度の改定について今回大きな争点となったのが、議題 8：推薦手続き (Nomination process) で取り扱われた「近年の紛争の記憶に関連する資産 (Sites associated with memories of recent conflicts)」の定義である。

現在、世界遺産の推薦手続きでは、20 世紀の大戦をはじめとする、デリケートな問題に関わる資産を「近年の紛争の記憶に関連する資産」と位置付け、その取り扱いが決まるまでは提出された推薦書の審査を保留している。第 42 回世界遺産委員会では、「近年の紛争の記憶に関連する資産」についての ICOMOS の報告書を踏まえ、何かを記念・記憶するというを哲学的かつ実質的に検証し、それを如何にして世界遺産制度に取り込むかについての指針を設けるため、専門家会合を開催することを決定した。しかし、この専門家会合の見解に対してアフリカ地域を中心に強い不満が持たれている。第 44 回世界遺産委員会では「近年の紛争の記憶に関連する資産」の検討方法と現在の進捗について、アフリカ地域の強い不満が示され、長時間の審議を経て、決議案が大幅に修正された。決議の概要は以下の通りである。

- 既に「近年の紛争の記憶に関連する資産」で世界遺産一覧表に記載されている資産がある。
- 「近年の紛争の記憶に関連する資産」は世界遺産条約及び作業指針の目的と範囲に関連しないものであると考えている専門家もいる。
- 一方、アフリカの専門家で構成された会合では、2019 年から 2020 年にかけての ICOMOS の見解やアフリカの専門家による調査を踏まえ、「近年の紛争の記憶に関連する資産」は世界遺産条約及び作業指針の目的と範囲に関連すると結論づけた。
- 専門家からは、「近年の紛争の記憶に関連する資産」のうち、OUV はないとされた資産でも他の国際的枠組みで取り扱うことを検討できるものもあるとの提案があった。
- 締約国、専門家、諮問機関、世界遺産センターの中でも、「近年の紛争の記憶に関連する資産」が世界遺産条約及び作業指針の目的と範囲と

¹⁷ WHC/21/44.COM/11

どのように関わるかについて、様々な見解がある。

- 「近年の紛争の記憶に関連する資産」となり得る資産の登録基準や分類を締約国自身が表明することを検討する。
- 現在の ICOMOS の見解に含まれていない概念を含める形で「近年の紛争の記憶に関連する資産」の概念の拡大に向けて、ワーキング・グループを設ける。
- このワーキング・グループの最終報告書を第 45 回世界遺産委員会で審議し、総会にて報告する。
- 任意拠出金を含め、このワーキング・グループへの協力を求める。

「近年の紛争の記憶に関連する資産」の概念が現在想定しているものから拡大されれば、当然、日本にとって争点となるような資産が他国から推薦されることも想定される。不要な争い事を避けるため、日本としても今後の対策を検討していく必要があると考える。

5. おわりに

第 44 回世界遺産委員会は初のオンライン開催であったが、概ね順調に進行した。途中機材トラブル等は発生したがいずれも軽微なもので、会合自体に大きな影響はなかったように思う。開催形態の問題よりも、むしろ例年通り、審議の内容の方が課題が多かったと言える。審議の場で諮問機関の見解が納得のできる理由なしに覆されるのはもはや恒例になっており、世界遺産委員会でもこうした問題に対して様々な取り組みを実施してきた。例えば、政治的な圧力に起因するこうした事例を減らそうと、推薦国が委員国であった場合には発言が制限されてきた。また、諮問機関との対話不足に起因する事例を減らそうとアップストリーム・プロセスが導入され、諮問機関の評価報告書の前に中間報告が出され、諮問機関の事実誤認については締約国に反論の機会が提供されてきた。その他、行動規範 (Code of Conduct) のようなもので倫理規範を示すことも検討されてきた。今回新たに導入された PA はこうした問題に抜本的に取り組む大きな制度改正ではあるが、これまでの流れを見ていると楽観的ではいられない。

そうした中で、今回日本から推薦された「北海道・北東北の縄文遺跡群」及び「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」は諮問機関より記載を勧告され、そのまま記載が決議され、安心して審議を視聴することができた。特に「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」は 2018 年の第 42 回世界遺産委員会において諮問機関より記載延期が勧告されたことを受け、勧告を覆すことなく推薦書を取り下げ、再提出ののち世界遺産一覧表に記載されたという経緯もあったため、日本が真摯に世界遺産制度に臨んでいることを行動で示すことができたのではないと思う。自治体にとっては、推薦書を取り下げるといふ決断は決して容易なものではないだろうが、長期的な視点に立ってみれば、資産の保全や予算の削減という意味でプラスになると確信している。日本の「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」や今回のモンゴルの「鹿石とその関連遺跡-青銅器時代の文化の中心」のような選択に追随していく国が増えることを期待している。

次回の第 45 回世界遺産委員会は、ロシアのカザンで開催される。条約成立 50 周年目の記念すべきこの会合で一度初心にかえり、なぜ世界遺産を登録するのかということに各国が真剣に向き合うことを切に願う。



「整備」をどう説明するか



はじめに

西 和彦（東京文化財研究所 国際情報研究室長）

令和3年度世界遺産研究協議会にご参加いただき、ありがとうございます。セッション1：事例報告に先立ち、この研究協議会の目的あるいは背景等についてお話をしたいと思います。よろしくお願いいたします。

東京文化財研究所では、平成29年に第一回の世界遺産研究協議会を開催して以来、その年の世界遺産委員会に関する報告に加え、各回ごとにテーマを決めて議論をおこなってきました。平成29年度には「世界遺産推薦書の評価プロセスと諮問機関の役割」、平成30年度は「戦略的OUV選択論」、そして一昨年の令和元年度は「遺産影響評価とは何か」について議論をおこないました。これらをふまえ、次のテーマとして、わが国の文化財にまつわる「整備」の諸問題を取り上げたいと考えました。

世界遺産に限らず、わが国の文化財の「整備」については、さまざまな現場で精緻な議論を積み重ねてきました。しかし、世界遺産に関係するケースでは、必ずしもすべての場合に海外専門家の理解を得られているわけではありません。長い時間をかけた理論武装を経てもなお、なぜスムーズに理解を得ることができないのでしょうか。もちろん、実際の現場はさまざまです。海外専門家の意見を聞いて、「なるほど確かに言うとおりに」というケースもある一方で、議論を積み重ねて自信をもって説明しているのに、「なぜ？」というケースも少なくありません。一方で、ほとんど疑問の余地なしとしてスムーズに理解を得られるケースもあります。その違いは、どこにあるのでしょうか。

今回の研究会では、こういった点を探っていきたいと考えています。このテーマについては、本来は昨年度に開催する予定でした。しかし、コロナ禍の影響で開催ができませんでした。このため昨年度は、今年度まで続く2ヶ年のテーマとして、まずは議論の前提を整理するために国内の専門家に寄稿を依頼し、報告書を刊行しました。これに続く今年度は、依然として続くコロナ禍の影響を考慮して、動画配信のかたちを

取ることにしました。通常であれば、リアルタイムのウェビナー形式を取るところですが、内容自体が翻訳の問題を含むため、同時であれ逐次であれ通訳を介した公開では内容の理解が難しくなる可能性があると考えました。このため、英語で語られた内容については、日本語の字幕を付すことにしました。翻訳に付き物の難しさがすべて無くなるわけではありませんが、少なくとも誤解のない伝え方を考える時間的余裕をもつことができると考えています。

この動画では、国内事例を2カ所、まず最初に岩手県一戸町の御所野遺跡について、御所野縄文博物館館長の高田さんにお話をいただきました。つづいて福井県福井市の一乗谷朝倉氏遺跡について、元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館館長の吉岡さんにお話をいただきました。この二つのケースは、長期にわたって一貫した方針のもと整備を積み重ねてきた、いわばベストプラクティスと考えられます。つづいて、2名の海外専門家の方に発表をお願いしました。最初は、英国の事例について、ヒストリック・イングランドのダンカン・マッカラムさんにお話をいただきました。つづいて、北米でのご経験をふまえて整備をどう考えるかについて、カルチュラルサイト・リサーチ・アンド・マネージメントのダグラス・コマーさんにお話をいただきました。

整備の概念は広範で、また、文化財の分野によってもその意味するところは違います。今回の研究協議会にあたっては、例えば近代の遺産の整備など、さまざまな興味深い観点がありえたものの、あまり議論が拡散しないように考古学的遺跡における整備を中心に据えて議論を展開することとしました。「整備」という言葉が意味する内容のうち便益施設については、もちろんその配置・デザイン等を熟慮する必要は言うまでもありませんが、その是非自体が問題になることは少ないように感じています。一方、遺構表示や復元展示を含むインタープリテーションのあり方は、遺産の

保護と活用の本質に直接かかわる問題と認識されることが多く、特に地上に遺構がない考古遺跡における価値の伝達方法や、復元建物が遺跡のオーセンティシティに影響するか否かについては、日本の多くの史跡が抱える課題であり、ひいては木造文化圏の国々に広く共有され得る問題意識と思われるからです。

今年度は、コロナ禍の影響で第44回世界遺産委員会が完全オンラインでおこなわれました。こちらについては、例年研究協議会でご報告していたものに替えて、報告書に掲載する予定です。

最後に、あらためてこの研究協議会の意図するところについて、一言付け加えさせていただきます。「整備を海外にどのように説明するか」というタイトルから、いろいろなイメージをもたれると思います。ただ、我々としては、「うまく説明して逃げ切る」ことを意図しているわけではありません。そのような近道はないと言うべきですし、近道を模索することが望ましいわけではありません。むしろ、理解を得ることが難しいとするならば、そのギャップはどこにあるかを考えて、世界遺産の現場でよりよい理解を得るためだけでなく、ひいては整備そのものについても考える機会としたいと考えています。前にお話ししたように、このセッション1の公開後、セッション2にむけてご意見・ご質問をいただきたいと考えています。そのすべてにお答えすることは難しいかもしれませんが、積極的な参画をお願いしたいと考えています。それでは、よろしくお願いいたします。

変化する遺跡公園

— 実験・検証による整備と活用 —

高田 和徳（御所野縄文博物館 館長）

はじめに

こんにちは。御所野縄文博物館の高田です。ここは、岩手県一戸町にある縄文時代中期の遺跡である御所野遺跡です。本日は、この遺跡の整備と活用についてお話をさせていただきます。

1. 遺跡の概要

御所野遺跡は、岩手県の内陸北部に位置しています。北上山地を水源として青森県東南部の八戸湾に注いでいる馬淵川沿いの高台にあります。遺跡は、東西に長く突き出た段丘のほぼ全面に広がっており、その面積は7.7ヘクタールとなっております(図3-1)。遺跡は、縄文時代中期後半の集落址ですが、

遺跡中央部にこのような配石遺構群があり、その周辺に竪穴建物址などの遺構がいくつも分布しています(図3-2)。もともとこの場所に工業団地が計画され、その事前調査として発掘調査が始まりました。ところが、大規模な配石遺構群が発掘されたこともあり、遺跡を保存しようという動きが大きくなってきました。遺跡を保存するか、あるいは開発するかということを最終的に判断するために、遺跡の全体像を明らかにしようということになりました。そのため、遺跡全域でこのようにそれぞれの地籍ごとに調査区を設定して、遺構の分布を確認するための調査を行いました。図(3-3)の中の赤い部分が、縄文時代の竪穴建物址や土壇などの遺構です。この中のいくつかを、内容確認のために掘り下げていま



図 3-1 御所野遺跡の位置と立地



図 3-2 発掘された配石遺構群



図 3-3 遺構分布の確認 (東側調査区)

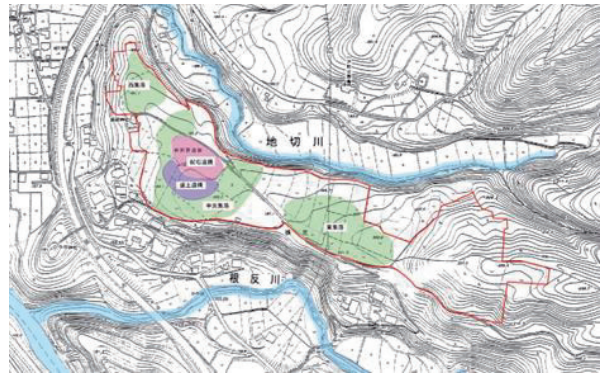


図 3-4 御所野遺跡の集落概念図

す。調査の結果、遺跡の全体像が明らかになり、たいへん貴重な遺跡だということで遺跡は保存されることになりました。中央部の北側は、大規模に削平されており、その削平した土が南側に盛られています。削平された場所は墓となり、最初に紹介した配石遺構がいくつも分布し、土が盛られた南側には焼土が分布し、祭祀的な遺物が数多く出土しています（図 3-4）。御所野遺跡は、このような中央部の墓を中心として、東西に居住地が広がる大規模な遺跡です。このような遺跡を整備することになりました。

2. 整備計画の概要

整備計画の前に、基本構想を策定しました（図 3-5）。この遺跡は、当初から遺跡とともに周辺の自然環境が素晴らしいという評価をいただいていたこともあって、基本構想の中で周辺の自然も一緒に保全しようということになったのです。史跡指定地部分は「史跡保存・復原地区」、その周辺を「周辺整備地区」、その外側を「縄文景観保全地区」として、さらに外側の森や山の自然環境もそのまま保全しようということになり、「環境保全地区」として設定しました。このような構想に基づき、2013年にはこの地域全体が一戸町景観条例の特定景観地区ということになり保護されることになりました。さらに遺跡が世界文化遺産の候補となったことをうけて、「史跡保存・復原地区」の大半を「プロパティナー」、その他の地域をそのまま「バッファゾーン」としています。

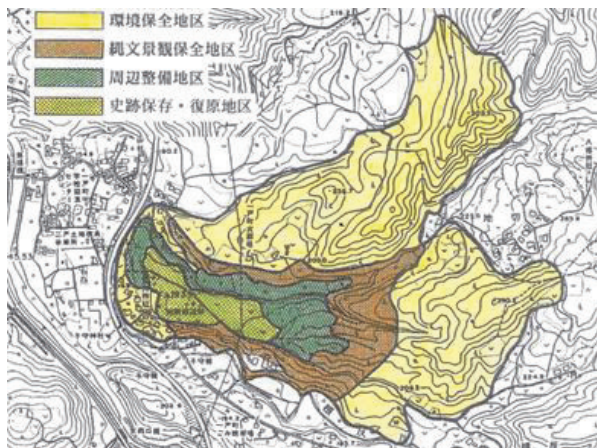


図 3-5 整備基本計画
(御所野遺跡整備基本構想 1995)

備地区」、その外側を「縄文景観保全地区」として、さらに外側の森や山の自然環境もそのまま保全しようということになり、「環境保全地区」として設定しました。このような構想に基づき、2013年にはこの地域全体が一戸町景観条例の特定景観地区ということになり保護されることになりました。さらに遺跡が世界文化遺産の候補となったことをうけて、「史跡保存・復原地区」の大半を「プロパティナー」、その他の地域をそのまま「バッファゾーン」としています。

3. 建物復元と実験考古学

整備計画が確定してから、建物址などの復元のための発掘調査を行いました（図 3-6）。御所野遺跡は、縄文中期中頃から中期末までの遺跡ですが、その時期をⅠ期からⅤ期まで時期区分しています。そのうちここ西側では、Ⅱ期からⅤ期の竪穴建物址を調査しました。図に青で示したⅤ期の遺構は、いずれも焼失住居址で、大型建物址を中心として中型建

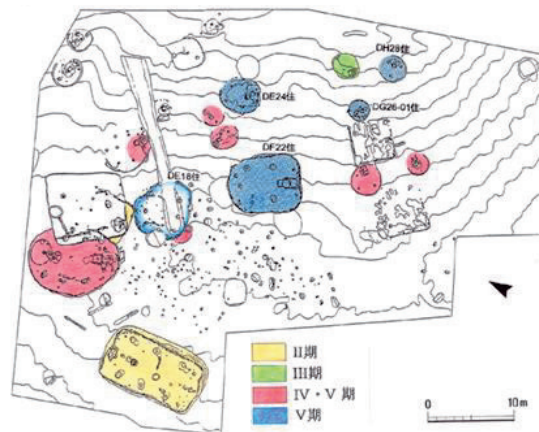


図 3-6 建物復元のための発掘調査

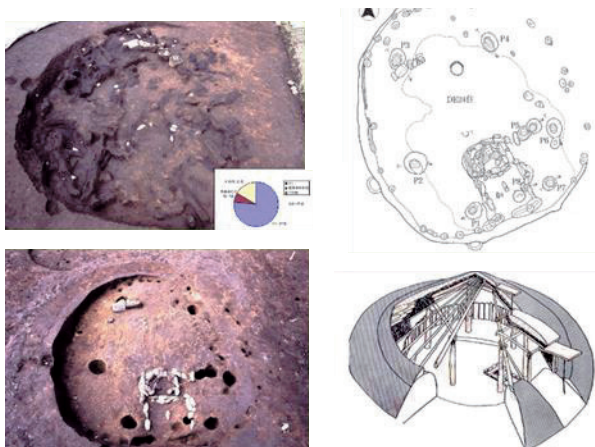


図 3-7 中型竪穴建物跡

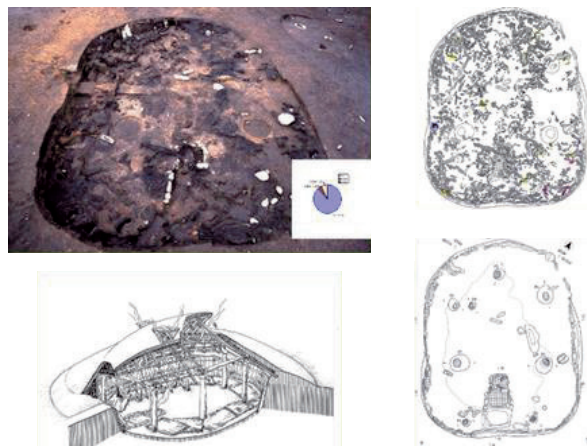


図 3-8 大型竪穴建物跡

物址が1棟と小型建物址が2棟あり、以上の遺構を一時期のまとまりのある遺構群として捉え、そのまま復元することにしました。

4棟の遺構を紹介します。これ(図3-7)は、竪穴の直径が4~5メートル、床面積が15平米ほどの中型の竪穴建物址です。出土した炭化材のうち、120点ほどを樹種同定しましたが、大半がクリ材でした。柱穴は6本で、その位置とともにその中に残る柱の痕跡などから、柱の太さなどの情報も得られています。この遺構の調査には建築史の専門家も参加しており、図のような復元パースを作成しています。このような復元パースも繰り返し検討し、議論しながら、細部については随時その都度内容を変更しています。

これ(図3-8)は、直径7~8メートルで、床面積が48平米ほどの大型竪穴です。炭化材が最も良好に残っており、詳細に調査することで、屋根に土が載っているということが分かりました。柱穴は、入口正面の奥に1本、その両側に3本ずつの7本あり、柱痕跡も確認しています。500点ほどの樹種同定をしましたが、その大半がクリ材でした。同じく、いくつかのパースを作成しています。



図3-9 土屋根竪穴と実験復元

復元図ができた段階で、実験的に建物を復元してみました(図3-9)。土屋根竪穴の場合、縄文時代の遺構としては初めての復元ということもあり、竪穴内の居住環境を確認することと、あわせて屋根の角度とか土量、さらには土屋根の下地などについて検証する必要があったからです。御所野遺跡では、このような実験復元を3回行っていますが、これは2回目の竪穴です。実験では、発掘された竪穴と同じ規模に土を掘り、その中に柱穴を掘って柱を立てます。柱の上に梁桁などの構造材を設置して、扱首や棧などで屋根の下地を作ります。そして、その上に樹皮を敷いてから土を載せて完成です。

実験で復元した竪穴建物では、2年間、竪穴内の温湿度や内部環境などを観察しました。土屋根の場合、当然湿度は高くなりますが、竪穴の中は冬でもほんの少し火を焚くだけで暖くなるし、夏は涼しく快適な空間となることが確認できました。建物を建ててから2年後、焼失実験を行っています(図3-10)。実験の結果、土屋根竪穴の場合、すぐ酸欠状態となり、そのままでは建物は燃えないことが分かりました。焼失実験した竪穴は、そのまま残してその後の経過を観察していますが、右下の写真のよう



図3-10 焼失実験

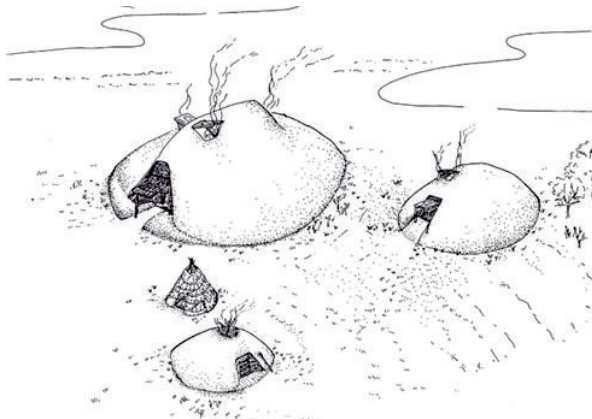


図3-11 復元予定の竪穴建物群

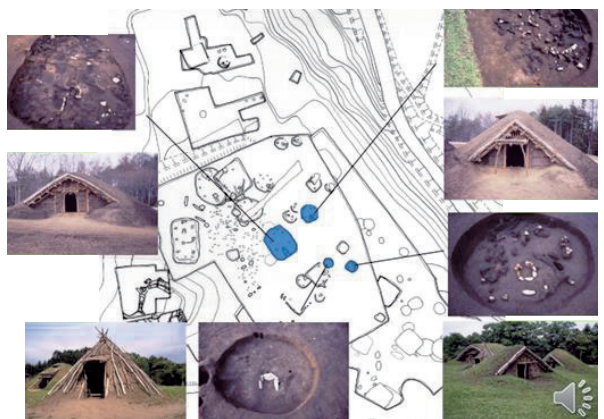


図3-12 建物復元

に 20 年後の今の状況は、柱などの構造材がほとんど腐ってしまい、現在はこのような窪地となっています。

これ(図 3-11)は、西側地区の建物復元のイメージです。これを基に、整備の設計図を作成しています。御所野遺跡の場合、復元建物はいずれもそれぞれの遺構の上に構築しています(図 3-12)。各建物は、いずれも縄文人の生活の場であり、建物の形や規模、構造だけでなく、周辺の自然環境やその他の施設などに関わって利用されたと考えた場合、その建物が本来あった場所に建てる必要があると考えたからです。発掘調査で検出した遺構と復元した建物との関係は、このようになります(図 3-13)。調査した遺構の上に保護盛土をして、同じ場所の上に同じ規模で、できるだけ正確に復元建物を構築しています。発掘調査された遺構とその復元建物との関係は、このようになります(図 3-14)。上が発掘調査の状況、下がその上に作られた復元堅穴です。堅穴建物址の位置とその規模、あるいは炉址などの施設、さらに柱の位置や太さなどを発掘調査で得られた情報から忠実に復元しています。発掘調査の状況は、現場では見ることができないため、作成したガ

イドアプリで現地の復元建物と比較しながらタブレットなどで見ることができます。

ここ(図 3-15)は、中央部北側の墓域です。配石遺構は、本来の遺構をそのまま露出しており、それに対応する掘立柱建物址、さらに柱列などはいずれも遺構の上の同じ場所にこのように復元しています。このように復元することで、それぞれの遺構の関係をよく理解できると思います。

縄文時代の建物の復元は、基本的には限られたいくつかの情報を基にして推定せざるを得ません。したがって復元建物は、それで完結するのではなく、あくまでも現段階での想定の一つと考えるべきです。したがって、その後の経過観察や修理などで検証したり、新たな情報を得ながらその精度を高めていきたいと考えています。御所野遺跡では、新しい情報が得られた段階で、できるだけそれを取り入れるようにしています。この変化の過程を研究対象とすることが重要だと考えているからです。上の写真(図 3-16)は、左が整備当初に復元した西側の土屋根堅穴ですが、10 年以上経過してから新たに得られた情報を基にして、右のように作り変えました。このように復元前の実験から復元、さらにその後の

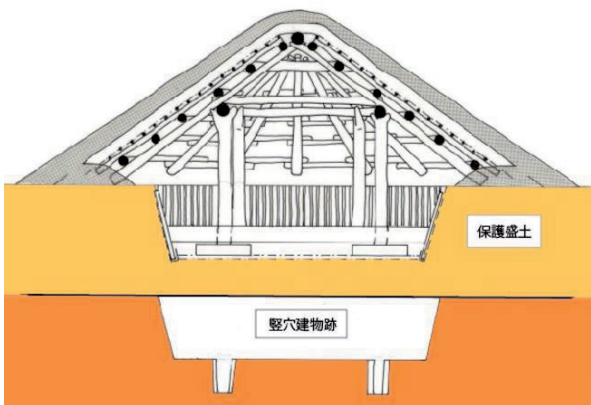


図 3-13 建物復元の方法



図 3-14 発掘された遺構と復元堅穴



図 3-15 中央部の配石遺構と掘立柱建物跡

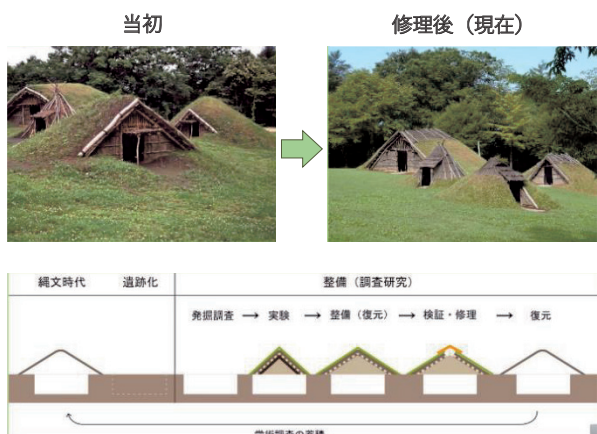


図 3-16 復元堅穴の変遷と御所野モデル



図 3-17 史跡公園全体図

経過観察や修理などを検証して、新たに復元するというのを繰り返しながら復元の精度を高めようとするのが御所野遺跡の建物復元の方法です。

4. 縄文里山づくり

このようにして整備した現在の御所野縄文公園です(図 3-17)。中央の薄い緑の部分に遺跡に相当しますが、この中で縄文時代のムラを復元し、その周囲で自然景観を復元しています。次に、この自然景観の復元について紹介します。御所野遺跡では、発掘調査で得られた情報を基にして、縄文時代の景観をつくる取り組みを行っています(図 3-18)。このような景観は、縄文人の活動によって創られた人為的な景観として考えられることから、「縄文里山」と呼んでいます。それぞれの地区を設定して、地区ごとに伐採や植栽などを繰り返して、景観づくりとその変化を観察する取り組みです。最初は、森づくりのために、まず必要のない樹木をこのように伐採します(図 3-19)。それとともに、縄文人が利用したと考えられる樹木の苗を作り、それを育てて植えます。このような活動の中心になっているのが、「御所野愛護少年団」や三つあるボランティア団体などの会員で、そのほか一般町民も参加しています。育てた樹木は、右下のように手入れをします。

御所野遺跡では、いろいろな実験を行っています。そのいくつかを紹介します。これは、石の斧で木を伐採する実験です(図 3-20)。実験を通して、それぞれの樹木の質感や伐採の時期、さらに方法などについて知ることができます。伐採した樹木を1年以上、森で乾燥させてから、竪穴内で薪の消費実験を行いました(図 3-21)。これは、それぞれの季節ごとにどれほどの薪を必要とするのか、あるいは薪にはどの木材が適しているのかということなどを確認するために行っています。実験では、クリ、ナラ、さらには針葉樹のカラマツの3種類を1週間に1回燃やし、それを1年間継続してみました。その結



図 3-18 縄文里山づくり計画図



図 3-19 縄文里山づくり事業



図 3-20 石斧での伐採実験



図 3-21 竪穴建物内での薪燃焼実験

果、竪穴内で使用する薪にはナラが最も適していることが分かりました。建物の建築材として利用されるクリは、燃えている途中で大きく弾け飛ぶことなどから、竪穴内での薪としての利用はできないことが明らかになっています。そのほか、大まかな年間の薪の消費量についても、資料が得られています。

竪穴建物址を復元するためには、大量の縄が必要です。直径4～5メートルの竪穴建物の場合、1,400メートルほど必要でした。御所野遺跡では、全国の縄文時代の遺跡から出土した縄のうち、シナノキの樹皮から採取した繊維で作った縄を採用しており、毎年、縄づくりやその体験授業などを行っています（図3-22）。

発掘調査で得られた資料や整備前からほぼ20年間にわたって実施してきた実験研究、さらには周辺の民俗調査などで得られた情報などから、縄文景観を復元するための「御所野縄文里山カレンダー」を作成しています（図3-23）。春早くから夏、秋、さらには冬と、それぞれの季節ごとに縄文人の活動について考えることにしています（図3-24）。このような「縄文カレンダー」を実施することで、縄文人にとってそれぞれの季節ごとの活動が重要で、その活動を繰り返すことによって継続的な安定した生活が営まれたのではないかと考えるようになりました。実は、自然の営みは毎年同じではなく、縄文人にとって重要な食糧であった木の実なども、年によっては全く収穫できない年もあります。そのような自然の変化に縄文人がどのように対応したのか、このような課題も「縄文里山づくり」の中で見えてきました。

周辺の自然も、毎年変化しています。例えば、縄文人が利用した木材も一度伐採して利用すると、10年から30年は同じ場所では利用できません（図3-25）。つまり、短期間に繰り返しできる循環とともに、長期の時間を経過しないとできない循環もあります。自然と一体となって生きた縄文人にとって、短期間の戦略とともに、長期の視点での戦略も必要だったということが分かります。このようなことも、「縄文里山づくり」で実感できました。

以上が、御所野遺跡の史跡整備とその活用の状況です。御所野縄文博物館では、発掘調査の情報だけではなく、このように遺跡を整備することで縄文文化を知ることができると考え、実践しています。以上で私の発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。



図3-22 縄づくり実験（樹皮の繊維の採取）



図3-23 御所野縄文里山カレンダー



図3-24 復元された史跡公園の四季

	燃料材	コナラ ミズナラ
	道具	コナライヌガヤ ユズリハ
	建築材	クリ(小型 10~20年) (中・大型 10~30年) (巨大木柱 80~100年)
	容器	ケヤキ サクラ カバノキトチノキ
	木ノ実	トチノキ クリ クルミ コナラ

5年 10年 15年 30年

図3-25 循環する縄文里山の森

史跡公園を目指した一乗谷の遺跡整備

吉岡 泰英 (元 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 館長)

はじめに

史跡公園を目指して進めてきた一乗谷の遺跡整備の概要と、これに建築史の立場から長年関わってきた私の考え方をお話したいと思います。

一乗谷は、戦国時代に越前の覇者となった朝倉氏が領国支配の拠点としたところです(図4-1)。昭和40年代、一乗谷で農業構造改善事業が始められ、遺跡は危機を迎えましたが、地権者や関係者の努力によって昭和46年、上下の城戸で区画された「城戸ノ内」と山城を含む周囲の山278ヘクタールという広い地域が、国の特別史跡に指定され、保存されることとなりました(表4-1)。福井県は、福井市と協力して史跡公園化する方針を定め、継続して事業を実施してきています。また、庭園群は平成3年に特別名勝に、出土遺物2,343点も平成19年に重要文化財に指定されています。

1. 一乗谷の史跡公園化事業

事業は、「史跡公園基本構想」に基づいて、計画に従いながら「朝倉氏遺跡調査研究協議会」の指導助言を得て、考古学、文献史学、造園学、建築史学の各専門職員で構成される県の「一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所」、現在の「資料館」が調査、研究、整備を実施しています(表4-2)。地元住民は、「朝倉氏遺跡保存協会」を組織し、案内や管理業務に主体的に関わっています。史跡公園化事業は、観光や見学の目的をもって史跡を訪れる人々に、整備された遺跡、遺跡のおかれた自然景観、遺跡の発掘調査作業、出土遺物の展示など多様な経験の場を提供し、これがレクリエーションの契機となり、一方、地域にとっては生活環境の整備と結びつき、歴史をとおして郷土を見直し、愛着を深め、新しい地域づくりに寄与することを目指しています。

遺跡は、遺構が高密度に集中する平地部と山城や櫓等の遺構が点在する山地部に大別され、平地部には上



図4-1 一乗谷全景(北から)

表4-1 文化財指定の経緯

特別史跡指定	昭和46年(1971)	7月29日	面積278ha
特別名勝指定	平成3年(1991)	5月28日	
重要文化財指定	平成19年6月8日		出土遺物2343点

表4-2 史跡公園化事業の計画、体制、手法

基本とする計画等

「朝倉氏史跡公園基本構想」	(1972)
「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」	(1974)
「一乗谷朝倉氏遺跡再整備等計画」	(2021)
「一乗谷朝倉氏遺跡保存管理計画」	(1994) 改定(2011)
「一乗谷朝倉氏庭園保存活用計画」	(2020)

事業の体制等

県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館(旧組織名一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所)	
福井市一乗谷朝倉氏遺跡管理事務所	(一社)朝倉氏遺跡保存協会
朝倉氏遺跡調査研究協議会	

整備の手法

平面復元、立体復元、修景、植生復元、山林保全、施設等

下の城戸、朝倉館を中心とした庭園を有する一族の大規模な居館群、整然とした比較的規模の大きい重臣屋敷、寺院、小規模な町家群などがあり、また、ここには50数戸の集落も含まれています(図4-2)。谷内の豊かな自然環境と遺構群を考慮して史跡内をゾーニングし、整備を進めてきました。史跡公園として必要な見学者の拠点となるビジターセンターや、研究成果・出土品等を展示解説する資料館も設けています。

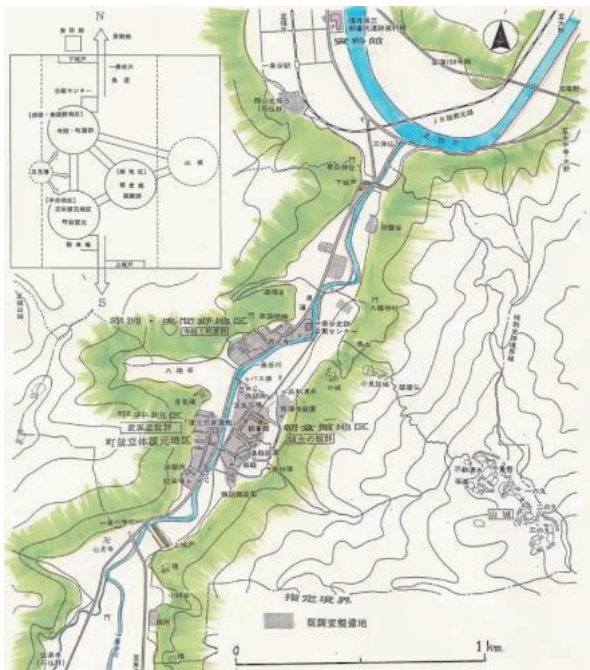


図 4-2 全体計画図

一乗谷の特徴的な整備手法は、「基本構想」で示された“遺跡をして自らを語らせる”という理念に基づき発掘調査により検出した溝や石垣、建物跡、庭園遺構などの遺構を若干の補修を行った上で露出展示する「平面復元」という手法です(図 4-3~4-5)。また、「立体復元」や発掘調査を前提としない「修景」などの整備手法も取り入れています。山地部では、「山林植生復元」、「山林保全」の整備手法を用いる計画をもっていますが、公有化が進んでいないこともあって未着手です。

これまで半世紀にわたって実施してきた諸事業による成果、一乗谷朝倉氏遺跡の価値と魅力はどこにあるのでしょうか。私は、以下の4点に集約できると考えています(表 4-3)。

第一は、広域的な指定による保存が実現していることです。「城戸ノ内」という中核部のみならず、山城を含む周囲の山陵を一体として保存対象としたことで当時の地形がそっくり景観として保存され、谷地形という特性も相まって、地形的にもまとまりがある自然景観に恵まれた環境に遺跡はあります。

第二は、継続的な事業を可能とした学際的な調査研究体制の構築です。考古学のみならず、文献史学や造園学、建築史学からなる学際的な調査研究の組織体制こそが事業の根幹であるといえます。

第三は、継続的・面的な発掘調査と検出遺構の保存整備を実施してきたことです。これまでに実施した発掘調査面積は 16 ヘクタール、整備面積は 17 ヘクタ



図 4-3 平面復元整備 (朝倉館跡)



図 4-4 平面復元整備 (赤沢地区)



図 4-5 特別名勝庭園群

表 4-3 事業展開 (調査・整備) とその成果

- ①広域的な指定による保存が実現
指定面積278ha →景観の保存
地形的にまとまりがあり、景観的にも優れている
- ②学際的な調査研究体制の構築
組織体制—考古学、文献史学、造園学、建築史学
- ③継続的・面的な発掘調査と検出遺構の保存整備を実施
事業の継続半世紀、発掘調査面積16 ha、整備面積17 ha
- ④良好に遺存する遺構と質量ともに豊かな遺物
170万点の出土品、2343点重要文化財指定

ールに及びます。毎年どこかで発掘調査を行い、日々新たな発見が得られています。

第四は、良好に遺存する遺構と質量ともに豊かな遺物です。館跡や庭園など個々の遺構は、石を多用しており分かりやすく、またよく残されています。加えて、これらが面として広がりをもって残されている点は、他に例がありません。出土遺物は170万点に及び、当時の生活を具体的に示す多様なもので、2,343点が重要文化財に指定されています。

2. 一乗谷の町並立体復元

次に、一乗谷で実施した「町並立体復元」について説明します(表4-4)。遺跡における建物の復元にかかわる考古学発掘資料は、直接的に建物にかかわる資料「直接資料」と、建物を類推するうえで重要な間接的な資料「間接資料」に分けることができます。「直接資料」は、一般的に遺構と呼んでいるもので、礎石、柱穴など原位置を保つものと、柱、壁、金具など移動が認められる建築部材を主とする遺物に分類されます。「間接資料」は、全体地形や遺構の配置、地業など、個別建物用途の推定に欠かせません。建築平面を考察するうえで重要な資料です。出土品やこれらの分布は、建物の機能、利用者・住人等の階層、技術や文化等の社会的背景を推定する材料となります。私は、「直接資料」と同じように注意を払わなければならないのが「間接資料」だと考えています。

「町並立体復元事業」では、200メートルの道路を中心に、これに面する武家屋敷群の主として門と塀、そしていくつかの町家群を再現しています(表4-5)。

表4-4 建物復元の考え方

発掘調査から建物復元へ
○考古学発掘資料
・直接資料
遺構—礎石、柱穴、地覆石、狭間石、基壇、土間叩き、貼り床、転し根太(痕)、炉・竈、井戸など(—原位置)
遺物—柱、梁、敷居、壁、建具、瓦、金具など(—移動)
・間接資料—全体地形、遺構配置、出土品など
○関連資料
現存建物、絵画資料など

表4-5 建物復元の考え方

○武家屋敷(門と塀)
○町屋
間取り、構造など
○出土資料
建築部材(柱、敷居など)
○その他
基本寸法など



図4-6 復元地区模型(全体、1/50)



図4-7 復元地区模型(部分、1/50)

なお、再現しなかった武家屋敷群の内部を含めた詳細な模型を作成し、対象地区全体の様子が理解できるように努めています(図4-6,4-7)。この立体復元対象を選んだのは、都市遺跡としての一乗谷の特徴をよく示し、まとまりがあること、遺跡全体の位置関係がよいことも重視しました。朝倉館も復元を検討しましたが、ここは極めて保存状態がよく類例のない唯一の遺構であること、検出された礎石群や庭園遺構そのものが訴えかける力を有していること、全体を再現するには多大な経費と時間が必要なことから対象とはしませんでした。

復元した門遺構は、礎石4で構成されるものと掘立柱2で構成されるものがあります(図4-8)。礎石4の上に4本の柱を立てる門は、薬医門と高麗門が、掘立柱2本を立てる門は棟門と冠木門がありますが、当時の絵画資料などの例を参考にそれぞれ薬医門、棟門としました。棟門形式と考えた掘立柱2本の遺構を詳しく見てみると、柱穴の間隔は8尺であり、その柱穴形状がほぼ8寸角でした。これは、当時の整った建築において木割という柱間、柱の大きさを基準として建物を構成する部材に比例関係があるということと合致します。

次に、町家の一例です(図4-9)。建物は、道路に面した敷地面積約6メートル、20尺ですが、奥行約15メートル、50尺の規模で、建物の礎石は、この屋敷境界の溝側石に接するようにほぼ敷地間口いっぱいに配置されており、一乗谷で一般的な1間=6尺2

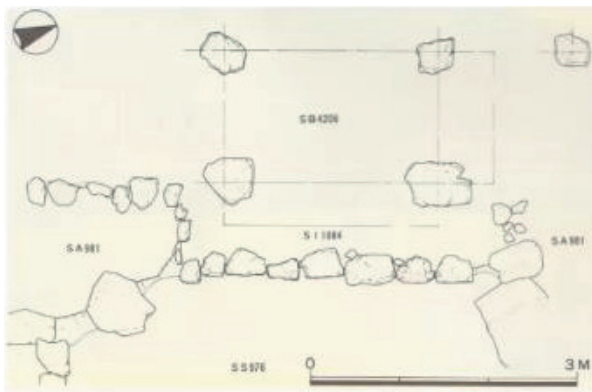


図 4-8 門遺構実測図



図 4-9 町家建物発掘写真

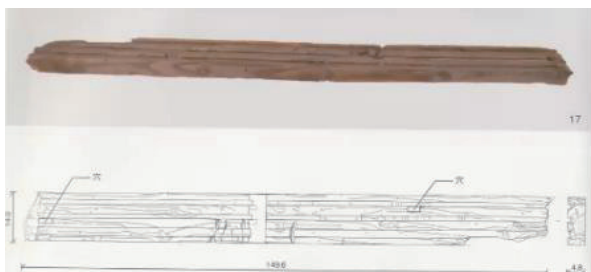


図 4-10 出土した敷居

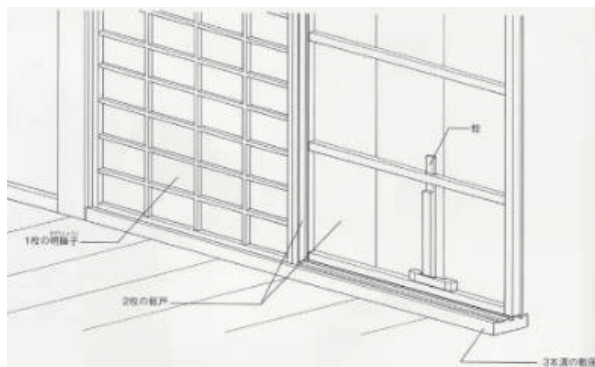


図 4-11 想定される建具

寸を基準とする正面2間半、奥行3間半の規模です。注目されるのは、正背面の中央の礎石です。2間半をちょうど二分する位置にあり、他の礎石に比べやや大振りであることから、建物の棟を支える柱を受ける礎石と推定するのが合理的であると考えました。「洛中洛外図屏風」などの絵画資料にも、こうした妻の柱が棟まで伸びて棟木を受ける構造の町家がみられます。この建物の特徴として、内部の奥半に大きな甕を並べて埋めた遺構があります。埋甕を用いる職業としては、染物業、醸造業などが考えられますが、対象とした屋敷は小規模であり、戦国期の都市で最も多かった職業が染物業であること、埋甕に認められるセット関係などを総合的に考え、染物職人の住まいとしました。

具体的な建物構造について直接示す資料は、ほとんどありません。ただ、構造については当然、前述したように正・背面を棟持柱とした妻入りが前提となります。周囲の礎石列と雨落溝との関係から、軒の出も決まります。他の部分については、数十年に及ぶ一乗谷の調査によって得られた建築部材などで補いました(図4-10, 4-11)。屋根をどのようにするかを考えることも重要でした。隣接する建物との間隔が三尺程度と狭いことから、茅葺屋根の厚みと軒の出を考慮すると収まりが困難ですが、板葺とすれば矛盾は生じません。また、この時代の町家の実例は残されていませんが、絵画資料等では板葺が一般的です。こうした点を併せ考え、割板を用いた板葺としています。出土した敷居からは、その溝の深さ、幅、配列などから、板戸と障子を用いた建具形式であったことに加えて、建具の構造の細部や戸締りの形も想定することもできました。また、壁材からは、その厚さと柱の太さの関係から真壁構造であったこと、下地となる小舞に萱が用いられていたこと、仕上げは荒壁、中塗仕上げなど多様であったことも知られます。和釘、塼止、錠前などの建築金物も多彩です。畳の断片も検出されており、その普及も窺われました。

長年の調査により一乗谷の建物は、基準柱間寸法が1間=6尺2寸でほぼ統一されており、専門の技術者集団によって建てられていたと考えられることは重要でした(図4-12, 4-13)。加えて、極めて多量の生活用品、茶道具、文房具、工具などが出土しており、都市としての文化の高さも知られます。こうしたことを総合的に判断すれば、一乗谷の建築技術の水準は、極めて高度であったと考えています。

私は、こうした遺跡整備としての建物復元に際し、重要なのは以下の4点だと考えています(表4-6)。

第一は、遺跡調査への建築史関係者の関わり方です。私が当初から発掘調査に従事し、その調査中は常に上部構造である建物を考えながら必要な調査を実施してきました。多くの復元事業において、建築史専攻者が参加するのは発掘調査終了後ですが、そのため復元考察を行う場合、発掘調査結果のみから判断することを余儀なくされ、困難に直面することが多々あります。一例を示せば、建物遺構において、ある箇所柱痕跡がないという調査結果が示されたとしても、それが当初から柱がなかったのか、それとも何らかの事情、削平とか調査における見落としですが、そのことによって検出されなかったかによって柱なしの構造、あるいは柱が存在したという正反対の結果が生じます。

第二は、「間接資料」の重要性です。基本的に、建物遺構が全体の中でどのような位置にあるのかを検討せず、その建物の性格を考えることはできません。建物のみからその機能の特定はできないということです。建築は、社会環境の反映です。階層や地域などにより、技術・材料の違いを想定しなければなりません。

第三は、復元のための基礎作業と学際的取り組みです。考古学発掘資料の事例は、目覚ましく増加しています。蓄積された建物復元の基礎となる資料は膨大ですが、建築史関係者の間で十分に認識されていないのが現状です。

第四は、復元事業の報告書の刊行です。本来、建物の復元的研究成果の表現は、必ずしも実物大復元ばかりでなく、模型や図面なども含め多様です。学問としての復元的研究、いいかえるならば復元研究論文及び復元図と、一般の人々が目にしている遺跡整備手法としての復元との間には、大きな違いがあることも認識しなければなりません。

3. おわりに

最後に、文化財の保存や遺跡整備に長くかかわってきた私は、遺跡整備にあたって以下の4点に注意を払ってきました(表4-7)。

一つは遺跡整備の範囲を考えることです。遺跡は、一定の範囲を占有して遺跡であると同時に、周辺に連続して遺跡の価値が評価されます。しかし、その空間すべてが遺跡となるわけではないので、その中核となる遺跡の整備範囲をなんらかの根拠をもって定めなければなりません。

二つ目は、保存整備と復元の程度です。遺跡整備の目的の一つは、遺跡理解を深めることであり、これに相応しい整備・復元の程度を決めることが必要です。



図4-12 復元された武家屋敷の土塀



図4-13 復元された町家群

表4-6 建物復元の考え方

- ①遺跡調査への建築史関係者の関わり方
- ②間接資料の重要性
- ③建物復元のための基礎作業と学際的取組
- ④建物復元事業の報告書の刊行

表4-7 一乗谷における史跡整備の注意点

私が心がけてきたことー遺跡整備の要点

- ①遺跡整備の範囲を考えること
周辺との関係、バッファも含めて
- ②保存整備と復元の程度
遺構と空間のスケールを念頭に
- ③全体を見据えた対応
保護層と景観の関係
- ④遺跡は常に変化していることが前提
維持管理

遺跡整備の今日的課題

- ①遺跡を都市全体の中で眺めること
- ②時間を追った(プロセス)整備

遺構の大きさと当時の生活空間の広がり念頭に、遺跡空間のスケールを物理的に表現することが基本となります。



図 4-14 一乗谷川の整備状況



図 4-15 一乗谷の景観（春・夏）



図 4-16 新博物館完成予想図



図 4-17 朝倉館主要部原寸大復元展示計画図

三つめは、全体を見据えた対応です。遺跡全体を見据えながら、様々な整備手法をどこにどのように用いるのかを考え、実施する必要があります。遺構保存上、一般的に保護層を加え、その上に持ち上げ整備しますが、周囲との関係に景観的違和感を生むことがありますから、全体の景観を考えたレベルの秩序を損なわないようにすることが大切です。

四つ目は、遺跡は常に変化しているということが前提となるということです。遺跡を構成する様々な要素は、常に変化しつづけるものであり、維持することは容易ではありません。その変化を受け入れつつ管理する遺跡整備もあり得るでしょう（図 4-14）。遺跡の自然災害への防災対策は、遺跡管理の基本です。

この 4 点に加えて、今日の遺跡やその環境に対する意識の変化、拡大との関係から以下のことを忘れてはならないと思います。遺跡を都市全体の中で眺めることと時間を追った整備です。文化的景観に象徴されるように、周辺的环境をも含めた地域空間の全体像を視野に入れて、個々の史跡等の文化財を単独ではなく歴史的・文化的な文脈においてそれぞれが関連性のある総合的なものとして捉えることが欠かせません（図 4-15）。また、事業として実施するうえで、遺跡整備は長期にわたることが多いことから、完成時の景観とともに見落としがちである途中経過を念頭に置くことも必要です。整備後の環境を維持・発展するためには、史跡外と連携し、地域住民とともに持続的に働きかけていくシステムが機能することが必要であり、維持管理を見据えた計画が必要となります。このことこそが、遺跡の維持管理の出発点であると考えています。

事業開始から半世紀を迎えた一乗谷では、現在、新博物館の建設が進んでいます（図 4-16）。この博物館の内部には、現地復元を見送った朝倉館の主要部を原寸大で復元し、展示に活かす予定です（図 4-17）。また、経年変化もふまえた再整備、そしてこの遺跡の理解に欠かせない山城部の調査・整備など、次の 50 年に向けた事業も進めています。以上です。

イングランドのヒストリックサイトにおける リコンストラクションの取り組み

The approach to reconstruction at nationally important historic sites in the UK

Duncan McCallum (Strategy and Listing Director, Historic England)

はじめに

こんにちは、ダンカン・マッカランと申します。私は、ヒストリック・イングランドで戦略・登録室長を務めています。

今回、イギリスにおける国指定重要史跡でのリコンストラクションの手法についてお話しするよう依頼を受けました。そこで、四つの点について短めにご紹介したいと思います(図5-1)。まず一つ目は、イギリスの遺跡の管理・運営における考古学的リコンストラクションの手法について。二つ目は、許容されるリコンストラクションの手法に対する国としての公式見解があるか否かについて。三つ目は、日本語の「整備」に似た概念が英語に存在するか否かについて。そして最後に、簡単なまとめを述べます。

この報告では、おもに考古遺跡や考古遺構について言及します(図5-2)。特に、土及び木から構成される遺跡に着目してみます。その他、イギリス国内の重

要な遺跡も事例として取り上げました。私は、ヒストリック・イングランドに所属していますので、主としてイングランドの遺跡に焦点を当ててみます。ですが、大規模なリコンストラクションの代表的事例はウェールズにありまして、その遺跡についても報告の中で紹介します。

1. イギリスにおける考古遺構のリコンストラクションの手法と遺跡管理

イギリスでは過去 200 年間、遺跡の保存とリコンストラクションに関する幅広い研究方法が蓄積されてきました(図5-3)。ただし、これらの中から特定の手法を採るよう規定した法律や規則は存在しません。現在、イギリスの保護制度が採用している手法は、「意義」の保護を論じるものです。つまり、遺跡や建造物の何が重要なのかを考えるものといえます。政府の諮問機関であるヒストリック・イングランドは、計



図 5-1 報告の内容



図 5-3 考古遺跡への基本的アプローチ



図 5-2 報告の目的



図 5-4 リコンストラクションの主な手法

画を立案する地方自治体などの意思決定に資する目的で、遺跡保護の手引書を策定しています。しかし、これに強制力はなく、規則というより助言と位置づけられるものです。この報告の論点となりますが、リコンストラクションがいかなる形であれイギリスではあまり行われないう事実を指摘しておきます。この報告のための実例を探すのにも苦労したほどです。

ここでは、リコンストラクションに関する六つの主要な手法について説明してみます(図5-4)。各用語について順に見てみます。一つ目は、最も基本となるのは何も手を加えない手法、いわゆる「現地保存」です。遺構や地表で観察できる人工的起伏をそのまま残し、時に解説を加える標準的なやり方です。二つ目は、変化を最小限にする手法。遺跡の大部分はそのままに補強だけして露出させておく方法です。この場合も、必要に応じて解説を展示します。三つ目は、現地での部分的リコンストラクション。もともとの遺構の雰囲気を感じさせつつ、しかし全体を再現することは行いません。四つ目は、ほぼ完全な状態で残る遺構における一部要素の修復です。五つ目は、別地点での全面的リコンストラクションです。考古学やその他の資料から解明できる範囲で、全体的にもとのプランに近づけます。六つ目は、「体験型リコンストラクション」です。技術、照明、舞台効果を用いて元来の姿を部分的に再現するものです。なお、あらためて断っておきますが、全面的リコンストラクションは行われませんが、全面的リコンストラクションは行われませんが、全面的リコンストラクションは行われませんが、全面的リコンストラクションの事例は、イギリスでは皆無です。

それでは、各用語を掘り下げて観察してみましょう。まずは、何も手を加えないという手法についてです(図5-5)。これが一般的に最も適切だと見なされている手法です。劣化や損傷を最小限にとどめます。次世代が新たな技術を用いて研究できるように考古資料を最大限残すことが主要な目的です。どこに真正性があり何が本物の遺構か訪問者の目にも明らかであり、この意味で専門家や訪問者が惑わされることはありません。ただ現実には、もとの遺跡がどのような姿だったかを想像するのが難しく、一般の人には魅力的に映らないでしょう。ここに示したルイス小修道院が、典型的な例です。この修道院は、数世紀前から廃墟化が進んできました。解説や実測図、復元図などの情報はありますが、訪問者は、遺跡の当時の姿を自ら想像するしかありません。

二つ目の手法は、変化を最小限に留める、つまり土地の形状又は遺構の大部分を発見時の状態で残すや



図5-5 リコンストラクションの手法1 (ルイス修道院)



Here, excavation has happened but no attempt is made to reconstruct missing elements. The remains are protected, 20 feet below the modern pavement level, and is fully accessible through the Guildhall Art Gallery. Interpretation helps visitors understand what they see.

図5-6 リコンストラクションの手法2 (ギルドホールの円形闘技場址)



direction on the original remains. Rebuilt in the 1970s it is highly unlikely that this work would be given permission today. It is, however, popular with visitors, especially families. Today reconstruction would likely be in a different location.

図5-7 リコンストラクションの手法3 (ラント・ローマン要塞)



図5-8 リコンストラクションの手法3: (同上、馬場)

り方です(図5-6)。ここに挙げた例は、数十年前にギルドホール(ロンドン市庁舎)の地下で発見されたローマ時代の円形闘技場址です。現在、ギルドホールの地下に保存されていますが、発見当時のものと比べ

て環境が変わっています。もともと地下に埋もれていた遺跡が発掘され、今は現代建築の地階にあります。発掘後に遺構の補強が行われましたが、それ以上のことは何も行われていません。残存する遺構に何かを付加するリコンストラクションの試みは、行われませんでした。遺構は現在、近代の地表面から下に 20 フィート、つまり約 6 メートルの場所で保存されており、市民はアートギャラリー側から入場できます。その場所に何があったのか訪問者が理解できるように遺構の周囲に解説が配置されていますが、それ以上のことは何もなされていません。

三つ目は、原位置での部分的リコンストラクションです(図 5-7)。これは、もとの構造物の雰囲気を伝えることができ、訪問者にとって遺跡の当時の姿がどのようなものだったのか非常に理解しやすい手法です。ここに挙げた例は、ウェールズにあるラント・ローマン要塞です。大規模なリコンストラクションが行われた数少ない事例の一つであり、最も分かりやすい事例だと思えます。木材と土で構築されたローマ時代の要塞であり、部分的に復元されています。画像にあるのは、リコンストラクションの主要部分です。私たちが遺構や遺物をつうじてそこに何があったかを説明する以上に、非常に分かりやすくなっています。元来の遺構の平面プランの線に沿って 1970 年代に再建されたものですが、このような事業の許可は、おそらくもうあり得ないでしょう。とはいえ訪問者、特に家族連れには非常に人気の遺跡です。このようなリコンストラクションは今日、原位置から場所を移して行われます。この写真(図 5-8)は、要塞の反対側を見たものです。こちらは要塞内にあった馬場であり、当時そこに何があったかという雰囲気を出すため同様にリコンストラクションされたものです。

部分的リコンストラクションのもう一つの例は、ストーンヘンジです(図 5-9)。国内で最も著名な遺跡といえるストーンヘンジも、実のところ大幅なリコンストラクションが実施されてきました。元来この遺跡は、紀元前 3000 年から 2000 年ごろに構築され、幾度となく修復されています。石の積み直しは、1901 年、1958 年、そして最後は 1963 年に行われました。この作業内容については詳細な記録が残っていますが、一般市民はこの遺跡の大幅なリコンストラクションの事実をあまり知りません。多くの人は、いま目の前にある遺跡がもとの姿を留めていると思い込んでいるようです。むろん遺跡では、これらのリコンストラクションの解説がありますが、市民が特に気に留める様子はありません。

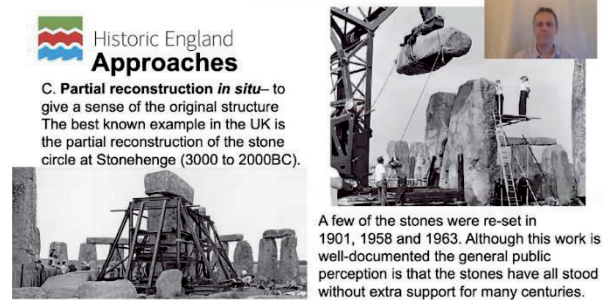


図 5-9 リコンストラクションの手法 3
(ストーンヘンジ)

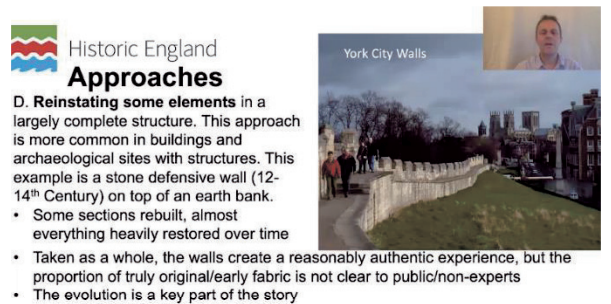


図 5-10 リコンストラクションの手法 4
(ヨークの城壁)

四つ目は、ほぼ完全に残る遺構における一部の要素を修復する手法です(図 5-10)。これは、遺構の保存状態が良好な建造物や考古遺跡でより一般的です。この事例として、ヨークの城壁を選びました。創建当初のローマ時代の城壁は、ごく一部が残るのみです。この画像の部分も含めてほとんどは、中世、おおむね 12 世紀から 14 世紀にかけてに比定され、土塁の上に再建されています。また城壁は、これを貫いて建設された道路や線路の影響を受けるなど時代とともに変貌し、数世紀にわたって幾度となく修復されてきました。ヨークの城壁は、全体的に見ると中世の姿をかなり正確に再現しているといえます。しかし実際、当初材もしくは初期の材料がどの程度残っているのか、専門家にも一般市民にも明確には分かりません。城壁が崩れては修復され、近代に入ってから交通事情や都市開発に合わせて改修されるなど、長い時間のなかで変貌を遂げてきた姿こそこの遺跡の歴史と価値の鍵になっている、と私は考えています。

五つ目の手法は、場所を移して、多くは原位置から非常に近い場所での全面的リコンストラクションです(図 5-11)。様式としては、基本的に判明している範囲で当初の姿に相似させます。ここで紹介する事例は、新石器時代の住居であり、イギリス各地の遺跡で多く見られます。このスライドは、ストーンヘンジの

ビジターセンターの隣にある復元住居です。復元にあたっては、本遺跡の周辺を含む多くの遺跡から発掘調査資料を収集して、これに基づいて行われました。上の画像は、ビジターセンターの内部を撮影したもので、画面右側に一棟の復元住居が写っています。その下の写真が、復元住居群の全体の様子です。これは近年に復元されたもので、市民には大変人気があり、ストーンヘンジができた時代を生きた人々の暮らしを理解するのに役買っています。訪問者は、この再建地点から約1キロ離れた場所にあるストーンヘンジの巨石群とは異なるスケール感、日常生活のスケール感を体験できます。

もう一つ、別地点での全面的リコンストラクションの事例を紹介します。これはシェイクスピアのグローブ座で、ロンドンのサウス・バンクにある木骨造の劇場です(図5-12)。1997年に竣工したこの劇場は、現在の場所から約250メートル離れた所にあった1600年ごろの建物を詳細な研究に基づき模造したものです。元々の劇場では、シェイクスピアが自作の劇を上演しました。再建にあたっては、数十年前に調査された考古遺構や絵画資料に加え、17世紀前後の木骨造建築の技術も参考にされました。しかしながら、観光地としても人気のある稼働中の劇場であり、現代の消防法などに合わせて数々の妥協や変更を余儀なくされました。このため、もとの劇場を忠実に再現したものではありませんが、それでも当時の木造建築の雰囲気をよく醸しています。

最後は、「体験型リコンストラクション」と呼ばれる手法です(図5-13)。新技術や照明、音響、匂香などを使って、構造物をほとんど失った遺跡の再現を試みています。ここに挙げた例は、ロンドン中心部に紀元240年ごろ建立されたミトラ神殿です。ここは、現代的な素材で補完された神殿遺跡で、これまで2回移築されています。1950年代後半に発掘された後、1962年に地表面で最初のリコンストラクションが行われましたが、正確さを欠くと批判されました。のち2010年にロンドン中心部でブルームバーグ社の新社屋建設が始まり、神殿址は地下で発見された原位置近くに再び移築されました。こうして一般の人でも無料で自由に遺跡を見学できるようになりました。遺構とともに15分ほどの臨場感あふれる映像体験をつうじて、遺跡が当時どんな姿だったのか知ることができます。この画像にあるように、現代的な素材や洗練された照明が使用されています(図5-14)。一般の見学者は、遺跡内部には入れませんが、周囲を歩けるようになっています。

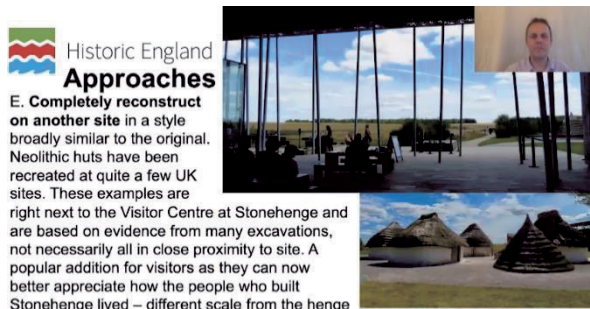


図5-11 リコンストラクションの手法5
(ストーンヘンジの復元住居)

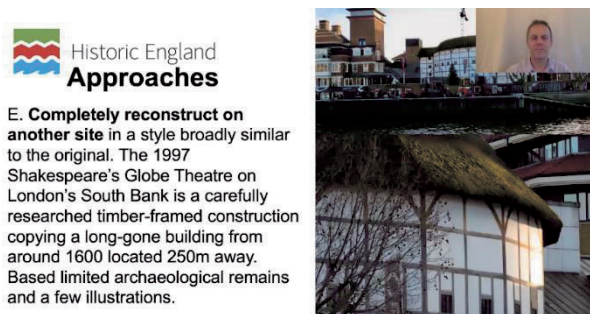


図5-12 リコンストラクションの手法5
(ロンドン・サウスバンクのグローブ座)



図5-13 リコンストラクションの手法6
(ロンドン・ブルームバーグ広場のミトラ神殿)



図5-14 リコンストラクションの手法6
(同上、展示照明の詳細)

2. リコンストラクションに対する公式見解

さて、リコンストラクションの手法に対する公式の見解はあるのでしょうか。答えとなる文化遺産への政府の取り組みは、国家都市計画政策に示されており、2019年度版が最新です（図 5-15）。この政策は、史跡や建造物の意義について格別の注意を払っています。意義を構成する要素の変更を避け、損傷を最小限に抑えるという考えです。ただし本政策自身あるいは政府の政策や法律が、リコンストラクションを許容するか否かについて直接指針を示すものではありません。ここに太字で引用した段落には、「予定される開発行為による指定史跡の意義への影響の評価は、その文化財としての保存を主眼としなければならない」とあります。これは一般に、リコンストラクションを強く支持するものではないと解釈されています。

では、政府の公式見解から一段階くだって、政府諮問機関であるヒストリック・イングランドの見解を見

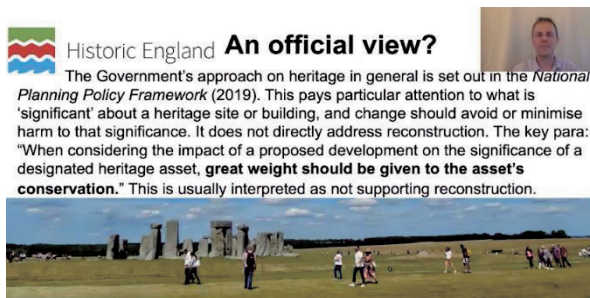


図 5-15 国家都市計画政策（2019年度版）

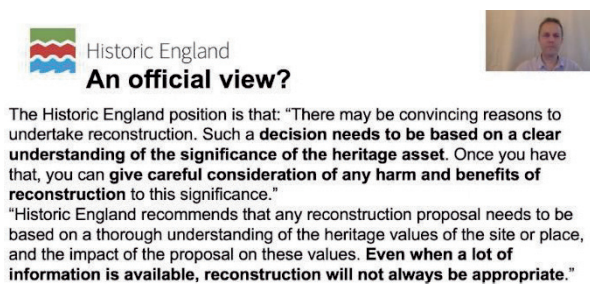


図 5-16 リコンストラクションに関するヒストリック・イングランドの見解

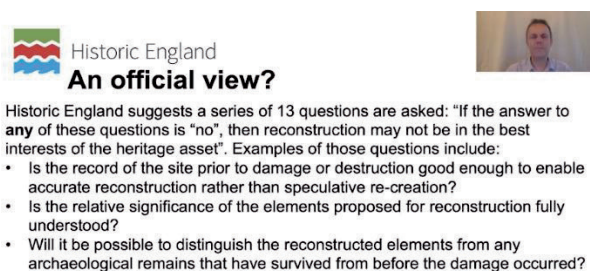


図 5-17 リコンストラクションに関する 13 の点検項目

てみましょう（図 5-16）。そのリコンストラクションに関する方針は、我々の公式ホームページに掲載されています。そこでは、「リコンストラクションは、実施する妥当な理由があるとしても文化遺産の意義への正しい理解に基づいて決定されるべきであり、意義に対する有害性と有益性を慎重に検討すべき」とあります。これは、イングランドで採用されている害と益の均衡を考慮する手法の一つです。ですから、「リコンストラクションは、遺跡又は場所の文化遺産的価値の理解と価値に対する影響に基づいて提案されるべきであり、利用可能な情報が多い場合でも、リコンストラクションが適切であるとは限らない」と警告しています。

この方針では、13 の点検項目が設定されており、その一つにでも「いいえ」があれば、リコンストラクションは対象となる文化遺産にとって最重要課題ではないと提言しています（図 5-17）。ここではリコンストラクションを検討する際に考慮すべき事項のうち、三つを紹介します。一つ目は、「推測を挟む余地なく正確なリコンストラクションを行うのに十分たり得る劣化又は損傷以前の遺跡の記録が残っているか」ということです。真正性と正確性を強調していますね。二つ目は、「リコンストラクションを予定している各要素の意義が十分に理解されているか」ということです。つまり、かつてそこに存在したと考えているリコンストラクションの対象を我々が十分に理解しているか、その内容が十分に信頼できるものであり遺跡に対する間違った印象を与えないか — ということです。三つ目は、「リコンストラクションした要素とこれまで保存されてきた考古遺構を区別することができるか」ということです。オリジナルの材とリコンストラクションされた材とが何らかの形で視覚的に判別できるかという問いです。

3. 「整備」に相当する英語

以上の一般的な手法につづき、日本語の「整備」という概念について、同様のものが英語に存在するか、又は英国内で用いられているかというお話をします（図 5-18）。私が理解する限り、「整備」という言葉には、どの英単語や用語よりも広い意味があるようです。整備という語の守備範囲は、保存管理計画が包括する一連の項目にいろいろと似ているように感じます。結論からいうと、整備の概念を一言で表現する英単語はありません。しかしながら、同様の手法を採っている遺跡について二種を挙げることができます。一つは、大聖堂です。多くの大聖堂では中央に巨大な宗



図 5-18 整備の概念と英国における近似した手法

教建築があり、これとの関係から周囲に「クロス(周辺)」と呼ばれる空間が広がります。ここには、付属施設や、石工の作業場をはじめとするさまざまな建物があります。大聖堂における手法は、これら多様な用途や相互関係を長期的観点から一元的に管理しようとする総合的なものです。同じく、より大規模でより広範囲にわたる手法が採用されているもう一つの事例として、カントリー・ハウスが挙げられます。英国のカントリー・ハウスは、市民にとって魅力的な場所であり、公開されているものも少なくありません。慈善団体であれ個人であれ所有者たちは、訪問者、駐車場又はトイレといった便益施設の設置から、農地、自然保護区、歴史的で公的な価値を有する部分などの公開範囲にいたるまで長期的かつ広範な視点を持っています。ですから、「整備」に相当する言葉がないだけで、同様の概念は、ある意味すでに実施されているといえます。

4. まとめ

では、以上ざっとみてきたイギリスの状況について、いくつかの要点をまとめたいと思います(図 5-19)。まず、あらためて強調しますが、リコンストラクションは例外的ということです。リコンストラクションは、市民には人気がありますが、研究者や文化遺産関係者の間では概して懐疑的な目で見られています。現在でも主流の考古遺産の専門家たちは、ありのままの姿を残す現地保存や原位置から離れた部分的リコンストラクションに比べて、遺跡への介入が大きい手法を積極的に許容していません。これは、紀元前 2000 年ごろに築造されたウッドヘンジという遺跡で、ストーンヘンジから 2~3 キロメートルの地点にあります。もともと穴を掘って立てられた高い木柱が多数あったようですが、発見時に残っていたのは柱穴部分だけでした。ずいぶん前の話ですが、画像にあるように発掘された各柱穴にはコンクリート柱が標識として立てられました。ですから、現地に行けば規模も含めて当



図 5-19 イギリスのリコンストラクションに関する要点 (右はウッドヘンジ)

時の遺跡がどのようなであったか何となく分かりますが、かつての高い木造構造物が持っていた視覚的インパクトは当然ながら感じることはできません。

今回の議題について考えたもう一つの所見を述べてみます。一部ではリコンストラクションを許容する傾向もわずかに見られますが、仮想現実 (VR) などの新たな技術の出現を受けて「物理的リコンストラクションはもういない」といった反論の声もあります。視覚媒体をつうじて考古遺跡を楽しむ技術は、ほんの数年前と比較しても格段に向上しているからです。ですから正直なところ、リコンストラクションを大きく推進又は抑止する流れは、今日のイギリスにおいて感じられません。一般的に、原位置でのリコンストラクションは、ほとんど認められないように感じますが、遺跡外、つまり原位置に近い場所など別地点に移してのリコンストラクションは、許容されることが多いと思います。現今この手法は、おそらく他のヨーロッパ諸国でも共通だと思います。しかしながら当然、国ごとに手法は多少異なります。日本や東南アジア諸国など、リコンストラクションがより一般的な地域で採用される手法について考えるのは、非常に興味深いです。私自身もそれぞれの国を訪問した際、これらをつうじて楽しく遺跡を見学しましたし、素晴らしいと感じました。私にとっては当時の様子を想像しやすかったです。ですから、リコンストラクションの利点も理解できますが、イギリスでは原位置で採る手法としては現時点では適切とされていません。

私の報告は、以上になります。皆さんに興味を持っていただけると幸いです。後日に予定されている討論に参加するのを楽しみにしています。ご清聴、ありがとうございました。

(原文)

Introduction

Hello, my name is Duncan McCallum. I'm Strategy and Listing Director at Historic England.

I've been asked to speak on the approach to reconstruction at national important historic sites in the UK. So, I'm going to cover four things in this brief presentation. First of all, approaches to archaeological reconstruction in site management in the UK? Secondly, whether there's an official national view of acceptable reconstruction approaches? Thirdly, whether there's a concept similar to the Japanese *seibi* in the English language. And finally some brief conclusions.

So, for the purposes of this presentation, I've focused largely on archaeological sites and structures. In particular on sites that are earth and timber in construction of a not entirely. And I've included a few other examples of important sites in the UK. Generally, I've focused on England because I work for Historic England. But the best example perhaps of large-scale reconstruction is in Wales. So I've used that at one point.

1. Approaches to reconstruction

Over the past 200 years, there have been a wide range of approaches to conservation and reconstruction of archaeological sites in the UK. Importantly, there has never been a definitive piece of legislation or regulation that determines a particular approach. The current approach, used by the English protection system at the moment, talks about the protection of "significance". What is important about a particular site or building? The Historic England, since the government's advisor on heritage, has produced guidance to help decision-makers such as local planning authorities. But, they are not obliged to follow it. It is advice rather than regulation. Get a really important point to make is that reconstruction in any form in the UK is really not very common indeed. I had to search quite hard to find relevant examples of this talk today.

So, I've set out here six main approaches to reconstruction. And I just talk you through each of those in term. Basics are first of all, basically to leave things untouched to "preserve *in situ*" as we say. It's the standard approach, leave something as a ruin or earth work,

perhaps with some interpretation. Second one, to minimise change. So, largely leave the earth work or the ruin as it is but perhaps consolidated, keep it exposed but not much more than that again with some interpretation were appropriate. Thirdly, is to carry out some partial reconstruction *in situ*, so that gives a sense of the original structure but not try and recreate the whole thing. The next one, similar in some ways is reinstating some elements in a largely complete structure. The fifth one is to completely reconstruct on another site, so broadly similar to the original concept as far as we can understand it from the archaeology and from other sources. And finally, I call experiential reconstruction. So, using technology, lighting, theatrical effects to partially re-create what was there originally. I should underline complete reconstruction does not happen. There is not a single example in the UK of complete reconstruction *in situ* of a national importance archaeological site.

So, just exploring each of those in term. The approach to reconstruction in terms of leaving things untouched. So, this is the approach that generally has been seen to be the most appropriate one. So minimise the amount of change, minimise the disturbance. So, the main justification for this is that leaves maximum amount of the archaeological evidence for future's generations to explore practicing with new technology. It's clear for visitors to see what is authentic, what the true remains are. In that sense, it does not confuse the visitor or the expert. But, the reality is, of course, that it's hard to get a conception of what the original site is like and to the public it's not very exciting. This ruin here, the Lewes Priory is a typical example. The Lewes Priory's been ruined for several centuries. Some interpretations, drawings, reconstruction drawings information, but really it's up to the visitor to try and imagine what the site was like originally.

The second approach is to minimise change. So, leaving largely the earthwork or ruin as it was discovered. Example I got here is the Roman amphitheatre that was discovered few years ago in the basement of Guildhall. Now in the basement of Guildhall, the context for the visitor experience has changed. It was originally below the ground. It's now been excavated but it's now in the basement of a more modern building. So, the excavation has happened, it's been consolidated, but nothing more than consolidation. No attempt has been made to reconstruct beyond what it already exists. The remains are protected

now 20 feet, 6 metres below the modern pavement level and you can access it, public can access it through the art gallery. Interpretation around the ruins help visitor to understand what was there, but nothing more is done than that.

The next approach is partial reconstruction *in situ*. So, this gives some sense of the original structure and really helps the visitors to understand what the site more been like initial original form. Example I've got here is the Lunt Roman Fort in Wales. This is perhaps the best example and one of the only very few examples where there's significant reconstruction. So, it's a timber and earth Roman fort partially reconstructed. This is the main area of reconstruction. It gives a very clear understanding, as far as we can tell from the archaeological evidence of what was there. It was rebuilt in the 1970s on the line of the original remains. But, it's highly unlikely this work would be given permission today. It is, however, very popular with visitors especially with families. And today, a reconstruction like this would most likely be undertaken in a different location. Here, it is again just another view standing and turning in the other direction. And this is another part of the fort, for training horses and again it's been reconstructed to give a sense of what was originally there.

Another example of partial reconstruction *in situ* is Stonehenge. This is almost certainly the most, the best-known archaeological site in the country. But, actually it's undergone a significant amount of reconstruction. It dates originally from 3000 to 2000 B.C., and it's undergone a number restorations over the years. A few of the stones were re-set in 1901, in 1958 and most recently in 1963. And although this work is well documented, I suspect the general public generally does not recognise or note that the site has been significantly reconstructed. And most assume that the site as they see and experience it today is very much as it was originally. Interpretation on the site does make it clear that there has been some reconstruction, but that's not the concept the public tend to think about.

So, the next approach is about reinstating some elements in what is a largely complete structure. So, this is more common in buildings and archaeological sites with a significant amount of structure. An example I've chosen here is from the York City Walls. Now, some of the walls, a small part of the walls are originally Roman, but this

particular section, large part of the walls is mediaeval, dating from broadly between the 12th and the 14th century on top of the earth bank. And some of these sections have been rebuilt. There're roads, railways, other structures that are gone through the walls or affected the walls at different times. And they've been restored many times over the centuries. So, taken as a whole the city walls, I think, recreate reasonably authentic experience what the mediaeval walls would've looked like. But in practice, the proportion of truly original fabric or early fabric is not really clear to experts or to general public. And for me, a key part of the story and the interest of this site is the evolution over time that parts of the walls fell but rebuilt and some of them modified in modern times in order to accommodate traffic and other developments.

The next approach I'm just going to touch on is to completely reconstruct on another site often very close to the original one. In a style, it's broadly similar to the original so far as we can tell. So, the example I used here are Neolithic huts that have been recreated on a number of sites around the UK. These particular sites, here shown on this slide, are right next to the Visitor Centre at Stonehenge. They're based on evidence from many excavations, some of them in close proximity to the site, some of them using evidence that has been gathered from elsewhere. Here the top picture that you can see is the Visitor Centre and some inside the Visitor Centre and you can just see on the right hand side, one of the huts, and the bottom picture shows the collection of huts. There's just been rebuilt in the last few years and it's become really very popular with the public and helps the public understand about the people who lived around Stonehenge, a kind of conditions they lived in. And also they get a sense, the different sense of scale and the domestic scale compared to the huge stones that are from here about a kilometre away from the reconstruction.

The next example to completely reconstruct on another site is this on here. So, this is the timber framed Shakespeare's Globe Theatre in London South Bank. It was built in 1997, however, it's based on carefully researched timber frame construction copying a building within about 250 metres of its current site around 1600. It was the theatre in which Shakespeare performed some of his plays. And it's broadly based on the archaeological remains that were excavated number of years ago, on some illustrations, but also using timber construction tech-

niques of around the period 1600. However, it's a working theatre, it's a popular tourist attraction. And obviously, a number of compromises, changes had to be made to accommodate things such as modern fire safety. So, it doesn't pretend to be the original building, but it gives a very strong sense of the atmosphere of building like this overtime.

And the final example I'm going to explore is experiential reconstruction. So really this is using new technology, using lighting, sounds, smells to tryingly recreate some of the atmosphere of an archaeological site that has largely disappeared. So the example here is the Mithraeum which was originally built around A.D. 240 in central London. It's a relocated temple ruin, supplemented by modern materials. The ruins have actually been moved twice, excavated in the late 1950s. They were first reassembled in 1962 at ground level and as much criticism of the accuracy of that reconstruction. And then sometime after 2010, when the Bloomberg office building work started in Central London in the City, they rebuilt these ruins close to the original site where they were discovered in the basement. And this allows visitor access, free access, and you can see both the ruins and also a short 15 minutes or so audio-visual experience and that gives you a quite interesting and powerful evocation of what the site was probably originally like. That's just an example there, some of the modern materials, some of the careful lighting. Members of public walk around the outside and you can't walk into the ruins themselves.

2. An official view?

So, is there an official view on the approach of reconstruction? Well, the answer is that the government's approach on heritage is set out in the National Planning Policy Framework, most recent version dates from 2019. It pays particular attention to what is significant about a Heritage site or building. And the policy is that change should avoid or minimise harm to the things elements that are significant. So, the policy itself, government policy and legislation does not directly address reconstruction whether it's acceptable or not. The bold paragraph is, "when considering the impact of a proposed development on the significance of a designated heritage asset, great weight should be given to the asset's conservation".

And generally, this is interpreted as not supporting reconstruction to any significant degree.

Now, when you go to the next level down from the government's official view you then come to Historic England's view as the government advisors. So, we have a policy on reconstruction which is on our website. And in that, we say that "there may be convincing reasons to undertake reconstruction. However, such a decision needs to be based on a clear understanding of the significance of the heritage asset. Once you have that, you can give careful consideration of any harm and benefits of reconstruction to this significance". And this is one of the approaches that we take in England about this which is balancing harm against benefits. So, "we recommend that any reconstruction proposal needs to be based on a thorough understanding of the heritage values of the site or place, and the impact of the proposal on these values. Even when a lot of information is available, reconstruction will not always be appropriate". Now in that guidance, we produced, we set out a series of 13 questions. And we suggest if the answer to any of those questions is "no", then reconstruction may not be in the best interest of the heritage asset. I just set out here examples to 3 of these is questions that we suggest people should consider. The first one, "is the record of the site prior to damage or destruction good enough to enable accurate reconstruction rather than speculative reconstruction?" So, great emphasis on authenticity and accuracy. Secondly, "is the relative significance of the elements proposed for reconstruction fully understood?" So, do we have enough, do we know enough about what we think was there before to be confident that when we reconstruct it, we're not getting some kind of false impression about the site? And thirdly, "will it be possible to distinguish the reconstructed elements from any archaeological remains that have survived from before the damage occurs?" So, some kind of separation, visual separation so that you can see the original material and the reconstructed material.

3. Is there an equivalent to "*seibi*" in English?

So, there're the general approaches. I just wanted to touch on this intriguing concept of *seibi* and just think about whether a similar concept exists in English or is used in the UK. So my understanding of this Japanese word is that it's much broader than any single English word or term. Thinking about it, I felt that the sorts of

material that's covered in a conservation management plan is many ways similar to the breadth of coverage there. There is not a single word. However, I think there are a couple of types of site that give some kind of similar approach to this. The first one I mentioned is cathedral, so many cathedrals have a large central religious building around that they have open space, secondary structures often called the close in relation to cathedral. And a number of other buildings, workshops, the stonemasons that sort of thing. And those tend all to be managed in a single way with the long-term holistic approach integrating all the different uses, all the interconnections. And also I would say that the English Country House is another example of where that can bigger, broader approach is taken to thinking about a site. And many of those sites will be open to the public as

visitor attractions. And the owners of that site, whether a charity or private owner, well often take that long view, broad view about visitors about car parking, toilets, farming on the land, which parts can be visited, which part is the nature reserves, which bit a conserved to historic public. So in some ways, it's in practice a similar concept.

4. Conclusions

We just don't have a word that relates directly to a Japanese equivalent. So, in that very brief summary of the situation in the United Kingdom, I just like to make a few points in conclusion. First of all is underlined once again reconstructions are the exceptions. And in terms of the academics and the heritage practitioners, generally reconstructions are looked upon with a little bit of scepticism and concern. However, they are extremely popular with the public. So, mainstream archaeological heritage professionals at the moment generally see them less acceptable than less interventionist approaches such as conservation *in situ* leaving as they are or some small parts of reconstruction ideally off-site. This particular example I illustrate here, Woodhenge dating from about 2000 B.C., which is a very close to, just 2-3 km away from Stonehenge. This originally was a large number of tall wooden posts in post-holes. The post-holes are the only part survived. And a number of years ago, each of the excavated post holes was marked by these small concrete pillars. So when you go there, you do get some concept what it might have been like the scale of it all, but you obviously

lose the visual impact of these tall timber structures they've long gone.

I think the other observation I've been thinking about this topic is that if anything although reconstruction may in some circles becoming slightly more acceptable because the virtual reality and so kind of new technologies are emerging, in some ways as a counter argument that's saying "we don't need to reconstruct physically" because the ability to enjoy and appreciate archaeological sites through virtual means is now very much stronger than it was even just a few years ago. So, I don't sense, to be honest in the UK at the moment, a significant shift towards or against reconstruction. Generally the feeling is it's unlikely to be acceptable in most cases *in situ*, but off-site in a different location or relatively close to the original site is likely to be acceptable in more circumstances. So, I think the approach is perhaps broadly the same in most European countries at the current time. But different countries are slightly different approaches. I think I found this really interesting to think about the approach taken in Japan and other countries in Southeast Asia where maybe there's more reconstruction that goes on. When I visited these countries, I've really enjoyed looking at those and I've found great and enjoyable, much easier for me to visualise what's there. So I can see the advantages to strong advices in reconstruction. However, the position here in the UK at the moment is generally that's not the right position to take *in situ*.

Thank you very much. I hope you found it interesting. I look forward to taking part in a discussion at the later date. Thank you.

世界遺産の真正性と「整備」

World Heritage Authenticity and *Seibi*

Douglas Comer (Principal, Cultural Site Research and Management)

はじめに

こんにちは、ダグラス・コマーと申します。今回、「整備」の概念に関する興味深い国際討論にお招きいただき、主催者のみなさんに感謝いたします。自己紹介いたしますと、私は、国際記念物遺跡会議（イコモス）のアメリカ合衆国国内委員会の委員長及びイコモス諮問委員会の副委員長を、また、これらの立場から国内審議委員会の委員長を務めています。日本へはこれまで何度も訪問しており、毎回とても気に入っています。

1. 世界遺産の真正性と「整備」

それでは整備について話を始めますが、私は、整備という用語及びその概念と真正性の概念との関係について述べたいと思います。

ご存知のとおり、遺跡の世界遺産への登録は、顕著な普遍的価値の立証をもとに行われます。これには、いくつかの基準、文化遺産の場合には六つの基準があり、遺跡は各基準について真正性と完全性の属性を満たさねばなりません。ですから真正性は、世界遺産という分野において柱となる概念なのです。真正性という概念が議論され始めたのは、実は世界遺産条約の締結より前のことだと思います。このスライドに写っているのは、世界遺産登録の初期に世界遺産と呼ばれるものの象徴的又は典型的な例の一つと考えられたもの、「ヴェネツィアとその潟」です（図6-1）。これは、真正性及び真正性の定義に関わった人たちが文化に対する肌理細やかさに欠けていたということの意味するものではありません。スライドの文字が判読可能ならいいのですが、このように言及しています：「在地の文化により材料及び技術の使用が根強く継承されている」と。材料と技術についての話ですが、私は、この材料がとても重要だと思います。さらに、「保存と修復についての伝統的な活動及び技術を有効的に活用し、評価することにより、遺産がもつ文化的価値

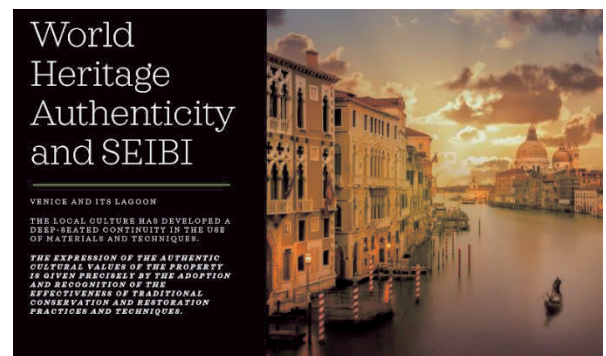


図6-1 世界遺産「ヴェネツィアとその潟」の登録



図6-2 「整備」の定義



図6-3 「整備」の活動



図 6-4 米国立公園局の歴史的建造物の指針（表紙）

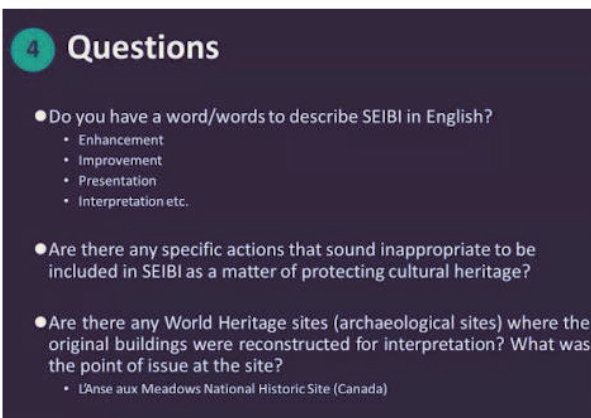


図 6-5 「整備」に関する問い

The Interpretation of heritage sites must be based on evidence gathered through accepted scientific and scholarly methods as well as from living cultural traditions.

2.1 Interpretation should show the range of oral and written information, material remains, traditions, and meanings attributed to a site. It should also clearly identify the sources of this information.

2.2 Interpretation should be based on a multidisciplinary study of the site and its surroundings, and should indicate clearly and honestly where conjecture, hypothesis or philosophical reflection begin

2.3 All elements in an interpretation programme should be presented in a form appropriate for local standards and resources.

2.4 Visual reconstructions, whether by artists, conservator or computer model, should be based upon detailed and systematic analysis of environmental, archaeological, architectural, and historical data, including analysis of building materials, structural engineering criteria, written, oral and iconographic sources, and photography. However, such visual renderings remain hypothetical images and should be identified as such.

2.5 Interpretation activities and the research and information sources on which they are based should be documented and archived for future reference and reflection



図 6-6 エナメ憲章の解説に関する指針

の真正性を表現している」とも書かれています。ここでも物質性に重点が置かれていますね。

では、このことと整備の概念との間にはどのような関係があるのでしょうか。整備とは、非常に包括的な概念です（図 6-2）。遺跡へ訪問者を受け入れる準備であり、そこで考慮すべきあらゆる要素、訪問者用の施設提供や維持に関わることを全般を指します。また、遺構や遺物の補修、解説用の復元も含まれます（図 6-3）。この「復元」という用語については、長らく議論が続いています。真正性に関係してくるからです。

たとえば西洋諸国において我々は、遺跡の処置や準備というものが解説と不可分なものと考えことはあまりありません。解説は、別物なのです。いささか論点に関係しますので、もう少し触れておきます。もちろん、我々〔国立公園局〕には、「歴史的建造物の保存・再生・修復・復元に関する指針」のみならず、景観その他をあつかう指針もあります（図 6-4）。しかし、少なくともこれらの指針や文書において、解説は、完全に分けて考えられています。そう考えると、おそらく英語には「整備」に一致する用語は存在しないでしょう（図 6-5）。帰るところ、整備は、上記すべてを網羅したすばらしい言葉です。

解説については、世界遺産制度の文書に何が望ましいか明確に記載されています。解説に関する指針もあり、中でも「文化遺産の解説にむけたエナメ憲章」は重要です（図 6-6）。この憲章において彼らが追求した考え方とは、このスライドの右上のようなものだと思います。これは、ベルギーにある修道院です。遺構は、ほとんど残っていませんでした。そこで採用された解決策は、非常に賢いやり方といえるでしょう。デジタル技術ですね。この四阿に入ってこのガラス越しに見ると、デジタルによる修道院のレプリカが浮かび上がります。つまり、遺構本体には直接触れることなく、その物質性に全く干渉しないのです。一方、憲章の第 2.4 項には、「可視的な復元は、芸術家、保存修復家、コンピュータ模型によるものを問わず、環境、考古、建築、歴史に関する資料の詳細に及ぶ系統立った分析に基づくものとし、これには建築材料、構造関係の技術標準、文字資料、口伝、絵画資料及び写真を含む」とあり、これは重要だと思います。ここで我々が求めていることは、遺跡をデジタルで表示する場合でも、その基盤となる確固たる資料や情報が必要だということです。これは、広く知られていることです。

ユネスコやイコモスといった世界遺産の部門は、再生・修復・復元をつうじた保存の概念に当初から非常に高い関心を示してきました。このうちリコンストラクション（復元）も、その意味についての議論や意見交換が続いている用語の一つです。面白いことにヴェネツィア憲章は、世界遺産条約より前からあります。採択されたのは1964年です。そして1966年には、世界で最も美しい都市に挙げられるヴェネツィアやフィレンツェで大洪水が起きました（図6-7）。

さて、ヴェネツィア憲章は、1964年の段階で後世に影響を与える二つの重要な事項を先駆的に述べていました（図6-8）。一つ目は、「記念物の保存及び修復の目的は、芸術作品としてのみならず歴史の徴証として保護することである」という章句です。ですから我々は、徴証としての物質性のうえに依拠しているのです。二つ目は、「記念物の保存とは、これと均衡の取れた環境の保全を自明のこととして含む。伝統的環境が存在する場合、これは維持されるものとする。容積及び色彩との関係を変化させるような新築、解体、改造は許可されない」と述べています。ですから、物質性と結びついた真正性についての考え方は、このような言明において強調されています。

2. 耐久性のない素材による文化財の真正性

続いて、これは欧州の大聖堂や南米のマヤ遺跡のように石造ではない建造物です（図6-9）。世界の多くの地域において、建築材料として好まれたのは石でした。ただし、日本などの例外もあり、「古都奈良の文化財」は、石材ほどの耐久性がない木材で建てられています。このことは、「顕著な普遍的価値の言明」の摘要において、称賛に値するものとされています。言明では、「春日大社においては式年造替の伝統が守られている」とあります。つまり、建築材料だけでなく、工法も含めた言明です。これらの木材は、非常に長い期間にわたり社殿の建替えに使用されてきたものと同じ神聖な森から供給されています。中には、千数百年の歴史をもつ神社もあります。これはまさに新しい考え方の真正性、すなわち有形の遺構・遺物のみならず、現代へ受け継がれる無形の文化と伝統を論じるものです（図6-10）。そして、このような事例がもとになって、「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」へと発展していくのです。

このことは、世界遺産及びその登録についての基礎的な手引書である「世界遺産条約履行のための作業指針」に影響を及ぼすことになりました。つまり、伝統や技術、管理体制、さらには言語などの無形の遺産が



図6-7 ヴェネツィアの洪水（1966年11月4日）

The Venice Charter (1964)

Acknowledged cultural context but grew from threats to the European urban environment, thus physicality was paramount. It seemed to address the concerns of the 1966 Venice flood perfectly: perhaps this was one reason it was widely embraced

Article 3.

The intention in conserving and restoring monuments is to safeguard them no less as works of art than as historical evidence.

Article 6.

The conservation of a monument implies preserving a setting which is not out of scale. Wherever the traditional setting exists, it must be kept. No new construction, demolition or modification which would alter the relations of mass and colour must be allowed

図6-8 ヴェネツィア憲章（1964年、部分）



図6-9 非石造の世界遺産（古都奈良の文化財）



図 6-10 古都奈良の文化財にみる真正性

Authenticity (from World Heritage Operation Guidelines, II.E.82-86)

1. Form and design;
 2. Materials and substances;
 3. Use and function;
 4. Traditions, techniques and management systems;
 5. Location and setting;
 6. Languages and other forms of intangible heritage;
 7. Spirit and feeling—attributes which are important indicators of character and sense of community maintaining tradition and cultural continuity;
 8. Other internal and external factors.
- *Information sources* are defined as all physical, written, oral, and figurative sources relevant to the nature, specification, meaning, and history of a cultural heritage.*
86. In relation to authenticity, the reconstruction of archaeological remains or historic buildings or districts is justifiable only in exceptional circumstances. Reconstruction is acceptable only on the basis of complete and detailed documentation and to no extent on conjecture

図 6-11 世界遺産条約履行のための作業指針 (第 86 段落)

認められるようになったのです (図 6-11)。これと同時に、第 86 段落ではこうも述べられています。「真正性に関連して、考古遺跡、歴史的建造物、あるいは歴史地区の復元が正当化されるのは例外的な場合に限られる」と。どういうことを意味するのでしょうか。読み進めるとこう書いてあります。「復元は、完全かつ詳細な資料にもとづく場合のみ許容されるもので、憶測の余地があってはならない」と。

3. 真正性と整備

これは、整備と真正性が両立できないということを書いておられるのでしょうか。個人的にはそうは思いません。私は、1994 年に日本の縄文遺跡群を訪問した経験の後、ある見解を記しました。当時、日本の暫定一覧表に記載されていた遺跡を多く訪れましたが、縄文遺跡群はすばらしく何度も足を運びました。無論、この考えが核心部分としてあったのです。これらの遺跡には、「シェルター」と遠回しに呼ばれるものが建てられていました。というのも、これらの遺跡は耐久性のない素材から構築されていたためです。長い年月を経て野原以外は残っておらず、痕跡もないため発掘する必要がありました。では、これをどう解説したらいい



図 6-12 埋蔵される考古遺跡の解説に関する ICAHM の意見 (2014 年 9 月 30 日)

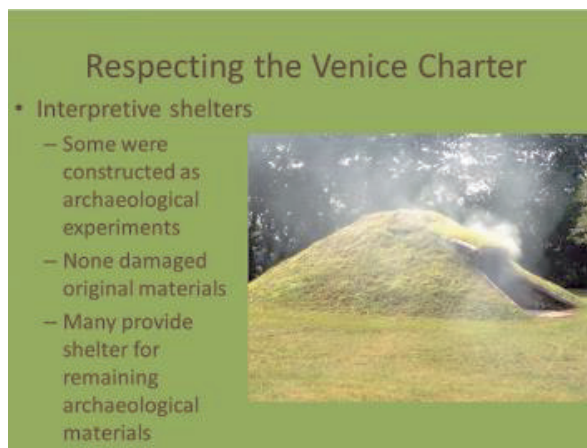


図 6-13 整備におけるヴェネツィア条約の尊重

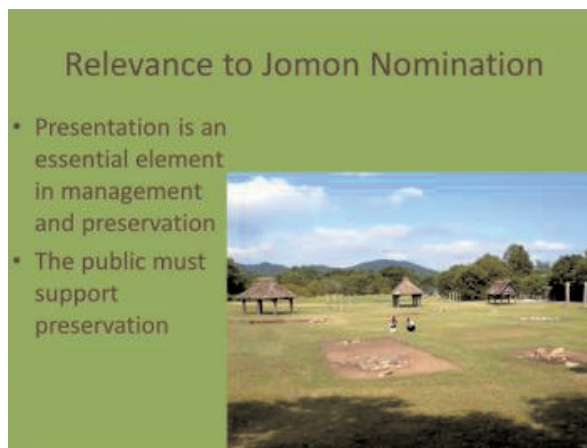


図 6-14 縄文遺跡群の世界遺産登録の妥当性

いでしょう？そこである考えが浮かび、「シェルター」あるいは「模型」と呼ぶものに辿り着いたのです。これは、訪問者にそこに何があったのかを説明し、訪問者の興味を引くうえで基礎となるものです。1994年に書いた見解というのは、これに関するものです。ご興味がある方には配布できます。

解説と保存が会った場所は、ここなのです。これは、2014年に ICAHM（考古遺産管理に関する国際学術委員会）が示した見解です（図 6-12）。そこでの議論の内容は、これらの縄文遺跡群で現在及び過去に何が行われたかということについてです。これらの縄文遺跡群は、とても豊富で詳細な資料や情報に基づいており、ヴェネツィア憲章を尊重したまさに好例だと思います。ここは、実験考古学の間として構築されたのです（図 6-13）。発掘調査を行い、出土した遺構・遺物を基に復元され、さらに2年間にわたり状態を維持したのち焼失させ、最初の発掘調査と同じ一連の知見や情報が得られるかどうかを観察するために再発掘を行ったのです。これは、知見の源となる極めて厳格な調査といえます。データベースを生み出したことは、非常に重要です。また、これらの模型や複製物によってオリジナルの遺構や遺物が全く損傷していないことも重要です。考古学は、必然的に破壊の工程の一つです。遺構は壊しますが、記録を残すことで破壊を軽減するのです。また、シェルターといたしましうか、復元遺構が現地に置かれる際には、地中に保存されるオリジナルの遺構に影響を与えないよう細心の注意が払われました。推薦の妥当性はこれです。アメリカや西洋諸国では、特にアメリカのことは国立公園局に長年いましたので分かるのですが、解説と展示に自信があるとしても、処置と展示とを区別します。この二つは切り離せません。効果的な遺跡管理には、優れた解説と展示が必要です（図 6-14）。解説は、いい話を伝えるだけでなく、訪問者を教育するだけでなく、彼らを引き込むものなのです。訪問者を遺跡の支援者にすることが必要です。現地の人たちは当然ですが、訪れた人全員がその支援者になる必要があります。そうすることで、遺跡の持続可能性を保障できます。公式には処置・解説・展示の各項目を一つの文書の中でまとめて捉えていなくても、これらはすべては同じことの一部なのです。これが2014年の見解で明確にしようとした点です。

4. まとめ

ということで、たとえ「整備」が英語に正確に翻訳できないとしても、私の考えとしては、次の四つの条

SEIBI Might Not Translate to English, but Can be Compatible with the Objectives of the World Heritage Convention

Clearly, the development of the nomination dossier for the inscription of the Jomon site has offered us a case study in the use of interpretive shelters to advance the overall objectives laid out in the Constitution of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization and the World Heritage Convention, as well as the need to preserve archaeological resources for the edification of future generations around the world. It is ICAHM's opinion that such interpretive shelters are permissible, and often desirable, so long as they:

- * Do not disturb archaeological deposits left undisturbed by previous archaeological excavation.
- * Are based upon rigorous archaeological research.
- * Are clearly identified as being physical representations that contain no, or little, original fabric.
- * Render them important elements in the preservation of the site.

図 6-15 整備と世界遺産条約の両立可能な条件

件に従えば、世界遺産条約の目的と両立可能だと思いますし、これまでもそう考えてきました（図 6-15）。一つ目は、以前の発掘調査により破壊や損傷を受けることのなかった遺跡・遺構を攪乱しないことです。二つ目は、複製物を構築する際の指標となる豊富な知見と信頼できる情報が、当初の考古学調査で確認されていることです。三つ目は、複製物が当初材を全く又はほとんど含まない物的展示として明確に識別でき、誤解を与えないことです。最後は、我々が複製物は遺跡保存における重要な要素であり、研究目的のため保全されるべきだと認めることです。これは、魅力的な話題です。整備は、興味深い概念です。討論の中で多くの興味深い考え方が生まれるでしょう。次の機会を楽しみにしています。ご清聴ありがとうございました。

(原文)

Introduction

Hello, my name is Douglas Comer. And I want to thank the organizers for inviting me to participate in this fascinating international discussion of the concept of *seibi*. Just this way of introducing myself, I'm president of the United States National Committee of the International Council of Monuments and Sites (ICOMOS), that's the National Committee for the United States. And I'm also vice president of the ICOMOS's advisory committee. And in that capacity, I'm chair of the National Committee Council. And I'd like to say that I've been to Japan number of times, and of course, I loved it every time into the lot.

1. What does authenticity have to do with *seibi*

So I'd like to launch it to this discussion of *seibi*. What I'm going to be talking about is the relationship of the term *seibi*, concept of *seibi* and the concept of authenticity.

And as I'm sure you know, a site is inscribed on the World Heritage List on the basis of establishment of Outstanding Universal Value. And that is established with reference to a number of criteria. For Cultural Sites are six. For each of those criteria, they have to satisfy the qualities of authenticity and integrity. So authenticity is a major concept in the World Heritage's world. Authenticity begins, I think many years ago, actually before the signing of the World Heritage Convention. And here we see what was considered at the beginning of the World Heritage List as one of the iconic or exemplary that's to say a World Heritage Site, "Venice and its Lagoon". This is not to say that the people who were concerned with authenticity, definition of authenticity were oblivious to culture. This is the quote that you hopefully see on your screen right now, refers to this: "the local culture has developed a deep-seated continuity in the use of materials and techniques". So we're talking about materials and techniques. Materials, I think, is very important word. Also, "the expression of the authentic cultural values of the property is given precisely by the adoption and recognition of the effectiveness of the traditional conservation

and restoration practices and techniques". So, again we see this emphasis on physicality.

Now, what does this have to do with the concept of *seibi*? Well, *seibi* is a very, very encompassing concept. It really talks about preparing the site for visitation and all of the aspects that must be considered in preparing the site for visitation, everything from providing facilities, district facilities and maintenance which is very important. And also it talks about repair of archaeological components and reconstruction for interpretation. This is the term "reconstruction" is one that is fraught with debate that has been for a very long time. And this is where we encounter that they concerned with the authenticity. In let's say the Western world, we don't necessarily combine the ideas of treatments of the site, preparation of the site with the idea that this is inseparable from interpretation. Interpretation comes later. I'll talk a little bit more about that because I think that's a bit problematic. We certainly have the Guidelines for Preserving, Rehabilitating, Restoring & even Reconstructing Historic, well this is, Buildings, but also landscapes and so for. But it's concept that somewhat divorced from interpretation per se at least in our guidelines, in a written document. So with that in mind, there probably is no English equivalent for the term *seibi*. *Seibi* though encompasses all of the involved and I actually, I'd rather admire.

When we talk about interpretation, we definitely have the World Heritage system documents that describe what is desirable. We provide guidelines for interpretation. Notably we have the Ename Charter for the Interpretation of Cultural Heritage Sites. This is the idea I think they were looking at right here, in a right-hand corner of the slide. In this case, this is a monastery in Belgium. And there was little left there to see. And so the solution that was come upon was created very cleverly, I would say. It was a technological digital one, and you go into this booth and look through this glass and you'll see digital replication model, representation of this monastery. So, it doesn't really involve even touching per se the physicality, the physical remains of the monastery. On the other hand, in the Charter itself, I think this is important clause 2.4: "Visual reconstructions, whether by artist, conservator or computer model, should be based upon detailed and systematic analysis of environmental, archaeological, architectural, and historical data, including analysis of building materials, structural engineering

criteria, written and oral and iconographic sources and photography”. So what we're looking for here, even if we're using the digital representation of the site, is we want a solid base of data and information to preset. It's the basis for the visual representation of the site itself. So, this is a knowledge.

Then again, our concern, I think the concern of the World Heritage world, UNESCO, ICOMOS has been really, from the beginning, focused on this idea of preservation by rehabilitation, restoration and reconstruction. Reconstruction again, it's one of those terms that people discuss the meaning of and argue about on and on. It's interesting that the Venice Charter actually predates the World Heritage Convention. It came out in 1964. And in 1966, we have this enormous floods in some of the world's most beautiful cities including Venice and Florence. Now, the Venice Charter had told us in 1964 a couple of really influential things. One is that: “The intention in conserving and restoring monuments is to safeguard them no less as works of art than as historical evidence”. So you rely upon the physical remains as evidence. Also: “The conservation of a monument implies preserving a setting which is not out of scale. Wherever the traditional setting exists, it must be kept. No new construction, demolition or modification which would alter the relations of mass and color must be allowed”. So again, really the idea of authenticity being tied with physicality is just reinforced with statements like that.

2. Not constructed of material as durable as stone

And then we have this where we find places that are not built of stone as are the cathedrals of Europe or sites, the Mayan sites in South America. A lot of places in many regions of the world, they preferred building material stone. Not always the case in Japan, for example. So, we have the “Historic Monuments of Ancient Nara”. Nara, they're constructed of wood which is not as durable as stone. So, in the brief statement of synthesis of the Outstanding Universal Value actually, this is held as something admirable. The statement is given the *Kasuga-Taisha* Shinto Shrine has maintained its traditional routine reconstruction. So, it's not just the materials, it's the way the materials are used. And the materials, for example, come from the same sacred forest that have been used to reconstruct these shrines for a very long time. And some

of shrines are thousands of years early. So we have this new idea of authenticity that deals with not just physical remains, but intangible culture and tradition in the continuities of that. And that was some of the stuff that led to the development of the “Nara Document on Authenticity”.

This is affected let's say the primary source of guidance for World Heritage Sites and inscription of World Heritage Sites, which is the Operational Guidelines for World Heritage Convention. And they admit of things like traditions and techniques and management systems, then even languages and other forms of intangible heritage. So they mention that, but also the Section 86, they say “In relation to authenticity, the reconstruction of archaeological remains or historic buildings or districts is justifiable only in exceptional circumstances”. I wonder why, in the next part here “Reconstruction is acceptable only on the basis of complete and detailed documentation and to no extent on conjecture”.

3. Authenticity and *seibi*

So, does this mean the *seibi* is incompatible with authenticity? I don't think so. This is my opinion actually, I wrote this opinion back in 1994 after my experience of visiting the *Jomon* sites in Japan. At the time I was visiting a number of sites on the Japanese tentative list, but went back to the *Jomon* sites many times because they're amazing sites. And of course, this idea was really front and center. They had constructed what perhaps you'd mystically termed “shelters” for the archaeological sites because these archaeological sites were built from not durable materials. And after a very long time, there was nothing left of them. There was just a field. There was no trace and you had to excavate to find the site. Well then, how do you interpret that? And so, the idea was hatched to come up with the “shelters” or “models” that would provide the basis for explaining what had been there to visitors, for engaging in visitors. We wrote an opinion about this back in 1994. We can circulate that if anybody is interested in. So, this is where interpretation meets preservation. And again, this was addressed by the ICAHM opinion 2014. Argument in it is that what is done and what was done at the *Jomon* sites. The sites, I think it's a great example of what we're talking about here pretty did respect the Venice Charter because they took from a really rich and rigorous base of data and infor-

mation. They were somewhere constructed as archaeological experiments. Sites were excavated. And then on the basis of the findings they were reconstructed. They were left for a couple of years in some cases and then burn down and then left for a couple of more years and re-excavated to see if the excavation in the second time gave us the yield of the same kinds of information data as the original excavations. So, this is very rigorous investigation providing rich source of data. It's very important that there's a database. Also important none of the original archaeological materials were damaged by these models or these replicas. Archaeology is an inevitably destructive process. So things are destroyed but they're documented and that mitigates the destruction. And so, when the models or the shelters were put back in place, quick care was taken not to disturb what was remaining of the original archaeological materials. The relevance denomination is this. Again, in the United States, the Western World, in the United States for sure, I can tell you that because I was with the U.S. National Park Service for many years, we do separate treatment from presentation, even though we pride ourselves on interpretation and presentation. They're inseparable. I mean you have to have excellent presentation, interpretation in order to have effective management because interpretation's not just telling nice stories, it's not even just educating the visitors but also engaging the visitors. It's necessary for them to become advocates for the site or else. Certainly local community, but everyone who visits at site really needs to become an advocate for the site. And that ensures the sustainability of the site. So, even though we don't formally recognized in a single document, the treatment over here and the presentation over there and the interpretation, they really are part of the same thing. This is what we tried to break out in our opinion back in 2014.

4. Conclusion

So now, even though *seibi* may not translate precisely into English, in my opinion and I would argue and I have argued that you can be compatible with the objectives of the World Heritage Convention, if it follows these four provisors. First, that it does not disturb archaeological deposits that were left undamaged or undisturbed by previous archaeological excavation. And secondly, that the archaeological research, the original research provided a rich source of data and information, reliable information

that guides the construction of the replica. Third, that these replicas are clearly identified as being physical representations that contain no, little original fabric we want to be deceptive. And finally, we have to acknowledge that they are an important element in the preservation site until they should be preserved for research. It says the fascinating conversation. *Seibi* is fascinating concept. I think it does bring a lot of interesting ideas together in an important way. And I look forward to further discussion. Thank you so much.

討 論

— わが国の「整備」をどう考えるか —

Richard MacKay	(Director of Possibilities, Mackay Strategic Pty. Ltd., Australia)
Douglas Comer	(Principal, Cultural Site Research and Management, U.S.A.)
Duncan McCallum	(Strategy and Listing Director, Historic England, U.K.)
稲葉 信子	(筑波大学 名誉教授)
市原 富士夫	(文化庁 文化資源活用課整備部門 文化財調査官)
友田 正彦	(東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター長)
西 和彦	(同上 国際情報研究室長)
松浦 一之介	(同上 アンソシエイトフェロー)

はじめに

西： それでは、セッション2の討論を開始したいと思います。細かく皆さんをご紹介しますが、お名前だけ。オーストラリアからリチャード・マッケイさん、アメリカからダグラス・コマーさん、イギリスからダンカン・マッカランさん、そして日本側は、本日のファシリテーターをお願いしております稲葉先生、それから文化庁から市原さん、そして私ども東京文化財研究所から文化遺産国際協力センター長の友田、そして松浦と西でお送りしたいと思います。それでは稲葉先生、よろしくお願いします。

稲葉： 西さん、ありがとうございます。皆さんの中には早朝の方もおられるでしょうが、本日のディスカッションにご参加いただきありがとうございます。このセッション2の進行役を務めさせていただきます。事前に用意した論点に沿って進めたいと思います。まず、既に配信されているセッション1に関することから始めます。4本の事例報告がありました。うち2本は日本の事例であり、他の2本がマッカランさんとコマーさんの報告でした。国内事例の報告者は本日参加されていませんが、これら2件の報告についてのコメントや質問から伺いたいと思います。まず一つ目の高田さんの事例報告は、縄文時代の集落跡の話でした。



次の吉岡さんの事例報告は、城館や居住区からなる中世の地方拠点の遺跡についてでした。どちらの場合も現存する遺構は、基本的に地中にあります。考古学的な発掘に基づいて徹底した調査を行い、ここで得られた知見を元に遺跡の管理方法や見学者への公開の方法を考えたわけです。では、高田さんと吉岡さんの事例報告について伺いましょう。ご意見やご質問をどうぞ。どなたからいきましようか。ではリチャードさん、お願いします。

1. わが国の史跡整備事例について

マッケイ： 御所野遺跡に関する高田さんの報告については、ずいぶん考えさせられました。私にとっては、とても示唆に富んでいました。なぜなら、遺跡保存についての考え方を遺跡の展示解説に結びつけていて、景観を復元するだけでなく、科学的な挑戦やさらなる研究のための場としても遺跡を活用しています。大変特異なやり方だと思いますが、遺構の崩壊過程を理解するために一旦復元したものを壊すことまで行っています。このことについて、世界遺産において私たちが用いている枠組みに照らして考えてみました。つまり、顕著な普遍的価値（OUV）に寄与する資産の属性を維持するという着目点です。私にとって衝撃的だったのは、明らかにこの遺跡の OUV が保たれていることで、最近の世界遺産委員会で推薦された縄文遺跡群の構成資産に含まれたことがそれを示しています。このことから改めて気づかされたのは、ちょっと思いつかないような手法による特異で個性的な事例でありながら、遺産の価値にとって重要な遺跡本来の属性は保たれているということです。保存の成果として優れているだけでなく、学術的にも訪問者にとっても非常に良い成果を挙げていると思います。



稲葉： ありがとうございます。遺跡の属性は保たれているとおっしゃいました。

マッケイ： はい。

稲葉： この詳細については、後ほどお聞かせください。続いてマッカランさん、どうぞ。

マッカラン： ありがとうございます。高田さんの事例は、とても興味深いと思います。どちらの事例でも、考古学的調査という初期の段階からその後の展示解説、訪問者にどのような体験をしてもらうかまでを関連付けて考えられていて、実に良いやり方だと思います。どちらの事例でも明らかなのは、いかに注意深く考えて様々な段階をうまく一つにまとめているかということです。イギリスではおそらく、遺跡が見つかって発掘しようという時点では、人々にどのようにその遺跡を楽しんでもらうかまでは考えないと思います。そういうことを考えるのは、もっと後の段階になってからだと思います。私にとって勉強になったのは、このような首尾一貫した方法論がとても良いやり方だということです。ただ、両方の遺跡についての記録を何度か見るうちにふと浮かんだ疑問があるのですが、これらの復元が実際どのように行われたのかということです。いずれも完全な復元ではないようですが、イギリスなら普通は復元をするなら遺跡の外で行い、かなり近くではあっても現地では行わないでしょう。高田さんの報告で言及されていたのは、遺構の元来の立地や正確な配置を理解し、なぜそこにあったかを知ることの重要性です。それならば、正確に元と同じ場所で復元を行いたいという理屈も理解できます。私が心配なのは、復元を行う過程で本来そこにあったものについての物証が損なわれたり失われたりしないかということです。科学が進歩するにつれて、私たちが考古遺跡を理解する能力も向上していくので、どこか別の場所で復元すれば残すことができたのに失われてしまう物証はないのが心配です。とはいえ、一般市民の視点からすれば完全に納得できます。結局のところ何のためにやっているのかと言えば、市民に自分たちや他者の文化や遺産にとって重要なものを



理解し、親しんでもらうためなので、原位置で行うことには意味があります。その意味では、そうすることがより真正性が高いと主張することもできるでしょう。本事例は興味深い考えが多く、中には挑戦的なものもあります。一方で、イギリスでは人々の賛同を得るのが非常に難しそうなやり方も見受けられました。それでもなお、そこには多くの論拠があると感じました。

稲葉： ありがとうございます。考古学的物証への悪影響の話でしたね。私の基本的理解では、遺構は既に埋没していて、地中の考古学的物証を損なわないようにその上方に建てるというのがこの種の展示解説を許可する上での基本条件です。ダグラスさんは何度も現地に行かれて、これらの遺跡のことをよくご存知ですね。

コマー： 遺跡の具体的な解説を念頭に置いたとき、展示に関しては意見が分かるところです。実際のところ私の経験をお話ししますと、特にアメリカでは多くの場合に調査計画を策定します。解決したい疑問や復旧したいもの、それがどのように使われるかについて考えるのです。このことについては、例えばアメリカで遺跡保存を所管している国立公園局の指針は、そこまで包括的なものではなく、遺跡に対する物理的な処置や今後の修復のための指針です。そして解説については、別個の文書があります。考古学者としては、常に悩ましいと言わねばなりません、遺構の多くは地上になく石造でもありません。ですから、過去に起きたことの全体像を表現したいならば、それを一般の人々に提示する方法を考えさねばなりません。一般の人々は、報告書など読んでくれません。新聞すら読んでいても限りませんし、ましてや調査資金の提供者向けに作成される発掘成果の報告書など読まれるわけがありません。したがって、人類の歴史の一部である過去の出来事について人々が情報を得るための現実的方法としては、何らかの物質的な表現を提供す



るよりほかないのです。そしてアメリカでの考え方は、明らかにその方向へと舵を切ろうとしています。報告された内容について、私たちが話しているような形です。縄文遺跡群において、その解説のために行われたようなことをするのが大きな問題だとは私は思いません。考古学調査は、すでに行われていますし、どんなダメージが起こったとしても、考古学につきもののダメージの一部でしょう。発掘されたものを物質的に表現することが必ずしも遺構・遺物を損なうとは全く思いません。今回の報告は、それを考える好例だと思います。

稲葉： ありがとうございます。吉岡さんが報告されたもう一つの遺跡についてはどうでしょうか。何かコメントはありますか。もう一方の、中世の城下町の遺跡です。リチャードさん、お願いします。

マッケイ： 本題に入る前に、一言よろしいですか。私たちが忘れてならないのは、こうした多くの場所において考古学的調査自体が破壊の工程であることです。非破壊と保全という二つの同時選択は、存在しません。これらの事例において考察しているような復元的行為は、両者の中間にあるのかもしれませんが。物理的变化という点では、遺跡やその完全性に何らかの影響を与えるかも知れませんが、同時に保護や保存の機会も提供し得るからです。一乗谷遺跡は、様々な種類の展示解説と景観に関する総合的アプローチによって遺跡を部分ごとに異なる形で扱うことを可能にした進化した遺跡の例のように見受けられます。このことを確かにそう思えるのは、平面表示やその他の解説手段を用いてメッセージを伝えています。地中の考古学的遺構を手つかずのままに保存しつつ、見学者が遺跡を訪れて情報を得ることができるという、両者のバランスが非常によくとれているように思えます。吉岡さんの報告の中で若干の懸念を覚えたのは、復元の事例について紹介された部分です。私の理解が正しければ、これらの復元は、入手可能な根拠とは矛盾しないものの、これが信じるに足る真正性を持った復元だと言えだけの十分な根拠はありません。推測に基づく要素が含まれています。また、コマーさんがご自身の報告で指摘された内容にもいくつかの点で疑問を感じました。復元は十分な情報に基づいて行い、何が本物で真正性を有し、何がそうではないのかを見学者に明確に伝える必要があるという点です。このことがもっと大規模な建物の仮説的復元においても適用できるかどうか、私は確信が持てませんでした。

2. 遺構復元/リコンストラクションについて

稲葉：ありがとうございます。復元の正確性については、日本でも関心が寄せられています。このことについて、次の議論のテーマとして取り上げたいと思います。特に建築的復元において様式や細部意匠がどれだけ正確かについて話されていますが、発掘された根拠に基づく自然環境の復元であれば建築的復元よりは好ましいかもしれません。私たちが用いている手法については、日本人の専門家から後ほど説明があります。というわけで、いよいよ仮説的復元に話題を戻したく思います。ではダンカンさん、お話しください。

マッカラン：ありがとうございます。リチャードさんが重要なことを言いましたが、ある意味で 100 パーセント正確な復元を行うことなど不可能です。例えば、1920 年代に建てられたパブを誰かが違法に取り壊して、事実上の罰としてその建物を忠実に再建するよう命じられたとします。大体は正しくできて、細かく見れば違いがあります。私の考えとしては、正確性の議論においては何かを複製しようとしても、100 パーセント正確にというのは無理です。許容し得るためにはどれほどの正確さが求められるかというのは、各人の性格や知識の深さによりけりという部分があると思います。世間一般の人々は、研究者が気にするほどには正確さにこだわらないでしょう。訪れた一般の人が建造物や素材について知識を深めて帰るのであれば、私はそれでいいと思います。一方で私たち研究者は、細部の議論が続けられますし、耐用年数が過ぎて何十年後かに復元建物を再建する際に修正することができます。私のような立場の者が 100 パーセント正確であることに固執しすぎるあまり、100 パーセント正確でなければ何もしないという危険性もあると思います。この種の遺跡の全てについて言えるもう一つのポイントは、周辺環境が変化するのは避けられないということです。遺跡は、当時とは違う形で使われています。最近の遺跡は、きれいに草刈りしてありますが、どこの遺跡もずっとそのままではないでしょう。遺跡の環境を正確に復元するのも、とても難しいです。小屋などの構造物がどれほど正確であっても。泥地だったであろう遺跡周辺もいずれ乾燥化が進みます。そこも、また考えるべき要素だと思います。イギリスでは近年、今話題にしているような建造物や建物をどうすべきかについては公益を考慮して決定することを政府が求めています。復元の正確性とか遺構への潜在的影響など遺産のことばかり考えがちですが、誰かがしたいからとか、ある組織がしたいから

とかではなく、専門家ではない広く一般市民にとっての利益を考えることが我々には求められています。私はこれらの事例、特に二つ目が公益に適うものと感じました。人々は現地に赴き、こうした建造物について深く知り当時の生活を想像するとともに、検出遺構や再構築された建物、考古学について考えます。研究と公益が結びつくことは、とても素晴らしいと思います。しかしイギリスでは、この二つが別であることが多いです。ですから二つ目の事例は、模範的だと思います。

稲葉：ありがとうございます。ダグラスさん、コメントはありますか。二つ目についてとか。

コマー：遺跡に使われた素材の恒久性については、考慮されるべきでしょう。アナステイローシスの例は、世界中に数多くあります。トルコとかギリシャ、ペルーでもどこでもいいですが、遺構が実際に残る場所です。ある意味、それは問題ではありません。何があったか、どう使われたかは、何をしても再現できません。塗装された煉瓦造の古建築に今また上塗りしたとしても人々の期待に応えられないのは、属性という概念があるからです。文章を書く時に、情報源を列挙する必要があるのと同様です。何を表現するにせよ、いかにそこに至ったかを知らせ、できるだけ説得力あるように努めるのです。遺構の展示も同様です。理解が難しい遺跡の昔の姿が実際どうだったのか人々に知ってもらうために、展示という手法を用います。一次資料で最大限の成果を出すのは、当然ですよね。もう一つあまり議論されないことがあります。建造物のほとんどは、不変のものではありません。使用期間が短くとも、誰が建てても変化します。経年すれば劣化します。それを全部を元に戻すとなれば、実に困難な問題に直面することになります。「どの時代に合わせるか？」です。以前ある遺跡で、名前は伏せますが、アナステイローシスが行われました。その時代には合わない壁がブルドーザーで取り払われ、谷に投げ入れられていたのです。こういう話はあまりしたくありませんが、取捨選択を迫られるということです。どうしてその展示に至ったか、何を体験しているのかを訪問者に知らせるのは、私たち専門家の義務です。きつと受け入れられると思います。展示という課題について実物復元するのか、それともデジタル技術によるか、これも一つの手段です。しかし、後者ではインパクトに欠けていて、同じ体験はできません。この話は、過去に少ししましたね。昔のように復元された遺跡の中を実際に歩いて回る時には、雲の流れや光の変化も目にします。訪問者が共感できる体験ではないかと思いま

す。デジタルはデジタルとして、家で好きだけ見ればいいのです。結局、偽りがないかどうかの問題です。まるで「危害を加えるような治療はしない」という医者
の宣誓です。手術となれば、多少の傷を伴います。何が起きたかを患者に説明する必要があります。この過程は、必ずしも完璧ではありませんが、その過程自身を説明する機会にもなる面白いやり方です。できる限り正しく全ての情報源を挙げるように努力しないといけません。どうやったか、どこでどう決めたかの公表は、専門家の倫理に関する問題だと思います。

稲葉： どうもありがとうございます。これは、考古遺跡への日本的なアプローチのようです。特に解説のやり方は、見慣れないかもしれませんね。日本で遺跡は、開発をきっかけに発見されることが多いです。開発者は、発掘調査をする義務があり、それに基づき保存や指定にむけた協議を行います。ですから発掘は、遺跡の価値を判断するために必要なものです。指定を目的とした必要最小限度の発掘が行われ、遺構密度や広がりを確認して判断材料を得るのです。地方自治体に配置された考古学の専門技師が、どのように管理すべきか決めます。解説がなければこうした遺跡は、単なる原っぱにしか見えません。ですからある種の解説は、ある程度必要なのです。この種の再構築に関する正確性や真正性について、日本人は特に意識します。このような埋蔵される考古遺跡にどんな属性が見られるか、このことに私は興味を覚えます。それでは、話の流れとして二番目の論題に移ります。つまり、等倍の模型についてです。私は、これを復元とは呼びたくありません。復元という意味でのリコンストラクションは、もっと近い時代の遺跡に使う言葉だと思います。記録がはっきりしていて、しっかり残ってる場合です。地下の遺跡には再構築に必要な物的証左が少ないですが、いかに遺跡を解説して管理すべきでしょうか。何もしなければ、基本的に何も無い土地です。そこで、皆さんの意見を聞かせてください。実物大のモ



Nobuko Inaba

デルとその未来をどう考えますか。しかし、その話の前に、日本人参加者の意見を伺いたいと思います。友田さんか市原さん、いかがでしょうか。

友田： はい、ありがとうございます。今回ご紹介した日本の二つの事例は、一種の優等生的な例だと思います。私たちが考えていることを最もよく実践したものでしょう。そして率直に言って、日本の考古遺跡の整備の典型例ではありません。両者に共通する特徴を挙げるとすれば、例えば、考古遺跡は都会の真ん中で発見されることも多いわけですが、今回紹介した二つの事例は、とりわけ自然に恵まれた良好な環境条件に立地しているという点がいずれも共通しています。これら二つの事例に共通する整備の基本的考え方は、古代の雰囲気あるいは遺跡が置かれた本来の環境を表現又は回復して、古代の生活の場がどのようなものだったかを訪れる人々により良く理解してもらえるようする、こういうコンセプトだと考えます。ですから建物のレプリカというか実物大模型は、古代の雰囲気の表現あるいは回復という行為全体の中の一要素であると私は理解しています。このような建物模型を造らなくても訪問者に何かしら古代の雰囲気を示すことは、可能かもしれません。海外の専門家にお尋ねしたいのですが、原位置において実物大模型を造ることを認めないのであれば、それに代わる手段としてどのようなやり方なら許容できるでしょうか。これが私からの質問です。

稲葉： どなたかお答えいただけますか？

コマー： 確認ですが、代わりの手段とおっしゃるのは、実物大の模型の代わりという意味ですね。

友田： そうです。

コマー： 別の場所で効果的だったやり方としては、その場所で起きた出来事やある構造物が何のために使われたのかといったことを説明するのに2分の1や4分の1サイズ、あるいはもっと小さい模型を作ってビクター・センターで展示している例があります。あるいは、構造物の重要な一部分の模型を作るのも、とても効果的だと思います。例えばLIDARによる正確な地表のデータがあれば、構造物も含めた地形の模型を作ってそれをビクター・センターに置けば、見学者に喜んでもらえるでしょう。頭の中で遺跡のイメージを思い描くことができますし、その周りを歩くこともできます。単体あるいは複数の遺構が実際にそこにあるのとないのでは、全く違った体験になります。モデルを使えば、訪問者の理解度が格段に高まること

でしょう。大きくなくていいのです。4分の1もない小さな物でいいでしょう。LIDARのような最新技術を使えば、景観の中にモデルを置いて実体験も可能です。そして人々は、それを解釈できます。遺構や遺構間の関係性、環境の特徴を学べるのです。これは、とても有効な解説のための手段だと思います。実物の模型に代わるか分かりませんが、遺跡を総合的に理解してもらうには至って効果的な手段です。文脈を知った上で現地に行き、遺跡の過去を頭に思い描きます。時には戻って見直すことで、全てがまとまるのです。LIDARのサービスは、そういったことができます。今や3Dモデルを作ることは、それほど難しくありません。

友田： 確かイングランドいやイギリスでは、遺跡内の原位置に実物大の模型を作ることは基本的に許されませんか。その根本的な理由は何ですか？

マッカラン： これを話し出すと何時間必要でしょうか。いくつか理由があると思いますが、長くなりますから一つか二つ理由を述べるとどめます。まず第一に、遺産及び遺産保護の哲学があると思います。イギリスでは、土よりも石でできた遺構の方が多いと思います。この種の遺構への理解や関心が高まり、そこから情報を多く得られるようになるのは、おそらく20世紀半ば以降ではないでしょうか。それから、19世紀後半に大きな動きがありました。当時、多くの石造建築、礼拝所や教会、城郭などが、今で言うなら無知なやり方で再建されていました。その場の元の感じを出そうとした目的は良くとも、細部をあまり気かけませんでした。ですから、様々な意味でイギリスに今も深く根付く考えというのは、同じ轍を踏まないことだと思います。一方で市民の側は、第二次大戦中の爆撃を受けたウィンザー城やセント・ポール大聖堂が大幅に再建された事実についてはあまり気にしていないようです。再建であると知っても、本来の構想に近い形を楽しんでいるようです。これを心配しているのは、研究者や専門家の方でしょう。これが、私たちの抱く懸念の根底にある要因の一つでしょう。再構築を避ける二つ目の理由として、土造の遺構をもつ重要な遺跡もあり、イギリスでいえばストーンヘンジ級の最重要遺跡ではないですが、その多くは私有地にあり、開発計画のある所もあります。ただちに調査を始めて重要な遺跡と判明したとしても公有化されることは少なく、私有のままか慈善団体に渡ります。彼らの資金は、十分とは言えません。再構築は、多額の出費を伴いますからね。つまり、経済的理由からです。解説や最小限

の作業にも、現実的な解決方法が必要です。三つ目の論点は、デジタルです。ただし、私はデジタル第一主義者ではなく、私の子供の頃はデジタル機器はありませんでした。ですが、私たちは長年、若い世代を文化遺産にいかにか深く取り込むか腐心してきました。今やデジタルは、彼らの世界の一つの次元を構成しています。私の年齢だとそう感じ取るのが難しいですが、ダグラスさんが話していたモデルの作成や遺跡が発展する各段階をデジタルで紹介することは、人々が求める情報を伝える上で非常に有効な手段だと思います。形成から廃絶に至る遺跡の変遷の過程を見せられます。ですからこれは、単に私たちが最盛期だと考える一時期を取り上げて保存と再現を行うのとは異なります。遺跡の各時期がわかります。最初は小さかったものが拡大し、大災害を受けて別の場所に復興されたという具合です。デジタルは、重層的手法としての可能性を秘めています。保存された情報にさまざまなやり方でアクセスでき、子供向けにも大人向けにも作ることができます。私は、復元された物もそれを訪れるのも好きですが、ここには危険性もあります。それは、各時期の様相が興味深くとも、現代の私たちが最も重要、最も興味深いと判断した一枚のスナップ写真にしかすぎないという点です。真に重要かどうかは、別の話です。

友田： 古代の建物の実物大のレプリカを造ることの利点としては、人々に遺跡に行ってみたいと思わせるとともに、昔のその場所の雰囲気を追体験してもらえ、非常に強力な手段であることと私は理解しています。私の印象としては、デジタル技術はまだそのレベルにまで到達していないようです。

稲葉： 友田さんとダンカンさん、ありがとうございます。市原さんは、いかがですか。国内の考古遺跡に対する指導的お立場から何か。文化庁の方ですか。

市原： ありがたいですが、リチャードが何か質問があるのでは？

稲葉： それでは、リチャードさん、どうぞ。

マッケイ： ええ、では友田さんのお話から次に進む前に少しいいのですか。重要なのは、これらが全て選択の問題ということです。モデルにしても手法にしても、正解又は不正解という議論ではありません。たとえ同じ情報に基づいても、管理者や国や文化が違えば、決断も異なります。つまり、遺跡をとりまく状況に注意を払うことが非常に重要です。遺産の価値やその属性だけではありません。保存実務に対する要求だとか、物理的、政治的な背景もそうですし、関係当局や訪問

者の期待もそうです。遺構の再現や解説装置の設置といった遺跡管理の決定には、それら全てが関わります。一つ申し上げておきたいのは、今話している歴史的で文化的な遺跡では多くの場合、地上に遺構が露出していて石造その他の遺構自体に歴史を語る潜在力があります。難しいのは、完全に遺構が埋もれている場合です。そうした遺構は、土や木でできていることが多いです。時間の経過でそうなります。そこで問題になってくるのが、考古資料の完全性か、それとも遺構をより良く説明することか、どちらに重きを置くかです。復元を実際の遺構から離れた場所で行えば、遺構の保存と復元が両立可能です。しかし、報告事例の一つである御所野遺跡を見ると、それが何なのかだけでなく、どこにあるのかということも実は重要なのです。セッション1で何度も言及された価値に基づくアプローチ、つまり、なぜこの遺跡が重要なのか理解し、その価値に相応しい策を練るということ — これは、優れた意思決定の基本として数多くの憲章や原則に共通して見られます。最後に言いたいことは、LIDARに限らず三次元レーザーなどの技術は、急速に進歩しています。ダンカンさんは、彼の報告の中でロンドンにあるミトラ神殿を例として挙げましたね。私が最も魅力的と感じた考古遺跡を訪ねたのは、つい数年前のことです。イギリスのバースにあるローマ時代の遺跡です。オリジナルの基礎の遺構を見学できるのですが、スイッチを入れると目の前で基礎の上に建物が三次元で再構築され、ホログラム（立体画像）中に俳優たちが古代人に扮して登場し、どんな風に遺跡を使っていたか再現しているんです。本当にグッときて、素晴らしい臨場感でした。遺跡も傷つけず、現地で目の前で再構築も見られます。保存と展示、この二つの機会と世界を同時に提供する最善の技術でしょう。

マッカラン： さっき言い忘れたことを思い出しましたので、もう一度よろしいですか。なぜイギリスでは再構築に神経質なのか。よくよく考えてみるとこの国は、統合的な管理があまりうまくありません。全部ではありませんが、ほとんどの遺跡を専門家が管理しているからです。大事な決定は、訪問者目線ではなく専門家目線で下されるのです。まさに双方の目線の開きが、日英の取り組み方の違いでしょう。でも、状況は変化し、双方の相互交流も増えました。研究者が絶対に再構築を認めないとか、訪問者が正確性を気にしないなどとは言えません。再構築やその類は、遺跡を人々が鑑賞する上で非常に役に立つという認識に移りつつあるように思います。イギリスで長らく遺跡を管理してきた政府機関のイングリッシュ・ヘリテージや民間

団体のナショナルトラストが非常に伝統的手法をとるのに対し、小さな遺跡、バースが好例ですが、そこでは違う手法がみられます。慈善団体か市有か、所有者が誰かは知りませんが、おそらく彼らのような手法が今後新たな切り口になるでしょう。彼らの方が、遺跡での訪問者の経験と考古学の思索をうまく組み合わせていますからね。

友田： 日本で言うところの「整備」の事例にみられる建造物の実寸大復元も、多々ある可能性の中の選択肢の一つにすぎません。けれども、最終的な判断というのは、私の理解するところでは、やるやらないの最終判断はケース・バイ・ケースです。当然ながら遺跡の意味や価値を訪問者に伝えるためには、実寸大のレプリカは強力な手段ですが、それと同時に人々に誤解を招く大きな危険性もあります。100パーセント正確にはできないという話が出ました。この意味で、常に危険があります。この種の大掛かりな、この言葉は使いたくありませんが「復元」、まあレプリカ作成にですね。ですから私の立場として求めたいことは、やるべきでないという決定のより具体的で明確な根拠を示してほしいということです。これが私の基本的考えです。



稲葉： 友田さんは建築家だから、こうした経験があって。

友田： そうです。

稲葉： 管理や解説に関するプロジェクトのご経験から、そこへの関心が高いのですね。では、次は市原さん、いかがでしょうか。

市原： では、もう一つ。友田さんがおっしゃったように、遺跡の展示法は多々ありまして、最終的には遺跡の管理者が決定します。でも、模型製作や3Dでの解説を現地で、遺構の直上で行う意味は一体なんですか。特に遺跡が完全に地下に埋蔵されている場合、属性と価値との関係が問題になると思います。と言う



のは、その場所や立地も遺跡の属性だと思うからです。どうしてこんな疑問を呈したかと言いますと、日本の遺跡管理者の中には、より簡易な運営とあわせて大規模なビジターセンターやガイダンス施設の建設で十分と考えている人が少なくありません。だから、どう考えたらいいかお聞きしたいのです。全て地下に埋もれた考古遺跡の属性と価値の関係です。お願いします。

コマー：では、できるだけ簡潔に言おうと思います。考古学でも言語学でも何であっても、文脈が全てですよ。人がある物を元の位置に戻そうとするのは、その物が環境を構成する要素又は環境的制限との関係でその景観の中の特定の位置を占めているからです。遺跡をその場所から移せば、そういう関係が失われます。文脈は、遺跡や遺構ごとに異なります。これは、往々にして非常に重要なことです。ですから、この問題が起きます。原位置に復元しても当時に比べると、もはや環境が変化しているのです。こういうことがあります。環境を元の状態に戻そうという試みは、多くの場所で行われています。一例を挙げるなら、アメリカの南北戦争の遺跡がそれです。柵や建物など関連する工作物がどこにあるのかが戦況の変化に大きな影響を与えたわけですから、それがないと遺跡で起こったこと、遺跡の躍動感は理解できません。ですから、遺跡が機能していた時代の環境がどうだったかをよく考えて調査する必要があります。そう考えると、埋もれた遺構やその類を原位置で再構築することは、遺跡にもよりますが一般的に非常に重要なことだと思います。

市原：どうもありがとうございます。私も、遺跡環境の変遷を広く市民に知らせるのは重要だと理解していますが、ご指摘の点はそういうことでよろしかったでしょうか。

コマー：ええ、そして何らかの形で環境を複製できたら、さらに強固な解説になります。

市原：その通りですね。そこが重要だと思います。

マッケイ：私も一言だけ付け加えてよろしいでしょうか。遺跡の物理的特質や象徴的意義、また訪問者の需要もこれらの判断に影響するでしょう。フランスのラスコーのような先史時代の象徴的遺跡は、遺構保存の観点から複製やビジター・センター、解説が別に必要です。中国西部の敦煌近郊にある莫高窟も、そのもう一つの例です。ある点ではストーンヘンジも、その例に挙げられます。いい体験ができ、かつ遺跡への影響が少ない素晴らしいビジター・センターがあるからですね。そして、センターのすぐ近くで本物の遺構を眼前にできます。遺構の物理的保存に与える訪問者の影響やその管理は、熟考すべき大きな課題です。

マッカラン：手短かに補足していいですか。まずストーンヘンジの事例についてですが、センターが列石から離れた場所に建設されたことにより、見学者の管理が格段に向上したと思います。以前は、すぐ横に駐車した人が遺跡に群がり、決して好ましい状況ではありませんでした。現在は、イングリッシュ・ヘリテージとナショナルトラストが訪問者を分散させています。訪問者は、ランドトレインもしくは徒歩で見学するようになっていて、以前よりもずっと景観を楽しめます。ビジター・センターの開館後、遺跡での体験は一変したと思います。単なる石列ではなく、景観という全体像が初めて理解できるようになったのです。つまり、遺跡を構成する様々な要素の総体です。話が少し逸れましたが、私が触れたかったのは、環境を再現する試みについてのダグラスさんの話です。大方において賛同はしています。ですが、私が気になるのは、遺跡が営まれた場所の環境です。例えば堅穴住居群の周辺では、木材調達のため森林が伐採され、環境が変化したでしょうし、土地が開墾されたと思います。その結果、災害の類いもあったかもしれません。最近では、遺跡が都市開発や騒音などの影響に曝されることを懸念しますが、遺跡を取り巻く環境が常に一定だったと想像するのも危険でしょう。でもこれは、さまざまな形の解説で対処できます。金属板の標識だけでなくiPhoneなど他にもいろいろ手段があります。遺跡を公開するうえで重要なのは、ある時期を切り取るよりむしろ時代と共に変化する姿だと私は考えています。完璧な方法はありません。どのような手法であれ、もし説明に一貫性をもたせるなら、非公開部分や発掘調査の必要上取り除いた部分など、これらの情報を訪問

者に伝え、利用可能にすることも遺跡への取り組みの一つとしてきわめて重要だと思います。

市原：ありがとうございます。よく分かりました。

稲葉：ありがとうございます。日本にも全国的に著名な考古遺跡がありまして、国庫補助を受けて管理運営されています。予算も概ね潤沢と言えるでしょう。また、地方自治体には考古学専門の職員が配置されており、このような体制整備とともに遺跡の管理運営が発展した中で、御所野と一乗谷は最もいい例です。このような長い歴史の中で、地表に何ら可視的遺構のない、原っぱにしか見えない先史遺跡を整備してきた成果と言えるでしょう。政治的にも遺跡管理その他の面でも、あらゆる必要条件を満たす完全な答えだと言うことができます。リチャードさんが語ったように、私たちの持つ必要条件の全てに対する答えであり、結果です。おそらく日本の考古学者が知りたいのは、このアプローチが世界的に珍しいかどうかです。他所では見られないでしょう。イギリスには、こんな例はありませんね。世界的に見て他の地域ではどうなのでしょう。あるでしょうか。それとも日本式は変わっていますか。日本の考古学者たちが知りたがっています。

コマー：すぐ終わりますので少しだけよろしいですか。19世紀末から20世紀初頭、アナステイロシスが始められます。彼らが行ったのは「整備」です。この語は当時まだ存在しませんが、説明の必要から調査しまとめ上げる。そして人々が訪れる。まさに整備と言えますよね。ペルガモンもアフロディシアスもそうになりました。遺跡を元通りにすれば、人々は見学に訪れるのです。これこそが原動力です。経済的・文化的原動力という発想です。だからこれに取り組むのです。元に戻す手法です。特に定まった基本方針があったとは思いませんが、政治的に経済的になるようになったのです。一種の整備だと思います。一方、日本の整備は、内容及び手法ともによく定義されています。プロフェッショナルなやり方だと思いますし、倫理的でもあると思います。いい仕事です。

稲葉：ありがとうございます。それではリチャードさん、お願いします。

マッケイ：世界的動向についてお答えしますと、今でも主要な遺跡では、複製や再構築、アナステイロシスが行われています。カンボジアのアンコールやペルーのマチュピチュといった国内的にも国際的にも重要な遺跡においてです。つまり、可視的遺構が残る典型的遺跡では真新しい再構築はせず、むしろバラバラになった部材を元に組み直すのが一般的です。レプ

リカについては、国内的あるいは世界的に重要な遺跡では私の知る限りあまり知られていません。ですが、地方レベルではよく起こることだと思います。20世紀初頭のアナステイロシスについてダグラスさんが理由を説明したように、人を呼ぶには人を引き付ける物を作らないと、ただの野原には誰も来ません。セッション1では、素晴らしい事例を二つ見ました。ダンカンさんの事例報告にあったイギリスの修道院は、現在では標識をいくつか置くだけで芝生張りでもとめられている一方、ウェールズのラント・ローマン要塞の復元遺構は、訪問者を引き付けています。アジア、例えばインドではこのような復元が非常に多いですね。訪問者に遺跡を解説するための施設として利用されています。

稲葉：ありがとうございます。ではダンカンさん、どうぞ。

マッカラン：リチャードさんが言うように、世界的にみても例は多くないと思います。彼の指摘の要点は、国際的観点から遺跡の重要度が落ちる場合、復元をよく目にするという点です。ただ、そうした遺跡であっても、私が知る限り完全な復元は稀でしょう。ある意味よくあるのは、集落跡などで竪穴住居のような建物を1~2棟復元することです。全壊した宮殿や教会といったものを、全部復元することはまずありません。ただ、長い間議論してこなかったのは、古代ギリシャの都市を見たとき感じるような驚きと感動のようなものだと思います。再構築が部分的であれ、石器時代とかそれ以前とか、どの時代に関係なく当時限られた道具で人々が作り上げた物を実物大で見られるのは本当に素晴らしいことです。これが、再構築を行う理由の一つですよ。遺構の平面図も興味深いですが、時間をかけてその立体図を描き、歴史が解ると一層面白いですよ。しかし、いずれも車で交差点を曲がった瞬間、眼前に寺院などの巨大建築が現れた時の衝撃にはかなわないでしょう。技術が今ほど進歩しておらず道具も少なかったであろう時代の人々がどうやってこんな物を作り上げたのか理解できるのは、フルスケールならでの体験でしょう。人々は、このような条件下での建築に畏敬の念を長く抱き続けることでしょう。大規模な建設工事は、動員される組織や巨大権力、そして実現する意志があってはじめて可能です。ローマをはじめイタリアの地方では古代ローマの円形闘技場が今も使われていますが、そこを私が初めて訪れた時の経験に少し似ているように思います。イギリスの古代ローマ時代の遺跡では、高さが2m残って

いるだけで“なんて保存状態がいいんだ”となります。現在なお使われているコロッセオが持つ迫力と比べると、ちっぽけだったと気付きました。観光客のみならず地元の人も含めた訪問者がその土地でなされた業績に直接触れて理解するのは、全く異なる経験だと思います。これは、デジタルによる再構築では得ることができません。ですから再構築という形も人々の心や意識に響くのです。人々がそれを楽しみ守りたいと思うのはいいことです。

稲葉：日本では実寸大のモデルを用いて研究することで、考古学が進歩してきた歴史があります。特に先史時代の遺跡についてはそうです。つまり、これが研究の進歩に役立ってきたとも言えます。実験考古学というものですね。

コマー：つまり、あなたの言おうとしていることを確認しますと、モデルを作成すること自体が考古学研究の一環なのですね？なるほど、印象的で面白い話です。私が縄文時代の遺跡で注目したのですが、復元建物を故意に焼失させ、それが埋没した後に再発掘する、そしてどう見えるか観察する。実験考古学として非常にいいと思います。研究という観点において非常に有益ですし、その過程に訪問者も興味を引かれるでしょう。人々を惹きつける二重の魅力があります。一つは考古学研究にとって、もう一つは市民の関心にとってです。また、再構築の正確さを向上させる納得のいく証拠も得られますからね。

稲葉：どうもありがとうございます。これが実寸大の再構築の利点の一つです。

友田：私たちは、常に正確性の向上を目指します。古代の建物の模型についての話ですが、実験考古学というのはこの種の研究の大きな動機付けになります。元あった場所に作るか、違う場所に作るか、それはまた別の問題です。それとこれとは分ける必要があると思います。

市原：御所野遺跡における実験考古学について言いますと、地元の一般市民が管理しているところが印象的です。縄文人の自然に対する営み、自然との共生や創造など市民たちが直接肌に触れ、理解することができます。彼らは、縄文人の感覚を感じ取ることができます。この点こそ高田さんが自身の報告でお伝えになりたかったことでしょう。

友田：学者の自己満足といった類では決してありません。

市原：それだけでなく。

友田：一般の人々のための。

市原：管理ですね。

友田：その通りです。

マッカラン：私も同感です。これは、一つの変化だと思います。私たち豪州・米国・英国からの参加者は、自国あるいは世界での動向が少しずつこの方向性にシフトしつつあると述べました。イギリスの地方の共同体では、地元の人たちが地元の遺産に関わる必要性を議論する声が高まってきています。この国は、ほんの一世代前までは非常に中央集権的でした。ロンドンの人間が国家的重要事項を決め、各地の遺跡を巡っては禁止事項だけを伝えていました。でも、それは少しずつ変わりつつあると思います。地域社会が主導したり、関わった計画の方に興味をそそられる専門家も多いと思います。もちろん、発掘が行われる時には考古学の基準を満たしているか確認する必要がありますが、地元の人たち、とりわけ若者や子供が参画すれば、遺産の先にある公益が多いと感じる専門家は少ないと思います。イギリスの専門家たちは今、遺跡保護の先にある遺産の公益、つまり遺跡に携わることが市民にとって恩恵が大きいことを実証しようとしています。ある意味、より全体的で洗練された手法により地域の理解の中で遺跡を考えた図式です。良い方向性だと思います。この考えを論理的に説明できれば、専門家たちも合意すると思います。イコモスやユネスコの管理計画の国際的基準は、どんな取組みが可能か指針を与えてくれるでしょう。ですからイギリスでも、この種の取組みが増えています。でも、日本やその他の国の方が進んでいますよ。もっとずっと長い間考えられてきましたからね。

友田：ダンカンさんが、イコモスやユネスコなどの国際的規範に言及されました。率直に言えば、私たちは、現位置でレプリカ復元を行っていることについて正当化できるような国際的な規定や基準がないものかといつも探し求めているのです。しかし、今のところは、それらのうちに確固とした正当化の根拠は見出せていません。例えば、1990年にイコモスが採択した「考古遺産管理・運営のための国際憲章」というものがあります。この憲章では、リコンストラクションに言及していますが、「リコンストラクションは遺構の直上で行うべきではない」と書かれています。ただ、私の理解では、ここで言及されているのは建物の基底部分とか、何か構造体の一部が残っている場合のことで、そのような考古遺構の上に新たな要素を付け加えるべきではないという意味だと思います。もう一つ、

もっと最近の憲章としては、たしか 2008 年に「文化遺産の解説と展示に関するイコモス憲章」というものが採択されています。そこでは、「視覚的リコンストラクション」に言及されています。しかし、私の理解では、これは日本の「整備」の場合には当てはまらないもので、むしろデジタルでの再現といった展示方法のことを述べているのだと解釈しています。このような理解で正しいでしょうか。現位置で行う実物大模型である建物について言及している国際的な規則や基準が何かありますか。

コマー： よろしいでしょうか。お伝えしたいことがあります。あなたが言及する 1990 年の憲章は、確かに現地にそのような構築物を設けてはいけなくと規定しています。ですが、アメリカなら原位置に置くことを主張したでしょう。思うに 1990 年当時の懸念は、現地にある考古遺物及び遺構を傷付けはしないかという点です。しかし、現地での再構築の考えを必ずしも排除するものではありません。あの時代に戻って憲章の正文を読み返す必要がありますが、更新されるべき内容だと思います。世の中は変わりましたし、様々な手法が存在しますね。

友田： 私の理解では、あの憲章は、そこに存在する考古遺跡の保護の重要性を強調していました。私が思うに、それだからこそ遺跡の直上でのリコンストラクションを禁止したのです。

コマー： ええ、でも方法は多々あります。日本でもやっていますし、アメリカでも数例があることを以前に述べました。

友田： 日本において遺構の直上で復元を行う場合は、必ず保護層を設けています。

コマー： ですから、懸念は払拭されます。その懸念はもっともですが、保護する方法は数々あります。保護層を設けるのもその一つです。前にも言ったように物理的再構築や複製は、時に国立公園での解説に不可欠で、その際はカンチレバー方式を採りました。つまり、地下に遺構がない場所に杭を打ってその上に構築物を建てましたが、他にも方法はあります。もちろん、私は国立公園局の指針に長らく携わってきましたので、私には元あった場に戻すという方が道理に適うと思えるのです。場所を変えてしまったら、もうそれは同一のものではありません。いずれにしても、私たちは 1990 年憲章を見直すべきでしょう。

友田： つまり 1990 年憲章の採択時には、現地で遺構を再構築するという選択肢は想定されていなかったと？

コマー： ええ、想定されていなかった。そういうことだと思います。少なくともアメリカでは、そのように認識されています。

稲葉： 再構築に対しては、基本的に国際標準や倫理綱領は厳しいですね。リチャードさんとダンカンさんが手を挙げました。では、まずリチャードさんからどうぞ。

マッケイ： どうもありがとうございます。今のやり取りに関連してコメントしたいと思います。そのイコモスの憲章は、多くの点において 20 世紀後半の状況を反映したものだと思います。その数十年間に世界中で行われてきた発掘は、新たな法整備に基づくものであり、文化資源管理の一環でもあり、同時に膨大な遺物を掘り出し、多くの遺跡を破壊しました。たとえ計画的学術調査であっても、破壊は免れ得ません。その反省から 1990 年の憲章は、遺跡自身に加え保全や保存の重要性も認識しました。それから私が観察したところによると、20 世紀は、考古学の社会的価値がより広く認知されるようになる時代です。また同時に人々は、ある疑問を抱き始めます。なぜ発掘するのか、誰が分析するのか、社会にどう還元されるのか、なぜ考古学が必要か？という倫理的な問い掛けが生まれます。さらに 1990 年代には、面白い変化がありました。考古学がイベント化するんです。現地説明会、展示会、ボランティア参加、人々が発掘の様々な段階にお金を払って参加し始め、こんな状況が地方でも国でも検討されるようになりました。人々が行きたい場所、何かを学び、楽しめる場所。このように考古遺跡の価値が認識され始めます。この背景の延長線上に私たちの今の議論があると思います。遺跡の直上で解説目的の構築物を作る是非や遺跡の価値とその属性の保存に対し復元遺構が両立可能かとか、つまり前世紀来の遺跡破壊とその反省という二つの過程から、学術的潜在価値よりも考古学と考古遺跡の社会的価値が重要だと認識されるに至った。このように私は考えます。

稲葉： ありがとうございます。

マッカラン： では、次は私から。私は、今の話の両方に賛成です。イギリスの動向について私が先ず述べたかったのは、保存から変化の管理へ、つまり一時代との関係で固定的に遺跡を定義できないという認識に移りつつあることです。この点については、先ほど申し上げました。歴史的かどうかは別として、私たちの環境に対する現実的なアプローチへと変化しつつあると思います。ですから、諸憲章が現在の要請に適っているかの見直しは、先ほど指摘されたいいくつかの

点だけではなく、様々な点から考える余地が十分にあると思います。発掘を取り巻く社会的変化については、リチャードさんがとても明確に説明しました。発掘のあり方に関連してイギリスの例を挙げれば、出土遺物は危機的な状態にあります。30年近く前にシステムが大きく変わって、発掘経費は開発者の負担となりました。大きな変化でした。ほとんどの場合は、公費でなく原因者負担です。これに伴い膨大な遺物が出土するようになり、その管理や解説の問題が生じます。つまり、遺物の整理と理解がその量に追いついておらず、大きな課題です。お気づきかもしれませんが、イギリスは、世界遺産やイギリスが考えるその管理方法に関してユネスコと少し対立したことがありました。先に話した遺跡ではなく、開発やインフラ整備の多い都市やその近郊の遺跡についてです。憲章を議論するのは、意味ある事でしょう。憲章が時代の要請に適切であるか見直す時期だと思います。憲章は常に個々の遺跡を考える指針でしたし、文化遺産には地元政治家の意向やどんな資金が得られるかなど、遺産以外の判断要素があります。これらの要素が複雑に絡む中、遺跡を適切に管理する上で憲章は大きな助けになります。公式な見解ではありませんが個人としては、今は少し難しいかもしれませんが、それについて対話するのはいいことだと思います。我々の多様な見方で、遺産の考え方、用語、研究手法、これらの変化について考えるのは、リチャードさんが言うように時宜に適切であるでしょう。西欧の世界観に基づいた考え方ばかりではなく、無論我々にはより広い視野がありますし、人類の文化の見方に違いがあると私たちは認識しています。ですから、それらに取り組む適切な時期かもしれません。憲章を見直しても用語自体はあまり代わり映えないでしょうが、それらに新たな意味を付加できるかもしれません。このセミナーは、とても興味深いと思います。自分の考え方や学び方、憲章の知識も問われました。世の中は変わっており、考え方も変わって、変化の時期だと思います。

稲葉： どうもありがとうございます。多くの憲章がありますね。私の理解では、実際は各遺跡であらゆる過程を経て判断されます。憲章に照らして合うかどうかだけじゃありません。日本では先史時代の遺跡の管理と解説の決定は、長年の経験からきた答えです。遺跡は公的資金を使って地元住民たちからとか、時には開発者から取得されました。ですからその意味でも、地元への還元は必要です。訪問者向けの解説は、不可欠です。地上に何も無い状態で遺跡を放っておけませんでした。公的資金が得られる場合、遺跡の博物館を

建設して出土した遺物を展示したりします。それから小さな遺跡のモデルもそこにあります。そうした遺跡の博物館に加えて、屋外型であっても訪問者に対応する必要はあります。特に地元の人たちです。これが長い歴史の末の答えです。ガイドライン全体や充当される資金源などは、市原さんの部局が制定しました。さらに日本には、実験的手法で遺跡の状況を研究しようという考古学者のネットワークがあります。その他の状況として、住民代表・専門家・研究者からなる検討委員会が地元で設けられ、それらを決定しているのです。ですから、そういうプロセスを経た結果としてのご覧の御所野と一乗谷なのです。珍しい再現の様子が見られます。地元の政治機関の話をもさらに続けましょう。地方政府は、こういう遺跡管理を続けるでしょう。遺跡の解説についても続けるでしょう。国土の狭い日本は、他所に実寸大のモデルは作れず、その場で何とかしないとイケません。広い用地を取得しようと思ったとしても、土地には限りがあります。どんな条件下なら？自然環境の再構築は許されていますよね？たとえば古代の植生から構成される森などです。クリの木とかですね。あるいは水流などの自然環境の再構築は？許されますか？問題は建築物でしょうか？私たちは再構築に慣れてしまったとか？どう思われますか？こうした処置をどこまで許しますか？懸念されるのは、建築物か、自然環境の森林か、川か、それら全てでしょうか？

友田： つまり日本の遺跡の場合は、実物大の展示というのは建築物に限ったことではなくて自然の要素も対象になるし、例えば古墳のような人工的なマウンドについても復元が行われています。考古遺構の実物を保護して、それを覆う形で行います。この種の作業は、皆さんの国では許容されるでしょうか？

稲葉： 保護シェルターでもあるし。

友田： はい。

稲葉： 表層部の復元でもあると。

友田： その通りです。

稲葉： そうですね。

コマー： 環境の再構築のことですか、それとも複製ですか。

稲葉： 前者です。

コマー： はい、行われています。本当に信憑性あるデータや復元の正当な理由がある場合に限られますが、復元や再構築を判断するのと同じ状況です。復元とか再構築とか呼び方は別としてですが。ですから、

特に史跡にとってはとても大きな問題です。史跡の周辺景観については、多くの調査研究がなされています。遺跡周辺の植生回復は、重要な要素の一つです。樹木というのは、プランテーションでは奴隷と所有者を隔てていましたし、また戦場でなら前に言ったように並木や垣根は重要です。川の流れについても、それが歴史を語る要素ならまさに文化的景観です。個々の建築物ではなく、文化的景観に話が移行しています。アメリカの国立公園では、かなりそうになっています。文化的景観の回復は、時間を要します。南北戦争の遺跡のようなケースでは、40年もこれに取り組んでおり、今でも継続しています。トウモロコシ畑を元に戻したり、そこにあった木を見つけて植え育てるには時間がかかります。少なくともアメリカでは、かなり関心が持たれています。

稲葉： ありがとうございます。とするとアメリカでは、自然環境や文化的景観にある種の再構築があるのですね。イギリスはどうですか。ダンカンさん、お願いします。

マッカラン： アメリカはイギリスより広いから楽かもしれませんね。とは言え、二つの点を挙げたいと思います。一つ目は、私たちが遺跡の周辺環境をよりよく理解しようと、そういう方向に動いています。自然環境と歴史環境を総合的に理解できるよう数十年来努力してきました。しかし、この国では両者に大きな隔たりがあり、まだ時間がかかると感じています。両者を別物として考えることは、危険なことです。特に先史時代においては、これらは一体的で同じようなものですから。もう一つの興味深い状況は、最近、世界遺産になった「湖水地方国立公園」でして、その再自然化を巡る熱い議論です。イギリスにおいて純粋な自然は、自分の胸の内にしかありません。オーストラリアとかアメリカなどに行くと、イギリスで最も自然な場所がそんなに自然ではないことに気づかされます。近くに必ずパブがありますからね。実際の遺構や復元建物などがより広大な周辺景観の中でどこにどのように位置するのか。同様に、河川・樹木・牧草地などが遺跡とどう関係するのか。景観を一体のものとして捉える、このようなことを考える方向へ少しずつ向かっていると思います。ですが、それぞれの学問は別々に発展してきたので、自然と文化の学際的研究は、伝統的にあまり見られません。より広く物事を見ることを私たちはしてこなかった。そして皮肉にも、最近の気候変動の議論に促されて、この見方への移行が進んでいるようです。遺跡関係者は、気候や環境の変化に

関連して遺跡や構造物の管理法を考えざるを得なくなりました。このような考え方は、今後総合的に遺跡を管理する上で有効でしょう。

稲葉： では リチャードさんは？

マッケイ： 景観に関して言いますと、ここオーストラリアや太平洋諸国では、遺産の伝統的当事者にとり全てが文化的景観であり、全てが常に変貌しています。国民自身が国に代わる遺産管理の責任者なのです。自然と文化の両方の価値で複合登録されたきわめて広域な世界遺産が数多くあります。「ウルル-カタ・ジュタ」のような所では、各国からの訪問者は巨大な赤岩を見て珍しい自然の一枚岩だと思いますが、伝統的当事者たちはそこに先祖の魂を見ます。この景観を通じて伝統を続け、国の文化を育むには、彼らの能動的な関わりが不可欠です。このことは、「ブジ・ビム」のようなアボリジニの遺跡においてもみることができます。「ブジ・ビム」は、2019年に世界遺産に登録されたオーストラリアの南西部の遺跡で、水産養殖地や小屋があります。6000年前にオーストラリアのアボリジニたちは、石の小屋を建て、川の流れを変えて養殖していました。ヨーロッパ人入植以前から養殖地として利用された場所に今また水が張られており、景観の再構築の先駆けです。また、崩れた小屋の石を積み直したりなど、これは伝統的当事者による現代的意味をもつ文化的景観の再構築の好例です。太平洋にも同様に、バヌアツの「首長ロイ・マタの地」やソロモン諸島の「東レンネル」のような世界遺産があります。大昔の考古学的な過去と現代とに区切りなどはなくて、一つにつながっているのです。「整備」という語や概念は、文化的景観にとって理想的です。その場所自身の維持や文化的活動を包括するからです。

稲葉： ありがとうございます。いつも同僚から聞かれる質問の一つあるのですが、リチャードさんに聞きます。アボリジニの文化的景観の復元は、遺産に対してですか。それとも解説のみを意図しているのでしょうか。

マッケイ： その質問にお答えしましょう。これは先史・有史の別なく、遺棄されることなく今日まで脈々と継続する文化なのです。人間・文化的伝統・景観は、いずれも何万年の間、常に変化してきました。ヨーロッパ人の入植以後、変化は一層顕著になりました。さきほど誰かが話していた遺跡についてと同様、この連続する変化に奇跡の瞬間や時代などありません。その好例として、火の使用が挙げられます。火は、景観を管理する道具として何千年にもわたり文化的目的

に応じて生態系を変えてきました。そして気候変動が叫ばれる今になって初めて、研究者や土地の管理者たちは、火との関わりが伝統的景観の維持、さらに気候変動に対する強靭性を確保する上でいかに大切か気づきだしました。

稲葉： ありがとうございます。市原さんが聞きたいのではないかと思います。その種の景観の再構築に関しては真正性を問えるものでしょうか。また、将来的に守られるべきものなのでしょうか？

市原： そうなんです。とても興味深い問題です。というのも、日本でも数々の再構築の、復元建物がたくさんありまして、30年ほど前に建てられたものも今日まで維持されています。ところが、これには少々お金がかかりまして、そのままの形を保つのが難しくなり始めました。これも遺産の一部なら、と私はいつも考えます。もしも遺産として扱うことができるなら、国の予算を使ってこれらの維持ができるわけですね。しかし、単なる模型なら、そうした構造物に対する巨額の出費は、少々難しいと思います。ですから、こういう類いの問いをいつも考えます。持続可能な維持方法は何かと。遺跡そのものと同じように持続可能な開発のモニュメントとしても、文化遺産を持続可能にする方法はないのでしょうか。あるなら、これら解説用の模型を理解する方法もあるはずですよ。こうしたモデルを考える手がかりを持っている人はいらっしゃいますか？

コマー： 少しお話ししましょうか。世界遺産の「チャコ文化」をご存知でしょうか。実に壮観でおそらく合衆国の大陸部にあるネイティブ・アメリカンの建築物としては最も壮大なものです。チャコ文化圏はニューメキシコ州の大部分とユタ州南部に広がります。しかし、トランプ政権下で大きな議論が持ち上がりました。政府は、その一帯におけるシェールガスの採掘権を売りに出したのです。チャコの文化的景観は、壮大な建物群を道路網がつなぐ手つかずの美しい景観です。ですから、もちろんこれに環境活動家たちは激怒しました。怒ったのは、他にもいました。プエブロ族の人たちです。ここを自分たちの故郷と考えていたからです。彼らの言葉を借りてその見方を説明しますと、“ここは私たちの聖なる土地だ”、“君たちは先祖伝来の聖なる景観を破壊している”、“醜く臭い場所になっている”などです。この政治的影響は大きかったです。つまり、文化的景観の概念やアボリジニにとっての重要性を理解してもらった一つの方法が、政治的協力関係だったということです。また、市民もこれにとっても好

意的でした。市民を味方にするのも、一つの方法です。文化的景観の保全は、当然、環境との共生を含みます。これは環境を破壊する開発に対抗する一つの方法です。この種の開発は、土着の遺産を破壊する行為でもありますから。

稲葉： はい。

マッカラン： そのことに関連して、個々の遺跡からは離れますが興味深い話の一つがあります。イギリスでは低地での洪水が増えています、その対策として伝統的な排水システムが注目され、ハードな技術頼みから脱却してより柔軟な手法へと向かおうとしています。これは非常に強い意見です。公的に水を管理する環境庁は、それについてだんだん気がついてきていると思います。これが成功している理由の一つは、野鳥の生態や生物多様性など自然環境を回復させると同時に、いいデザインならば伝統的水管理システムや歴史的環境が回復するからです。しかし、まだ模索的段階です。歴史的環境の自然的要素は、遺構が密集する場所に比べるとまだよくは分かっていません。文化的側面ではなく経済的側面から狭い国土の賢い利用を議論するのは興味深いですし、確かにその方向性が感じられます。重要な成長の見込める分野だと思います。現在、文化遺産の関係者は、水管理や土地利用の関係者にこの方式の経済性について説得を試みています。これが長期的景観管理の総合的方法に発展することを願っています。つまり、コンクリートだけが解決策ではないということです。もちろんヴェネチアのように、技術の多用が唯一の保護手段だったという苦渋の選択もあります。でも多くの場合は、折衷案を見いだせるでしょう。今後、文化遺産の専門家がこの方法を実現していくには、不可逆的に変化し回復不可能な環境があることを認識しながら、景観の再生にむけた技術者との協力関係が不可欠だと思います。成長分野ですが、現時点ではまだよく理解されていません。

稲葉： ありがとうございます。市原さん、よろしいでしょうか。

市原： 分かりました。景観のための要素として役に立つには、30年では少々足りないように思います。しかし、私たちがこのように続けていけば、自分たちの文化や環境に有効と考える人が出るように思います。そして将来、ある種の遺産として扱われるかもしれません。ありがとうございます。

3. 「整備」という用語の英訳について

稲葉： ありがとうございます。時間が迫ってきました。日本語の「整備」に相当する英単語について聞く前に、友田さんが笑ってますね。とにかく進めましょう。私たちが理解している「整備」、私たちが「整備」と呼んでいる手法は、考古遺跡をいかに管理するかという包括的なアプローチです。とても便利な言葉だと思います。世界的にも同じように理解されているのでしょうか。「整備」というのは考古遺跡を管理する一種の包括的アプローチですが、それに相当する言葉は存在するのでしょうか。

コマー： 「包括的遺跡管理」と呼べますよね。

稲葉： 「包括的遺跡管理」ですか？

コマー： 私の造語ですが、こういうことを言っているのでしょうか？

友田： これまでの話の中でダンカンさんが指摘していたことですが、保全することと解説は分けて考えがちですね。

コマー： ええ。

友田： 「整備」は両面に関わります。

コマー： 同感です。もう一つ簡単に付け加えます。今ここで話し合ってきたことから思いつくのは、人々の理解を変えるような原動力です。過去にあまり解説されてこなかったような遺跡にとって、いかに解説が重要かという認識です。多様化の話に戻りますが、私たちが関心を持ってきた遺産は、耐久性のある材質でできているので、基本的に現代的というか西欧的です。文化的に異なる集団が相互に影響し合って環境に影響を与えた結果を理解したいなら、きちんと語らねばなりません。学術論文ではできません。実物を市民に見せないとね。アメリカで強力なのは、遺跡の多様化という考えです。特に、さきほど話したチャコのような土着文化の遺跡です。そうした土着の集団と協力関係を結ぶのが、私たちみんなに共通する公益です。そこには環境との共生があり、今まで意図的に保存と解釈を分けてきた手法を見直す大きな推進力になるでしょう。

稲葉： ありがとうございます。リチャードさん、どうぞ。

マッケイ： ありがとうございます。私も疑問はありません。「整備」を明確に言い表した英単語はないですね。この討論に参加して自分なりに理解したのは、場所を管理経営する一連の過程だということです。ダ

グラスさんの「包括的」という表現は、的を射ていると思います。思い出したのは、2000年代初期のカンボジアでアンコール遺跡の事業に参加した時のことです。その時、同僚たちと活発な議論を交わしました。物質文化保存の必要性が解釈のあり方に対して枠組みとなるべきだとか、解釈と訪問者の機会、解説と経験を定義する必要があるとか、そこから物的作業の計画を決定すべきだとか。もちろん答えは、両方を統合することです。その根底には理解が必要です。保全しようとしている場所の何が重要なのかだけでなく、管理の現実や現実の脅威にさらされた資源を理解し、地元住民・そこで働く人・訪問者がどう使うか理解することです。ですからこれは、単なる言い方の問題ではありません。その価値と課題を理解することから始まって、価値を維持し、課題を管理するための決定を行うのですから、完全に包括的管理の問題です。

稲葉： どうもありがとうございます。ダンカンさん、いかがでしょう？

マッカラン： 全く同感です。付け加える知識はありません。「包括的遺跡管理」でも「全体包括的遺跡管理」もいいですが、「全体」とは限らないので「包括的遺跡管理」で十分だと思います。全て統合して判断することはないでしょうから、総合的な観点から「整備」の広い意味を伝えています。西欧の昔ながらのアプローチに欠けているものです。ですから、いい言葉だと思います。

稲葉： 日本の考古学者が意を強くしたでしょう。ありがとうございます。日本の方から質問やコメントはありますか。友田さんは、以前アンコールで働いていましたね。

友田： はい 今でも働いています。

稲葉： そのような議論があったのを覚えていますか？

友田： はい、覚えています。ええ、アンコールではこれまでずっと修復が行われてきましたが、構造物が破損しているといった状況への対処として修復せざるをえなかったというのが実態に近いと思います。私の現場でマスタープランを策定した時には、遺跡の全体管理の一環として修復を位置づけることにしました。このケースでは寺院の正門を修復したのですが、その理由は、そこが寺院の正面で本来の入口だということを訪れる人に理解してもらいたいと思ったからです。それこそが、私たちがこの建物を修復対象に選んだ理由でした。うまく言えませんが、価値に立脚したというか目的に立脚したというか。このような修復

は、以前のアンコールでは行われていませんでした。そこが、私がこだわったポイントです。

稲葉： このセッションの目的にも適います。日本人は整備というアプローチを国際的に位置づけたいと思っていて、その辺について意見を伺いたかったのです。多くの情報、いいコメントを頂戴して、そのどれもが興味深くて実に有益でした。おかげで、私たちの理解が進みました。感謝します。現場で整備という管理法を取る日本の考古学者たちに向けて最後に何かメッセージはありませんか。

コマー： 良い仕事をしっかり続けてください。

稲葉： ありがとうございます。

マッカラン： 私からは、もうやっていると思います。が、地元を巻き込みましょう。イギリスの多くの遺跡では、これが本当に前向きな変化の一つと言えます。地元の人を巻き込めば巻き込むほど、より遺跡に関心を持ち無償でも手入れしたがるようになります。

マッケイ： それに同意した上で付け足します。皆さんの地元の考古遺跡には考古以外の価値も同時にあって、これにも注意を払う必要がある、このことを忘れないでください。

稲葉： ありがとうございます。ではセッション2を終わりにして、司会を西さんにお返しします。

おわりに

西： ありがとうございます。実り多いディスカッションでした。正直に言うと、期待以上です。今後のディスカッションの論点を二、三思いつきました。この意味でも、いい討論でした。例えば、景観や時間幅といったより大きな尺度での話だとか、この討論ではコメントできませんでしたが、デジタルによる利用者体験についてなど議論を深められそうです。どうしてかと言いますと、そういうデジタルによる再構築や3Dなどは新しくて刺激的ですし、おそらく5年のうち

には現実的になるでしょう。そんな未来が早く来るように感じられるのです。思っていたよりもずっと早くですね。このウェブ討論も、その例です。ですから、5年から10年の間こうした話し合いを続けていけば、状況が今と大きく変わるかもしれません。とにかく、さらなる議論の種が見つかったのは、本日の討論の良かった点だと思います。場所によっては早朝や深夜の方もいますが、皆さんありがとうございました。今後、日本人視聴者のために翻訳を準備します。本日は、どうもありがとうございました。



(原文)

Introduction

Inaba: Thank you very much, Mr. Nishi. So thank you very much for all of you joining our discussion tonight or it's morning or... So I was asked to be a facilitator for this session. This is Session 2. So I would like to follow the discussion points sent to you before from Mr. Nishi. First, I would like to start from the Session 1. Session 1 already distributed. There were four presentations, two about Japanese case studies and two from Mr. McCallum and from Mr. Comer. Thank you very much. And so the presenters of two presentations from Japan, they are not here. So I would like to start from your comments or questions to those two Japanese presenters. The first one by Mr. Takada, he presented about his site. It's a *Jomon* prehistoric residential site. And the second by Mr. Yoshioka is about the medieval or in the fortification and the residential regional headquarters site. So both, basically, all [that is] remaining is underground archaeological site. So based on archaeological excavations, they did very thorough archaeological studies. And based on that, they were in charge of how to manage the site and how to present the site to the visitors. So I would like to ask [for] your comments or questions about these presentations by Mr. Takada and Mr. Yoshioka. How about that?

1. Japanese case studies of *seibi*

Mackay: Yes. I was thinking a lot about the *Goshono* site and the presentation by Mr. Takada. And I mean, it seemed to me, it's quite instructive because it combines the notion of preserving the site with interpreting the site, reconstructing the landscape, and yet using the site as a venue for scientific endeavour and further investigation through quite an unusual process of intervention. I mean, it's really very unusual to reconstruct and then destroy in order to understand the process of destruction for the rest of the site. And I was thinking about that in terms of the framework that we use in World Heritage, which looks at retaining the attributes of a property that contribute to its Outstanding Universal Value. And it struck me that obviously the Outstanding Universal Value of this property has been retained because it's included on the serial nomination and the serial inscription of *Jomon* sites

which has occurred at the most recent Committee session. So it served to me as a reminder that while it is a very unusual and engaging case study with some unexpected approaches. Actually, it's kept the very attributes of the site that are important to its heritage value. So I think it's a very good conservation outcome as well as an extremely good outcome for academics and visitors.

Inaba: Thank you very much. You said that it retains the attributes?

Mackay: Yes.

Inaba: So I'd like to ask the details later. So next is Mr. McCallum?

McCallum: Thank you. Just picking up on that, I mean, I think Mr. Takada's example, I found very interesting. I think one of the things, in fact both of them show a really good way that the archaeology, the initial archaeological phase is connected through and thought through in relation to interpretation how visitors might experience that. And what was clear from both presentations is how much careful thought had been done in that and also the integration between the different phases. And I think sometimes in the UK, perhaps we discover a site, we want to do the excavation, and perhaps we worry less about how the public might enjoy it at that time and more about we worry about that later on in the process. So I think, for me, that was one of the lessons, that kind of integrated approach, which I think is a really good approach to take. I guess the question I have in my mind, and I've looked at the notes a couple of times for both sites, is about exactly how the reconstructions took place. And I understand that they were complete reconstructions because I suppose, in the United Kingdom generally, if we do reconstruction, we tend to do it off site, fairly close but not on the site. And I think it was in Mr. Takada's presentation where he talked about the importance of understanding the original location and the exact position of the constructions and why they were there. And I can understand the logic therefore in wanting to do some reconstruction in that precise location if that's where it took place. I guess my worry is whether, in doing the reconstruction, you do some damage and lose some evidence for what was there originally. Because as science develops and our abilities to understand archaeological sites increase over the years, then I suppose my worry is whether there's evidence being lost that might be retained if reconstruction took place

somewhere else. But I accept absolutely from the public's point of view. And after all, why do we do this stuff? We do a lot of it for the public to help them understand and appreciate what's important to their culture and their heritage or somebody else's culture. And it makes more sense to do things *in situ*, in the place. So in that sense, you can argue it is more authentic. So I think it raised a lot of interesting thoughts in my mind. Some of them I found quite challenging, but equally I could see that there was another way that in the United Kingdom would be really hard to persuade people to agree to it. But nevertheless, I felt there was a lot of logic in that.

Inaba: Thank you very much. So it was in the how to damage to the archaeological evidences. Basically I understand there was already buried, and on top of that, not to damaging the archaeological evidence underground and built on top of that. That is the basic conditions what we allow such kind of presentations, interpretations. So Douglas visited the site many times. So you know well about those sites.

Comer: Yeah. And so I think the presentation really makes a strong argument for bearing in mind the eventual interpretation of the site. As a matter of fact, it's occurred to me that typically in the United States, in most places we do a research design and we're supposed to be thinking about the questions that we want to address and what we want to recover, how that's going to be used. I mentioned that in the guidelines that are used, let's say, by the U.S. National Park Service, which is the lead preservation organization in the United States, there is not that integration. There's the physical treatment of the site, guidance for restoration, which we don't do but we actually do, and stabilization, that sort of thing. Then you have a totally separate document that deals with interpretation. And as an archaeologist, I have to say it's always rather disturbed me because many archaeological sites are not above ground, they're not made out of stone. So if you really want to represent the past, I mean the full spectrum of what happened in the past, you've got to figure out some way to present this to the public. The public doesn't really read archaeological reports. They don't necessarily read journals and they certainly don't just read the archaeological reports that are typically written after an excavation for whatever organization has sponsored the excavation. So the only real way to get information about, again,

the things that have happened in the past that are really part of the whole human story is to provide some kind of physical representation of that. And as I mentioned before, I think that the thinking in the US definitely is going to be geared toward heading in that direction, the kind of things that we're talking about that were presented. I don't really see that it's a major problem to do the sorts of things that were done at the *Jomon* sites, to interpret them, because again, the archaeological investigation had already been done and whatever damage to the archaeological record occurred is part of the collateral damage of doing archaeology. I don't think that the representation, the physical representation, of what was excavated necessarily has to damage the remaining archaeological resources at all. So I think that this makes a very good case for all of that.

Inaba: Thank you very much. So how about other sites, Mr. Yoshioka's site? Do you have some comments on those sites? The other one. The medieval fortification site. Maybe *Jomon* site was Richard and after Richard, McCallum. Please Mackay, Richard.

"(Douglas Comer: You're muted.)

Mackay: Yes. I'm sorry. The muting is the curse of the pandemic. But, Look, Perhaps before going on to the *Ichijodani* site, could I just comment? We should remember that for many of these places, the process of the archaeological investigation itself is a destructive process. So there isn't this binary choice between no disturbance or destruction and preservation. And the kind of reconstruction activities that we've been considering in these case studies sometimes fall in between, because they may involve some consequences for the site and its intactness and integrity in terms of physical change, but they may also provide protection and preservation opportunities. And it seems to me that the *Ichijodani* site was an evolving example of that with different types of interpretation and presentation, a more holistic landscape approach, which enabled different parts of the site to be treated in different manners. And it seemed to me that it did certainly in the two-dimensional parts of the site where treatments of paving and associated interpretation were used to convey the messages, it did seem to me that that was striking a good balance between preserving intact subsurface archaeological features and yet making the site accessible and informative for visitors. Where I did begin

to have some concerns was when Mr. Yoshioka moved into talking about some of the reconstructions, because if I understood the presentation correctly, they are consistent with the available evidence, but there's actually not enough evidence to say that this is an authoritative and authentic reconstruction. So there is a speculative element. And I find myself wondering about some of the points that Doug Comer made in his presentation about the need to base reconstruction on adequate information and be very clear in the communication to visitors about what is real and authentic and what is not real and authentic. And I was not confident that this was the case with some of the hypothetical reconstructions of the more extensive buildings.

2. Archaeological reconstruction

Inaba: Thank you very much. There were also Japanese concerns about the accuracy of the reconstructions. I would like to pick up this issue, but as a next discussion point, how accurate the reconstruction of... In particular, you are talking about these architectural reconstruction, architectural styles and other details. So more natural environment reconstruction is based on excavated or was in the natural materials. It's maybe better than in those kinds of architectural reconstructions. So that means what kind methods we are employing will be explained by Japanese experts later. So I will go back definitely about those hypothesis reconstruction issues. So Duncan, you wanted to speak about.

McCallum: Thank you. Yes. I think Richard makes an important thing, that there's a, in a sense, we can never make a reconstruction that's 100% accurate, even if, for example, we had somebody who illegally knocked down a public house which was built in the 1920s and they were required as punishment in effect to reconstruct that building exactly. But even so I'm sure some of the... I didn't check, but I'm sure some of the details are not quite right. It's kind of largely correct. So I suppose in my mind, the accuracy point is that you can never be 100% accurate if you try to copy something. And then in a way, I guess it partly depends on your character or your depth of knowledge about how accurate does it need to be before it's acceptable. And I think for the general public probably they're less concerned about the accuracy than academics might be. If the general public go away with a

good understanding of the kind of building, in general terms the kind of materials, then I think that's probably okay. And in a way, the academics, people like us, can carry on arguing about the fine detail and over the years and decades can correct those when the reconstruction has to be reconstructed one more time because it's wearing out. So I think there's a danger that people like me can get too fixated on not doing anything unless it's 100% accurate. I suppose the other point with all these sorts of sites is that the context inevitably will have changed. The site is being used in a very different way from the way it was at the same time. You go to archaeological sites these days and normally the grass is lovely and short and carefully manicured. And the site will be nothing like that, any of sites, wherever they are. And it's quite hard to get that balance between the environment being accurate. Even if the huts or the structures are reasonably accurate, then my guess is a lot of it would have been mud most of the time, dry earth around these sites. So I think there's another element in there to consider. But I think for me, one of the things in the UK in recent years that the government requires us to think about when we're deciding what to do with structures such as the ones we're talking about today or buildings is to think about public benefit. So there's a heritage consideration about accuracy and potential damage and those sorts of things. But we are required to think about the public benefit, the benefit to the wider public, not the experts, that comes from the work that somebody wants to do, an organization wants to do. And I think these examples, and the second one particularly, I felt the public benefit there was considerable. And in that sense, I think the public will go away much better informed about these kinds of buildings. They will think more about how they were lived in at the time, but also they'll think about how archaeologists do things, what an excavated site looks like, what a reconstructed site looks like. And it's quite good having those close to one another. In the UK, you're more likely to find those two things separated. So I think interesting lessons again from the second case study. Thank you.

Inaba: Thank you very much. Douglas, do you have some comment for the second one or the... Yeah.

Comer: Yes. So, I mean this is really interesting because now we're talking about durable materials and all that. And there's been so much anastylosis all over the

world, in Turkey and in Greece, in Peru and you name it, I mean, where we're dealing with physical structures. And yeah, it doesn't matter in a way. Whatever you do, it is not going to really represent what was there or what was being used. I mean brick buildings were painted. Now, if you painted one, everybody would say, "What is that?" It's something that they wouldn't expect. So I mean there's a concept of attribution, I think. And it's similar to if you write something, I mean, you need to cite your sources and let people know how you came up with whatever it is you're presenting and try to make that as convincing as possible. But also, if we were really honest about all of this, we would just tell people, "this is a representation and it's here because it's going to be very difficult for anybody to understand what was happening unless we have this physical representation". And yes, we'll try to use the original materials and do the best job that we can. There's another thing that people don't talk about, which is that if you have a structure, that structure was not static, almost always. It doesn't matter how long it was used. It's not as though that someone built it and it never changed. And the longer it was used, the more it changed. So if you're talking about putting it back together, you're faced with this really terrible decision, which is, what period am I going to use? And I won't name the sites, but I have seen anastylosis in operation, and I've seen walls that didn't belong to the time period of interest just bulldozed away, thrown into ravines. It's kind of something that we don't want to talk about, but it's a trade-off. I mean, it's a trade-off. I think as professionals, we're obligated to let people know how we came up with the representation that they're visiting, that they're looking at, that they're experiencing. And I think they'll accept that. If it were just a matter of using digital representations as opposed to trying to do this physically, it would be one thing, but it does not have the impact, it doesn't provide the same kind of experience. It just doesn't. And we've talked a little bit about this in the past. I mean, if you walk through a site that's been put back together and you see the clouds go by and you see the different light, it's the kind of experience that people can associate digital, they know it's digital. They can sit at home and look at their computer and see all the digital representations that they want. So it's a matter of being honest, I think. It's like the oath that doctors take. Try not to do any harm. First, do no harm. But if you have to have

an operation, there's going to be some disruption there and you just need to explain to people what's happened. It's not a perfect process by any means. It's an interesting process. There might even be opportunities to interpret the process that people would find interesting, but you try to be as honest as you possibly can and draw from all the information sources that you can. But I think professionally, it's an ethical issue to let people know how it was done and how the decisions are made somewhere.

Inaba: So thank you very much. It seems that is in the Japanese approach to the archaeological sites and in particular it's interpretation where it's unusual for you to do in such ways. And in Japan archaeological sites are found by saying that the time of development. Well, that development was in our developers obligated to do in some archaeological excavations, then found about that and to the protection and the designation study. So archaeological excavation is necessary to find the value to do that. So probably minimum archaeological excavation done enough for the authorities to decide how much, how wide it would be designated and the others. Then after that, there was in a local municipal or regional government archaeologist quite was in a professional team of archaeologists are there and to decide to how manage. Otherwise, these interpretations, those sites are just plain field. So nothing on top of that. So somehow some kind of interpretation on top of that is necessary. But the Japanese are very aware of that, this kind of reconstruction, how much accurate and authenticity, is aware of that. So that means, I was saying that I'm very much interested in what is in the attribute to be found in this kind of underground archaeological site, those things. So we are already going through to the second discussion point, which means the physical scale model or interpretations. I don't want to say it's reconstruction. Reconstruction to be used for the other sites to more recent period, which means all those periods where the records are clearer, well remained. So this is more underground archaeological sites and not so much as the evidence is found. So how to interpret or how to manage the site, which means basically if it's for doing nothing, then it's in plain field. So I would like to ask your opinion about what is in, how deal with this kind of full scale model. How do we think about it and for the future of that? But before that, at this moment, I would like to ask Japanese participants' opinions at this point. How about Tomoda-san or Ichihara-san?

Tomoda: Yes. Okay. Thank you very much. In my understanding, the case studies, two case studies, we introduced this time are from Japan, are kind of the model students. They are one of the best practices in what we think. And frankly speaking, they're not the typical case of the “*seibi*” in Japanese archaeological sites. But the common features are... For example, there are many cases [in which] archaeological sites are found in the midst of very urban conditions, circumstances. But this time we introduced two case studies from very natural surroundings, very good environmental conditions. Both of them are from such locations. The basic concepts of the “*seibi*” common to these two cases are representation or recovery of the ancient atmosphere or environmental setting of the site, and to make the visitors understand better what the ancient living site looked like. I think this is the basic concept. So the replication or the real size model of the building is an element of the overall representation or the recovery of the ancient atmosphere. This is my understanding. So even in case without making such a building model, maybe you can make a sort of representation of the ancient atmosphere to the visitors. But I want to ask the international experts: if you don't allow to make such a real scale model *in situ*, what kind of alternative means can be accepted? This is my question.

Inaba: So are there any answers?

Comer: To be sure I understand, when you talk about alternative means, are you talking about means alternative to the full-scale modelling?

Tomoda: Yeah.

Comer: Yeah. Okay. Well, something, that's been effective in other places in terms of trying to explain what happened at a site or what a structure is used for and that sort of thing, is you make a half-scale or a quarter-scale or a smaller model for the visitor centre. And people look at that. Or you may make a model of some important element in the structure. That can be very effective. The other thing, if you do a solid terrain model, if you have LIDAR data for example, that really gives you this precise surface model that includes the structures. And you put that in a visitor centre, people love that. And then they have the picture of the site in their head and they can walk around it. It's a different experience from being there looking at a physical representation of a single structure or a group of structures. And maybe [it] doesn't take the

place of it really, but it certainly enhances the visitor's understanding if you use models like that. And they don't even have to be big models. They don't even have to be a quarter-scale. It can be small scale. And then also, especially with the technologies that we have available today like LIDAR, I mean if you put it on the landscape, they just get it. And people can interpret that. People can point to a structure. They can point to the relationships among structures or some feature on the environment. It's very effective. It's a very effective interpretive device. I don't know that it necessarily replaces a physical model on site but it's a very, very powerful way to convey understanding of what the site was all about. It really gives them the context. And then they walk out on the site and they've got that in their head. Sometimes they walk back and look at this again. And it just all comes together. And we can do that now, I mean the LIDAR service, it's not that hard anymore. And it's really not that hard to make these three-dimensional models. I just mentioned that.

Tomoda: I understand that in England, in the UK, basically you don't allow to build the full-scale model *in situ*. What is the fundamental reason for that?

McCallum: How many hours do we have to talk about this? I think several reasons; I'll just put one or two of them. I won't bore you for too long. First of all, I guess, the philosophy of heritage and how we protect heritage. And I suppose in the UK we have more ruins that are stone rather than earth. And it's only, I guess, in the middle of the 20th century onwards perhaps that we got better at understanding and appreciating and being able to gain a lot of information about earth structures. So I suppose in the second half of the 19th century there was quite a strong movement because so many stone buildings, places of worship, churches and castles were being reconstructed in a very, now we would say, ill-informed way. The intention was good. They were trying to give a sense of the original feel of the place, but people didn't worry too much about the detailing. And I think in many ways the underlying concern, that we still have in this country, is trying to make sure that doesn't happen again. Now, the public on the other hand so Windsor Castle or St. Paul's Cathedral which was bombed in the Second World War reconstructed to a significant degree, I don't think the public care too much about that. They get the message that there's been some reconstruction, but what

they enjoy is something close to the original concept. So I think in a way it's maybe the academics, and the professionals who worry about it more. So I think that's one of the underlying factors why we are more worried about that sort of thing. I think in terms of reconstruction, thinking now about earth buildings and perhaps sites that are important, but not like Stonehenge, not the most important sites in the country, a lot of those will be in private ownership. Like some of these examples, you have a development proposal, suddenly there's some initial investigation done, you realize there's an important site there, often that site won't end up in public hands, it will remain in private hands, or it might be owned by a charitable trust. And the fact is, there's not much money in there, and there may be some sources of funding, but reconstruction is very expensive. So there's an economic argument to say interpretation, and minimal work, has a lot to do with a pragmatic approach. And I guess the third point is a very recent one, which is about, I'm not a digital-first person, I wasn't brought up in the digital world, but I think we've worried for years about how we engage with younger people, and how can we get younger people involved in heritage in a deeper way. And for them, digital is just another dimension to their world, in a way that's not so intuitive to older people like me. So I think the modelling that Douglas was talking about, and the ability to show people phases of the development of a site through digital means, is a really powerful way of conveying information as much information as people want or as little as they want. And also in that way it shows the evolution of a site. So it's not just we are conserving and reconstructing the best phase, the high phase, whatever it might be. It allows you to show layers and how the site started quite small, and then it got bigger, and then there was a catastrophe, and then it started again but in a slightly different place. So I think potentially the digital approach does give you a much more layered approach. And because of the way that the information is stored, you can access that information in so many different ways. You can do a version for children, you can do a version for adults. And I suppose there's a danger, much as I like reconstructions, and much as I enjoy visiting them, that a physical reconstruction just gives you one snapshot at the point that, we think now, is the most important part or the most interesting part whereas sometimes it's actually the evolution that may be as interesting as the high point.

Tomoda: In my understanding, one of the good points in building the real scale replica of the ancient building is that it's a very powerful means to attract people to go to the site and make them experience the atmosphere of the ancient site. And in my understanding, the digital technology has not yet reached to that level at this moment.

Inaba: Thank you Tomodo-san, and Duncan. So how about Ichihara-san, do you have some comments? Because you are in charge of the nationwide management of our archaeological sites at the National Agency for Cultural Affairs.

Ichihara: Thank you, Inaba-san. But I think Richard has some question or something, Richard?

Inaba: Okay, Richard, please.

Mackay: Yes, perhaps before we leave Tomoda-san's questions, I think the big point that I would like to make is that these are all choices, and there's not a correct model and an incorrect model, and a correct approach and an incorrect approach. And even with the same set of information, different managers and different countries and cultures will make different decisions. But ultimately it's very important to be mindful of the site circumstances, not only the heritage values and the attributes that contribute to the heritage values, but also the practical conservation requirements or the physical and political setting, the expectations of authorities and visitors. And so these things often come together in a site management decision about placing a reconstruction or placing an interpretive device. And the one thing I would say though, I mean, many of the historic cultural ruins that we talk about do have standing structures already, and it's often that there is physical evidence, masonry or other standing ruins, that are present and enable a story to be told. The ones that are very challenging are the ones that are entirely subsurface. And of course, earthen and timber structures are more numerous amongst them because of what happens during the process of time. And so then there becomes an issue of a value judgment between the integrity of the archaeological resource and the interpretive ability of the structure. And in some cases, if you reconstruct away from the physical remains themselves, it's possible to get the best of both worlds to have the reconstruction and have the site conserved. But sometimes, and I think the *Goshono* site that we looked at in one of

the case studies is an example, it's actually a place that is not only important because of what it is but also because of where it is. So I think that the values-based approach, that was mentioned a number of times in the First Session, of understanding why the site is important and responding to those values, is a foundational platform for good decision-making across a number of the charters and principles that we've all come to use. The final comment I'd make is that I think in fact technology is fast catching up with us. And it's not only the LIDAR. There's the three-dimensional laser technologies. And I know that Duncan McCallum used the example of the Mithraeum in London in his presentation. I think the most engaging archaeological site that I have visited, was just a couple of years ago in the United Kingdom, in Bath at the Roman remains where it was possible to visit the original archaeological footings, and see them as footings, and then be able to have a technology turn on, and have the building reconstructed before you three-dimensionally, with people using the site, actors there as holograms, actually using the site. And there was a very emotive and visceral reaction to the fact that I'm in the real authentic place, and there isn't damage to the original remains, and yet here I can see a reconstruction in front of me. And it seems to me that that technology offers the best of both of those opportunities and worlds.

McCallum: Can I just come back? I've now remembered my point. Apologies, I forgot it earlier on. Mr. Masahiko's question, and it was about the reconstruction, and why in this country we're nervous about it. And I think for me on reflection, one of those points is that we are not as good in this country about the total integrated management approach because most sites tend to be not all of them but most of them managed by heritage professionals of some kind. And the key decisions tend to be made by heritage professionals, not by visitor people who do visitor management. And that separation, I think, is probably one of the main reasons why the approaches are different. And I think that that's changing, and there's a lot of crossover. I'm not trying to say that people who are academic will never allow reconstruction and equally visitor attraction people don't care about the heritage and the accuracy. But I think the centre point is shifting more towards recognizing that reconstruction does help, or some form of reconstruction does help people appreciate and enjoy things. So I think that's probably why we have

a long history of sites being run by government organizations like English Heritage or the National Trust which is a private charity that has quite a traditional approach. Whereas now perhaps, some of the smaller sites, and Bath's a good example of it, a different kind of site. I don't know who owns it, is it a charitable trust or the city council? I'm not sure. But maybe they have opportunities to try slightly more different approaches because I suspect they better integrate the visitor experience thinking along with the archaeological thinking.

Tomoda: Even in case of the Japanese “*seibi*”, the real scale representation of the building is only one choice among many possibilities. But, in my understanding, the final decision whether or not to go is done by the case-by-case basis. Of course, I understand that the real scale replica is a very powerful means of the transmitting, or conveying, the meaning or value of the site to the visitors. But at the same time, it has a very big risk to misleading the people. You already mentioned about how it cannot be 100% accurate, so that kind of a risk is always accompanying with this kind of large scale, I don't want to use the term “reconstruction, but replica making. So my position is just, I want to have a more concrete, or clearer, basis for such kind of a decision making, whether or not we should go. This is my basic.

Inaba: Sorry, Mr. Tomoda is an architect, and have experience to do this kind of-

Tomoda: Yes, yes.

Inaba: Management, or interpretation projects. So that means he is really concerned about this and how to do this. Okay, moving to Ichihara-san.

Ichihara: Thank you. Yes, and one more, as Tomoda-san said, I think the lastly decision maker will be the site manager in the local government, and there's many various ways to present these sites. But still concerning the *in situ* model and the 3D presentation, what is the point of presenting them on the site and *in situ*? Especially for the archaeological site which only have the underground component, that means the relationship between the attributes and the value, because I think that place and the location is also the attributes of the site. And the reason why I ask this question is that many work site managers think that building large information centre, or the guidance facility, near the site is sufficient for conveying the value, as well as the easy management of the site. So how

can I think this relationship between the attributes of the archaeological site which only have the underground component? That's my question.

Comer: I guess, if you'd like me to say something, I'll try to keep it brief. In archaeology, linguistics, and everything else in life, context is everything right? So this is why people have a concern about putting things back where they were because they were there on that landscape at that location for a reason in relationship to the environmental resources or the constraints imposed by the environment. And so if you move a site, you lose that. I think depending on the site that you're dealing with, the structure that you're dealing with, that can be more or less important, but in general it is very important. And of course, then you get into this issue of, well, you may put it back in the same location, but now the environment has changed. And that happens. But there are efforts in many places to restore the environment to its original condition. Just a quick example would be Civil War sites in the United States because where the fencerows were, and where the buildings were, and all these things played a huge role in what transpired during this conflict. So if you lose that, you don't really understand what happened. You don't understand the dynamics of that site. So sometimes you have to really also focus on thinking or doing research that deals with what the environment was like when the site was occupied. I mean, that's the idea. The idea of putting whatever the structure, reconstructing of subterranean site or whatever in the same place that's why. And that can be very important. It depends on the site, but in general it's important. So, that is important.

Ichihara: Okay, thanks. Thank you very much. To my understanding, to think about the change of the environment of the site is also important, an important thing to deliver to the public. Is that what the main point you want to say? Is it true? Is it correct?

Comer: Yes, indeed. And if you can replicate the environment, in some way it makes a much stronger interpretive experience.

Ichihara: Yeah, yeah. That's right. Thank you, that's important point, I think.

Mackay: Can I just contribute quickly there? To say, I think also the physical nature of the site, its iconic status and visitation demands can also affect these decisions. I mean, there are a number of iconic prehistoric sites

especially around the world, and I'm thinking places like Lascaux in France where it's actually necessary to do some form of replication, and visitor centre, and interpretation, separate from the remains themselves. The Grottoes at Dunhuang in Western China at Mogao would be another example of this. And even to some extent, Stonehenge is an example where the visitor has a better experience, and the site has less impact because a lot of the information is conveyed in a wonderful visitor's centre. And then there's a separate quick experience to have a look at the real thing. And so the impact of the visitation management and the threat of the visitors to physical conservation are also very relevant considerations.

McCallum: Can I just follow that up very quickly if I may? First of all on the Stonehenge work, because that's a really good one which I think actually, having the visitor centre some distance away from the stones. I think it has helped considerably in the managing of the visitor experience. Because before you parked right next to the site, you paid your money, and everybody piled into the site, and it wasn't a very pleasant experience. Now we've managed to, it's not me, the English Heritage and the National Trust have managed to spread out the visitors. And you appreciate the landscape much more than you ever did before because you are encouraged either to take a land train or to walk. And the first time I went there after the visitor centre opened, it completely transformed my experience of that site because I appreciated it wasn't just some stones, it was the whole landscape I was looking at. And I began to understand for the first time all the different complex elements of the site. Anyway, that wasn't the point I was going to make, but my main point was just to pick up Douglas's one which is about trying to recreate the environment. I agree with you in practice, although my worry is that the environment in which these constructions were taking place. If we think about timber huts, my guess is that the environment would've been changing all the time, and I guess they would've been chopping down the trees generally around the place they were living in and slowly clearing the land. And then there may be some kind of environmental disaster. So my worry is that so many sites, these days anyway, are affected by urban development, by noise, by whatever, that there's a danger sometimes in imagining that there was a fixed environmental surroundings in which these things took place. But I think all of that can be dealt with through

interpretation in all sorts of different ways not just with metal signs and things but through iPhones and other ways of doing it. But I suppose for me, it's that often the importance of a site is the fact that it does change over time rather than it's a fixed thing that we're trying to show people at one point in time. But there isn't a perfect approach, and in a way, whatever model you take, if you are consistent, if you explain what you are doing, and if you're honest about the bits that you're not showing or the bits that were there later that have been removed, and that information is there for people to look at if they want to, then I think that's another perfectly valid way of approaching a site.

Ichihara: Thank you very much, I understood very well. Thank you very much.

Inaba: Thank you very much. So in Japan, is the nationally recognized archaeological sites. They are available in fundings from the national government. And a certain amount of national fundings are there, and they are a local team of well-trained archaeologists. So that means if the site management is being developed so far, what is in *Goshono* and *Ichijodani* are best examples. Those are the results of then a long history of our approach to pre-historic archaeological sites, where only the fields are there and nothing on the surface. All our archaeological sites are sub-surface. So those are [the] total [of] the answer of all the kind of requirements of political of course, and the site management and others. So as Richard told before about that, was in the result of the total [of] the answer to all requirements what we have. So probably Japanese archaeologists would like to know this kind of approach is very rare in the world. At least it seems very unique, as mentioned, you cannot find such examples in England, if I understand. How about the other areas of the world? Do you know some examples, or Japanese approach is unique, or unusual? Japanese archaeologists would like to know such kind of things. What are we doing?

Comer: A quick comment, okay. Just a very quick comment. Back in the early 20th century, late 19th century, anastylosis was really the thing. And so they were doing "seibi". They didn't know it, they didn't call it that, but they just said, "We've got to interpret this thing, and here's some stuff, and we're going to put it together and everybody will come," and they did. They'd come to

Pergamon, they'd come to Aphrodisias. I mean, if you put the site back together, people are going to come and look at it. And so that was really the driver. I mean that was the driver. The idea is here we have this potential asset, economic asset, cultural asset, and we're going to do it. And the way we do it is we put it back together. I don't think that there was any manifesto that said that, it was just the way the politics and the economics worked out. So that was kind of "seibi" but I think you've managed to define how it should be done, or you're thinking better about how it should be done in a professional and ethical kind of a way. So it's a good thing that you're doing this.

Inaba: Okay, thank you. Mr. Richard, please.

Mackay: Yes, if I may. To answer the question about what's happening globally, yes there are still major sites where some kind of replication, reconstruction, anastylosis is happening. Probably the best known globally would be Angkor in Cambodia or Machu Picchu in Peru and those kind of nationally, internationally significant sites. But they are typically existing ruins which are being put back together by reassembling the missing pieces rather than brand new fabric creating a new structure. In terms of replication just for its own sake, I don't think that happens a lot with nationally or globally significant sites or at least not to my knowledge. But I think it happens quite a lot at a local regional level where there may be something that, for exactly the reason that Doug has outlined with respect to anastylosis early in the century, people feel there's a need to build an attraction so that people will come, as it were, because they're not going to come to a green field. And I think we saw a great example or a great pair of examples of that in the First Session in Duncan McCallum's presentation with the English abbeys and convents that are now sort of verdant lawns with just a sign or two as opposed to the Welsh Fort, Lunt Roman Fort that had been reconstructed to attract visitors. Well, there's quite a lot of that in Asia and in India, for example, where these things are done just as a piece of theatre for the purpose of explaining the site to visitors.

Inaba: Okay, thank you. Duncan, please.

McCallum: Thank you. Agreeing with Richard there, I don't think there are that many examples that I can think of internationally. And I think the point being made about probably the ones where it happens more is the kind of next level down from the nationally, internationally

known ones. But even in those sites, from my experience, it's rare that there's complete reconstruction. It's easier in a sense, if you have huts-type arrangements like a village or something like that where you reconstruct one or two examples. But to reconstruct a whole palace or a whole church or something like that that's been completely destroyed is much rarer. But I think, I suppose the thing that we haven't talked about so far is a kind of awe and amazement of going to an ancient Greek city. And even though only parts of it are reconstructed, it is absolutely amazing the sheer scale of what people managed to achieve in those days with very limited tools or whatever the era we're looking at whether it's stone age or earlier. But I think that's one of the reasons why we do reconstruction, don't we? Because ruins maybe interesting in terms of plan form, and if you've got the time to look at the diagrams and understand the history, it's very interesting. But nothing beats driving around the corner and suddenly you see a big temple or something like that. That just helps you immediately to understand the sheer scale of achievement from people who, often we tend to think of as not very well advanced, didn't have many tools, but somehow they managed to create something. That, in their own terms, was something that was revered and probably kept going for a long time after the original construction took place, because it was of such a scale and involved so much organization, so much power and so much determination to achieve something. And I suppose in a way, that [is] a bit like when I first went to Rome and parts of Italy where the original Roman amphitheatres and things are still being used. In England when we see a Roman site that's got two meters high, we'd go, "Gosh, this is amazing. There's two meters worth of stone we can see." And I went to Rome and suddenly I realized that those were tiny compared to the impact of something that's been in continuous use. So I think the visitor experience and not just visitors that are tourists but also for local communities as well, to understand some of the achievements of the things that happen in their area. And you can't get that from digital reconstruction. So I think some form of reconstruction does, it affects people's hearts, it affects their minds. And they enjoy it and they appreciate it. And that might make them want to protect more things as well, which is good surely.

Inaba: (Yeah. So) in Japan architectural history has been developed to do it in the real scale model, in

particular for the prehistoric sites. So that then also helped in the development of studies. Archaeological experimental things.

Comer: So just to see if I understand, what you're saying is that the production or construction of the model itself was part of research, archaeological research? Yeah. And that's very impressive to me. That's really, really interesting, which is something that I noted at the *Jomon* sites, where they would actually do a reconstruction and then they would burn it down, then they would really excavate it to see if it looked like the original site. That's pretty good experimental archaeology. Really. I think that it can be very instructive from a research stand-point, but also I think visitors are really interested in that process. They would find that fascinating. So it has a double appeal. One is archaeological research, and the other is people really find that intriguing. That's an intriguing thing to do and provides some convincing evidence for whatever you put up there as a model being accurate.

Inaba: Thank you very much. And this is just what's one of the advantages to do the real scale construction.

Tomoda: Yeah. Actually we always try to be more accurate. It's a model of an ancient building. But the experimental archaeology is a very big motivation to this kind of study. But if we should build it *in situ* or in a different place is a different issue. So we need to separate these two matters, I think.

Ichihara: Concerning the experimental archaeology in the *Goshono* sites, what is impressive was that management was done by the citizens, local citizens, so they can understand the environment and they can feel the work towards nature, what the *Jomon* people did for the nature, and what they created. And I think they can feel what the feelings of the *Jomon* people. So I think that was the additional point that Takada-san wanted to transfer by this presentation.

Tomoda: So it never be kind of a self-satisfaction of academic people.

Ichihara: Not only, yes.

Tomoda: But also for public.

Ichihara: Management, yes.

Tomoda: In general. Yeah. I agree.

McCallum: Can I just agree with? I think that's one of the shifts and I think Richard and Douglas and I all talked

in our presentations about maybe a slightly shifting position on this topic in our countries or the bits of the world that we understand. And I think that the community, the local community arguments are in this country, increasingly powerful ones about the need to engage local people in thinking about their local heritage. And, if you go back even a generation in this country, it was very centralized. Nationally important things were controlled by people who lived in London and they came out and they inspected the sites and told you what you couldn't do. And I think that's slowly shifting. And I think the feeling of kind of bottom up of community-led projects or community-involved projects. I think is much more appealing to a wider range of heritage professionals. And although they may need to certain that good archaeological standards are kept when the excavations are taking place, I think most of them would now feel that by involving local people and particularly young people, the children, in that learning just has so many benefits, actually way beyond heritage. At the moment in the UK, we're trying to demonstrate the well-being benefits of heritage that go way beyond just the protection of sites, that they benefit people for being engaged in those sites. So I think that's in a way, what you're describing is a much more rounded and more holistic approach to thinking about sites and heritage in a community's understanding. So I think it's a good direction to go. And I think the professional concerns that we've talked about quite a lot can be overcome, but it needs to be done sort of rationally. Management plans and the international standards that ICOMOS and UNESCO and that set, I think they help to give a framework within which that kind of approach can happen. So I think it's happening increasingly in the UK. But maybe we're a little bit behind Japan and other countries where that's kind of more, it's been part of the thinking for much longer, perhaps.

Tomoda: Duncan mentioned that international norms like ICOMOS and UNESCO. Frankly speaking, we are always seeking for the justification of our replica model making *in situ* in any international regulation or standards, but we have never find the very concrete justification among them. And for example, we have the 1990 ICOMOS charter for the protection and management of archaeological heritage. And in that charter, they mentioned the reconstruction, but the reconstruction should not be made directly on the remains. That is said. But, in

my understanding, this is just mentioning the case of some remaining structure, or like a base of the building is there. And you should not put the additional, new elements on top of this remaining archaeology. This is my understanding. And another, more recent charter, that is the ICOMOS charter on interpretation and presentation of the cultural heritage, approved in 2008 maybe. It mentioned about the visual reconstruction. But in my understanding that is not applicable to the case of Japanese "seibi" but rather the digital representation of a such kind of the reproduction is mentioned in that norm. This is my understanding. Is this understanding correct? If there is any international regulation or standard, which mentioned about the real scale model building *in situ*.

Comer: I'll just say. You don't mind? I probably should raise my hand. But it's interesting that in the 1990 document, you're talking about not putting these things, in the original location. Whereas in the US, if we're going to do this, we insist on putting them in the original location. And I think the concern in 1990 was that it would damage the archaeological record, what remained at the site. That's one thing, but doesn't necessarily exclude the idea that you don't put things back at the original site. So if that's... I'd have to go back and read the exact language again. But I think, yeah, as I recall, you're right. So I think they need to update that. I think they need to update that. The world has changed. So in a lot of different ways...

Tomoda: In my understanding that charter stresses the importance of protecting the existing archaeological remains. So that's why it prohibits the reconstruction directly on top of the archaeological remains. This is my understanding.

Comer: Yeah, but there are ways to do it. There are ways to do it, and you've done it in Japan and we've done it in the United States. I think I mentioned the US had a couple of examples.

Tomoda: In case of the model replication in archaeological sites in Japan, we always secure the protective layer on top of the archaeological remains themselves.

Comer: So I think that dispenses with that concern and that's really, that should be the concern. That's a really valid concern. But on the other hand, there are ways to protect what remains of the archaeological resources. So there's that there's to build a protective barrier. I may have mentioned with certain physical reconstructions or

replicas that were absolutely essential to interpretation at some national parks, they came up with a cantilever system. So, they put pilings in places that didn't contain archaeological resources and they just build the structure on top of those pilings. There are other ways to do it. There are ways to protect the site. And I, of course, my orientation is toward... I grew up with these national park service guidelines. So to me, it makes a lot more sense if you're going to this, to put it back where it was. Otherwise, it's something else. It's not the same thing. When you change the location, it's just not the same. It's not the same. So anyway, I think maybe we should take another look at the 1990 document.

Tomoda: So you mean that when this charter was allowed, this kind of choice to make a replica *in situ* was not expected?

Comer: No, I don't think so. I don't think so. No, I don't think so. No. That's not what we were talking about in the States.

Inaba: So basically international standard or ethics that is to be very much restrictive to the reconstruction. Oh Richard or Duncan, both are raising hands. Okay, first is Richard, please.

Mackay: Thank you. I would just like to comment in relation to that dialogue and exchange that I think, in many respects, the ICOMOS charter reflected its circumstances in the late 20th century, when there had been decades of archaeological excavations globally which had been required by new legislation, had been done as a cultural resource management activity, had dug up vast numbers of artifacts and disturbed many sites, all through a sort of destructive science-based, realizing research potential framework. And it was a reaction back to say, look, actually retaining and conserving the real thing is also very important where the site itself is important. And then to my observation, what we see during the 20th century is a growing recognition of the wider social values of archaeology. And that's reflected in part in people asking questions about, well, why did we dig up all this stuff in the 20th century? And who's analysed it? And what has been presented back to the community? And the whole question of ethics and why archaeology is done arises. But also you get a very interesting shift in the 1990s towards archaeology as an event where there are open days and volunteer participants and exhibitions, and people

pay to participate in the archaeological processes. And that is then reflected, I think, both locally and nationally in a recognition of the value of archaeological sites as places that people do want to go to be informed and entertained. And it is that process, I think, that leads to the dialogue we've just had to say, well, if we are going to create interpretive structures, why not put them on site, if that's consistent with the values of the site and can conserve the attributes that contribute to those values. So, I think we're seeing those two processes, the large-scale destruction and a pushback, followed by a recognition that there is a much wider societal value of archaeology and archaeological sites than just their research potential.

Inaba: Okay. Thank you.

McCallum: If I can come in there, I agree with both of what's just been said. I think the key points I'd make [are], first of all, in the UK, I think the shift from using the word preservation to shift towards managing change and recognizing there isn't a fixed point in time for any heritage site. I've made that point before. I think there is that changing perception, which I think is towards a more realistic approach to our environment, whether we think of it as historical or not. So I do think there's quite a lot of scope for looking at charters, not just the two that have been mentioned, and thinking about how, whether they're still fit for purpose. And Richard very clearly explains some of the changing context about the way sites were being excavated. One of the interesting things we have in the UK is a crisis for excavated artifacts. We moved towards the system, now it's nearly 30 years ago, where the developer paid for archaeology. It was a great shift. So it wasn't the public paying for archaeology, generally, it was the developer, in most cases. That's created a huge, huge number of artifacts, and the problem is where to put them or where to store them and how they're interpreted. So I think the amount of information we have that's still not properly understood, if we did no further excavation, is still a challenge for us. But I think, as you'll probably be aware, the UK has had a few run-ins with UNESCO in relation to World Heritage Sites and the way that the UK is perceived to manage those. And I think these are not the kind of sites that we've been talking about earlier on, earthworks, they're other sites, often ones in or close to urban areas or where urban development or infrastructure is being proposed. And I suppose I would say [this],

wouldn't I? But I think it would be good to have some conversations about the charters and whether they work well. I think they're fantastic places to start. They're always helpful to go back to challenge yourself about a particular site, because when you're thinking about one single site, there are all sorts of factors that are not heritage factors that are playing in what their local politicians might want, what money is available, other things that might be playing into a decision. So I think the charters are really helpful as a starting point. But I have to say personally speaking. This is not my official view I do find some parts of them a bit challenging now, and I think it would be good to have some conversations about that. And in a way, perhaps, partly the shift in thinking about heritage and the terms we use, and the approaches we use, as Richard says, is partly time-based. We think about things differently. But also, as thinking is not just a sort of Western-European-based kind of way of seeing the world, we have, and rightly so, a much broader perspective and we recognize lots of different ways that people see culture and how those vary. So I think it would be a good time to challenge some of these things. And it might be that we end up with fairly similar words, but I think some of them would be different. And I think maybe this seminar, I think, is quite an interesting one because it's challenged me in my thinking and the way I was trained and the charters I had to learn in order to write my exams. It's a different world now, and we think about things very differently. So I think I'm up for some change there, I think.

Inaba: Okay. Thank you very much. There are many charters. I understand each site's real decision is down to those in all processes. Not always just answering to the charters or not. That I understand. In Japan, those in the prehistoric sites management and interpretations came from the long experiences to answering to... The sites were purchased from local peoples, sometimes developers, and using public money, so that means some answer to the local people is necessary. So that means that some interpretation to visitors is inevitable. So just we couldn't leave the site as just an open field with nothing on top of it. So we have site museums, also public money is available to build site museums to exhibit the excavated archaeological items, and also the small models, the site models are there. So, adding to those kinds of site museums, and whereby it's in the open field, it's also we have

to deal with it for visitors, in particular, local people. So this is the answer from the long histories, and they saying that, Ichihara-san's office establishing all the guidelines and all available funding resources, and those things. Also in Japan, we're saying that there is a network of archaeologists to think about those things, from the archaeological experimental studies and also other all circumstances, and establishes the local communities composed of the representative of residents and also the professionals and the researchers and decides those things. So the results of all those processes, those sites in the *Goshono* and *Ichijodani*, you saw it. Then you show them in a very unusual reconstruction. So what kind of conditions... and maybe we continue the local politics organization, the government will continue such kind of site management, site interpretations, due to there are not enough space in Japan to build the full scale model to the other sites. So we have to deal with on that site because it's very tight, way too tight to buy the large scale site, to buy it, as in purchase it. So what kind of conditions? Maybe you are allowed in the natural environment to reconstruct. So for example, forest, with in those kind of ancient chestnut trees, or other trees. Or how about re-constructing old streams, water streams, those kinds of natural environment. Are those allowed? Maybe concern is architecture. What do you think? Are we used to those all kinds of the examples of reconstruction? How much [do] you allow to do those things? Your concern is about architecture or it's the forest or streams and natural environment or all of them?

Tomoda: You mean in case of Japanese site, the archaeological real scale representation is not limited to the building structure, but such kind of a natural element, for example, the artificial mound, like ancient tumuli, is also reconstructed by covering, by protecting the real archaeological remains. So, this kind of work can be allowed in your country or not?

Inaba: You mean, protective shelters.

Tomoda: Yes.

Inaba: And the reconstruction of the surface?

Tomoda: Yeah.

Inaba: That's ... Yes.

Comer: Do you mean reconstruction of the environment, or replication.

Inaba: Environment, yes.

Comer: Yeah. It is done. And it's the same situation as justifying restoration, if you want to call it that, or reconstruction, which is, you have to establish that you've got a really good database, that you've got reasons. So, for historic sites in particular, this is an issue, really a big issue. So, there is a lot of research that's done on the landscape that surrounded historic sites, and trying to put the trees back because they were an important factor in whatever transpired at the sites. If it was a plantation, the partition of the site from slave owners and slaves. If it were a battlefield, tree lines, as I mentioned before, and fence lines. These are really important elements. Even restoration of streams, that sort of thing, if that's part of the story, it's a cultural landscape. We've moved really firmly into this world of cultural landscapes, not just individual buildings. So, there's a good bit of that in the United States at US national parks. Yeah. And I think it takes time. In certain cases, like with the Civil War battlefields, they've been at this now for 40 years, and it probably will just keep going, because it takes time to put the cornfield back where it was and to figure out exactly what kind of trees were there and plants, and they have to grow. But there's a lot of interest in that, at least in the US.

Inaba: Thank you very much. So, some kind of natural environmental or cultural landscape reconstruction is being done in the United States. How about England? Yes, Duncan.

McCallum: The United States has got a lot more space than England, so it's maybe a bit more. So, it's a little bit easier. But I think, I suppose I'd make two points, really. One is, I think you're right that we are moving towards trying to better understand the environmental circumstances around a site. And for at least a generation we've been trying really hard, and I'm sure much longer to integrate the natural environment and the historic environment and create that better understanding, because there's still, in this country a separation between the two. And there's a danger in thinking of them as two separate things where clearly, particularly if you're back into pre-historic times, they're one and the same thing almost, aren't they? I think the other point, and there's an interesting situation in the Lake District National Park, a recent World Heritage Site, where there's a really hot debate going on around re-wilding, and there's almost nothing in

England that's wild at all, really. In our own minds it is, but when we go to other places like Australia and America, we realize even our wildest places are not very wild at all. There's always a pub within five miles. So, I think that kind of challenge of thinking about the landscape as a whole and how the physical remains, the huts, the structures, whatever they might be, are there because of the bigger landscape and the way the watercourses run or the way the trees were or whether it was grazing land, whatever it might be. So I think we are moving slowly in that direction but still, because the professions have developed in different ways and the ecologists perhaps traditionally haven't thought about heritage and vice versa, I think we're missing a big area that we should be exploring. And actually, ironically, I think the climate change discussions that have been going on recently, I think that's actually helped to speed up about thinking. So as heritage people are forced to think about how they manage sites and buildings whatever in relation to the way the climate is changing and the way the environment is changing. I think maybe that will make it easier for us to be more integrated in future when we think about sites and how we manage them.

Inaba: So, Richard?

Mackay: Thank you. Well, just in terms of landscape in this part of the world, Australia and the Pacific, for many traditional custodians it is all a cultural landscape, and it is always being modified, and people are responsible for caring for country. So, there are a number of very large areas inscribed as World Heritage properties that are inscribed for both natural and cultural values. And for somewhere like "Uluru-Kata Tjuta", many people around the world look at the Giant Red Rock and see an extraordinary natural monolith, whereas the traditional custodians see the embodied spirit of their ancestors. And that landscape must be actively managed by them to continue those traditions and to nourish the country itself. We also see that even with indigenous sites at somewhere like "Budj Bim". "Budj Bim" was inscribed on the World Heritage List in 2019, and is in South-eastern Australia, and it is a site of aquaculture and huts. So, 6,000 years ago Australian Aboriginal people were building stone huts, and were moving rivers and streams around to harvest eels, and that landscape is being proactively reconstructed. So, areas that were flooded before European

arrival in Australia are being re-flooded. And areas that have collapsed, are having the stonework rebuilt. So, this would be a very good example of contemporary reconstruction of a cultural landscape by its traditional owners. And we see it also in the Pacific, in places like “Chief Roi Mata’s Domain” in Vanuatu or in “East Rennell” in the Solomon Islands. There is not this sort of division between the ancient archaeological past and the contemporary present, it’s all part of a continuum. So, in many respects, the word “*seibi*” and the concept of *seibi* is ideal for that purpose because it embodies all of the sort of maintenance and cultural activities that are required for looking after the place.

Inaba: Thank you very much. One question constantly being asked by my colleagues, to Richard the question is, such reconstructed Aborigines cultural landscapes, are those property or just interpretation?

Mackay: Well, I think that the answer to that is that the culture has never left. There is not a moment which is prehistory and a moment which is history. It is a continuing culture. The people and the cultural traditions and the landscape were changing for tens of thousands of years. They’ve just changed in a more active different ways since the arrival of Europeans, but it’s not that there is... It’s just the same as the historic sites that others were speaking about earlier in this discussion. There’s not someone magic moment or period. And a really good example of that is the use of fire as a tool for landscape management, which has actually modified ecologies to suit cultural purposes over thousands of years. And only now, in the context of climate change, are some contemporary scientists and land managers realizing how important that use of fire is to maintain those landscapes in their traditional form and to keep them resilient from the climate change.

Inaba: Thank you. Yes. Probably, Ichihara-san wanted to ask, with those kind of reconstructed landscape itself, can we ask for the authenticity or not, and in the future to be protected or not? That it will be?

Ichihara: Yes, yes. That’s an interesting question, because as we have seen that there’s some sort of reconstructed models and reconstructed buildings in Japan, and I think they were built 30 years ago, and they have been kept for these years. But they are a little bit expensive, and it’s beginning to be a little bit hard to maintain

that style as it is. So, I’m wondering always that if it is a part of heritage, if I can treat them as heritage, I think I can put our government money to keep that kind of structures. But if it’s just a model, I think it is a little bit difficult to put too large amount of money to that kind of structure. So, I always think about that kind of question, and what is the sustainable way to keep it, as well as for the site and as well as for the sustainable development of the world cultural heritage as the monument for the sustainable development. If it is, I think there must be some way to understand these kind of interpretation models. Does anyone have some kind of hint or clue to think about these models?

Comer: So, I’ll mention this, which is that, if you’ve heard of “Chaco Culture”, it’s a World Heritage Site and it’s really spectacular architecture, maybe the most spectacular Native-American architecture in the Continental United States. But there’s a Chaco culture area that covers most of New Mexico and goes into Southern Utah. And there’s a huge controversy that started under the Trump Administration because the Trump Administration started selling leases to frack and extract gas all over this. And it’s not just Chaco. You have the Chaco road systems, and they connect with these great houses, and it’s just this beautiful intact cultural landscape. And of course, environmentalists were very upset about all this. But the other demographic that was very upset were the Pueblo Indians because they considered Chaco to be their homeland. So, bringing their voice into the conversation and getting their perspective saying, “this is our sacred...”, “you can’t do this because you’re destroying our ancestral landscape that’s sacred to us”, “you’re making it into an ugly smelly place”. And that really did have a huge political impact. So, you can find, I think, political allies that will use or understand this concept of a cultural landscape and its importance to indigenous groups. And the public gets very sympathetic to that. So, that’s another aspect of preserving the traditional cultural landscapes because it has environmental implications. It’s a way of opposing these kinds of developments that are very destructive to the environment because they’re also very destructive to the indigenous heritage of the area.

Inaba: Okay.

McCallum: And to just follow on that point, I think, moving beyond individual sites, one of the things that’s

been interesting is, as we have greater flooding in low lying areas in the UK and then looking at traditional water management systems and often trying to move away from hard engineering solutions to perhaps more flexible ones, quite a powerful argument. And the Environment Agency which is the government body that manages water generally, I think they're increasingly aware of that. And I think one of the reasons why it works and it's becoming more successful is that it brings natural environments. So, bird life increases, natural biodiversity increases as well as if it's well designed, the historic environment would be put back in water courses to put back in traditional sluices and systems of management. But I think that it is a challenge and that that part of our historic environment isn't as well understood as structures and earthworks and those more built parts of the historic environment. But I think there's certainly a willingness there, and I think that's an exciting area where there are good arguments to be made, financial arguments quite apart from the cultural ones for wise use of very scarce land. So, I think that is an area that's going to grow in importance. At the moment, the heritage people are trying to persuade the people who manage water and land that this will bring them benefits, will save them money, but hopefully over time it will be seen as a completely integrated approach to the way you think about your landscape and manage it for the long term. So, concrete isn't always going to be the answer. Of course, in some cases it will be, and of course you get the dilemma where, the Venice-type dilemma, where some of your greatest outreach assets can only really be protected in some circumstances by lots of engineering. But I think in most cases there is a middle ground that could be found, and I think trying to find how you can do that and find the engineers and the heritage experts who can think about how you recreate these landscapes, recognizing that some of the environment has changed forever and we can't put it back. So, an area of growth, but one that isn't really very well understood at the moment.

Inaba: Thank you. It's okay, Ichihara-san?

Ichihara: Yes, I'm okay. I think 30 is a little bit short to work as the element for the landscape, but if we continue in this way, I think some people think it's a useful element for their culture or their environment. So, I think,

in some way, I think treat them as some kind of heritage in the future time. Thank you very much.

3. Equivalent English term of *seibi*

Inaba: Okay. Thank you very much. So, the remaining time is limited. So, before going to our question about an equivalent English term for "*seibi*". However, before that ... Tomoda-san is laughing. Okay. Anyway. We understand the word "*seibi*" our approach we call "*seibi*," is a total holistic approach to how to manage [an] archaeological site, which means very much useful word, I understand. And it's internationally could be understood in that way. Is it okay, I think? So, "*seibi*" is a kind of holistic approach to the archaeological site management. But you don't have the equivalent wording for that.

Comer: You could call it "integrated heritage management".

Inaba: Integrated heritage management?

Comer: Just made that up. But that's what it is, right? That's what you're talking about.

Tomoda: During the previous discussion, Duncan already pointed out that you tend to separate the conservation and the interpretation.

Comer: Yeah.

Tomoda: But "*seibi*" can cover both aspects.

Comer: Think it does. And just one more quick comment. What we've been talking about here really suggests to me some other drivers that will change people's perception of how it is important to interpret some of these sites that have been not interpreted well in the past, and that's the diversifying heritage. You go back to that because the heritage that we have been concerned with is made out of durable materials, and so that's basically modern, Western, whatever you want to call it. And if you really want to understand how different human groups interacted with each other and affected the environment and how we get to where we are, you really have to tell the story, and to tell the story, you're not just going to be able to tell that story through academic papers, you are going to have to present it to the public. So, I think this is going to be a really strong force in the United States, this idea of diversifying heritage and especially indigenous heritage, the kind of heritage that we were just

talking about with Chaco. This is something where we really need to develop alliances with these indigenous heritage groups for all of our common benefit. There are huge environmental applications. So, I think those things are going to be real drivers in reconsidering what we've kept, perhaps, artificially separate as treatment and interpretation.

Inaba: Thank you very much. Richard was raising his hand.

Mackay: Well, thank you. I think there is no question there is not a single English term that encompasses all that "*seibi*" clearly means, but my understanding through participation in this process is that it is all the processes of looking after a place. And I think that Doug's use of the word "integrated" is absolutely right. If I may just indulge for a moment, I'm reminded of the work I did at Angkor in Cambodia in the early 2000s, and had some quite animated discussions with colleagues about whether the physical conservation needs should frame up what the interpretation opportunities would be, or whether it was necessary to define the interpretation and visitor opportunities and the stories and experiences, and then have that fit the program of physical works. And of course the answer is that you need to look at both together, and they need to be integrated. It needs to be founded on an understanding of what it is that's important about the place that you are trying to care for, to preserve, but also an understanding of the management reality, the resources that you have and the physical threats, and an understanding of how the place will be used for those who live there or work there or visit there as tourists. So, it's not a question, in my mind, of one dictating over the other. You start with an understanding of the values and issues, and then you make decisions that retain the values and manage the issues. It's absolutely a question of integrated management.

Inaba: Thank you very much. So, Duncan?

McCallum: I was just going to agree, really. I have not got much more wisdom to add to the other two. I think "integrated heritage management" or "total integrated heritage management", something like that, works well. I think perhaps "integrated heritage management" is good enough. The "total" is an optional "total", given that I don't think you ever quite integrate absolutely everything into a decision. But I think it does, in overall

terms, convey that broader sense of the "*seibi*" approach, which I think is lacking in the Western or traditional approach, whatever you want to call it. So, yes, I think that works. As a term, that works for me.

Inaba: Thank you very much. That encouraged Japanese archaeologist. Thank you very much. Are there any questions or comments from Japanese participants? Tomoda-san worked for Angkor before.

Tomoda: Yeah, still working-

Inaba: Do you remember such conversations?

Tomoda: Yes. Actually, the restoration has been done in Angkor, just responding to the condition of the structure when it was broken or perhaps they're forced to make a restoration. But in my site, when we made the master plan, we make the restoration, we positioned the restoration as a part of the, how to say, the total management of the site. So, in that case we restored the front gate of the temple because we wanted to make the people, make the visitor to understand that it's the front face of the temple and that was the original access to the temple. That was the reason why we selected that building to be destroyed. So, this, how to say, the value-based or purpose-based restoration was not introduced before in Angkor, so that is my point what I insisted.

Inaba: Thank you very much. And there was a purpose of this session too. We Japanese wanted to locate our approach, "*seibi*" approach, to the international context. And we wanted to hear in your opinions about all those things. And we got a lot of information, lot of good comments, and was very interesting and also very much useful points to improve our understandings. Thank you very much. And at this end, do you have some messages to our archaeologists who are dealing with this *seibi* management on site?

Comer: To keep up the good work.

Inaba: Thank you.

McCallum: My comment would be, I'm sure they already do it, but involve local people. I think to me, that's one of the things that's been really positive change in many sites in the UK. The more you involve local people, the more they care about the site, and they want to look after it as well as the paid staff who do so.

Inaba: Thank you.

Mackay: And I think I would agree with that and extend it by saying, please remember that your archaeological sites also have non-archaeological values, and they need to be cared for as well.

Inaba: Thank you very much. So, I would like to close this session, and return my position to Mr. Nishi.

Conclusion

Nishi: So, thank you very much. Well, actually, we got a very fruitful discussion. Actually, I have to say, more than expected. Also, a very good discussion, because several things came up to my mind for further discussion, for instance, the connection to the largest scale of landscape or largest timescale, etc., or, maybe I couldn't have any comment on the discussion, but maybe we can have a further discussion about the digital things, the digital UX or user experience or whatever. Because, at this moment I have to say, such digital reconstruction, digital 3D things, is exciting because it's digital, it's new. But maybe in five years it's realistic things, because I feel such a kind of future is coming quicker than expected, because this online session is a case. So, maybe in five years or 10 years, obviously we have to keep discussing about things, and maybe the condition is quite different at that time. But anyway, this kind of further discussions we can find and that's a very good thing for today's discussion. And thank you very much for all of you, and especially some of you are in the midnight or early in the morning. So, thank you very much. And I think the next step will be we have to have a collect interpretation for Japanese audience. Anyway, thank you very much for today.

まとめに代えて

西 和彦（東京文化財研究所 国際情報研究室長）

最後に、この研究協議会の成果をどのように受け止め、今後の世界遺産等の管理にどのように結びつけてゆくべきかについて、あらためて考えてみたい。

セッション1で取り上げた4つの事例のうち国内の2事例は、我が国で行われてきた史跡整備の中でも、包括的かつ先駆的なものということができる。実際、討論の題材という側面から考えると、この2つの事例が（傑出しているという点において）適切なのか、準備段階でかなりの議論があった。

一方、海外の事例については、ダンカン・マッカラン氏（英、Strategy and Listing Director, Historic England）のプレゼンテーションでは、英国での遺跡の保全、「整備」について現在の基本的な考え方が説明され、その得失について考察が加えられている。また、ダグラス・コマー氏（米、Principal, Cultural Site Research and Management）は、真正性の概念やイコモスでの議論の経緯を紐解き、これらを基にして我が国の整備をどのように考えるかについて意見が述べられている。

これらのプレゼンテーションのうち、日本語で行われた国内事例については、英訳を行った上で討論の参加者に事前に提供した。その上で、複数回にわたってオンラインで議論の機会を持ち、その最後の回を公開を意図して動画収録した。この報告書に「討論」として収録したのがこの最後の回に当たる。

討論には、海外からはセッション1で事例報告を依頼した4人の専門家のうち、ダグラス・コマー、ダンカン・マッカランの両氏にリチャード・マッケイ（豪、Director of Possibilities, Mackay Strategic Pty. Ltd.）を加えた3名に参加頂いた。また国内からは、稲葉信子氏（筑波大学名誉教授）にファシリテーターをお願いし、さらに文化庁から市原富士夫氏（文化資源活用課整備部門（記念物）文化財調査官）に参加頂いた。東京文化財研究所からは友田正彦（文化遺産国際協力センター長）、国際情報研究室からは西、松浦が参加している。

討論の詳細については本報告書をご覧頂くとして、やや私見を交えることを恐れずに議論のポイントを抽出すると、概ね次のようなものと考えている。

- 遺跡の「説明」は幅広い理解を得るために不可欠であり、高い公益性を有することについては国際的にコンセンサスがある。その手法の一つとしての遺跡の原位置における実物大の復元は、より良い遺跡の「説明」の手段としてなお有力
- 一方で、さまざまなデジタル技術の進展により、多様な手法が実現可能になってきていることも事実であり、原位置における実物大の復元に対する正当化、あるいは反対のいずれの論拠も、国際的には依然として十分整理された状況ではない
- プロセスとしての遺跡管理、プロセスとしての「整備」の重要性
- 市民参加の度合いが増すほど、「整備」あるいは遺跡の管理の望ましいあり方が変容する
- 保全と展示の両面を包含する、包括的な遺跡の管理としての「整備」

この研究協議会の開催に当たっては、結論を導き出すことよりも、むしろ「議論のためのポイント」をより深化させることを意図している。セッション1動画の冒頭で述べたように¹、我が国の「整備」を「うまく説明して逃げ切ること」はその意図するところではなく、そうした方向性は（短期的にはやむを得ない場合もあるにしても）長期的には我が国の文化遺産の保全策に対する誤解を助長することになる。そうではなく、むしろ「理解を得ることが難しいとするならば、そのギャップはどこにあるかを考えて、世界遺産の現場でよりよい理解を得る」ことを意図し、それがひいては整備そのもの、あるいは遺産保護のあり方について考える機会となるということが我々の意図であった。そして、討論の最後に、「整備」を英語に訳す場合にどのように考えるべきかという問いかけを行っている。

¹ 本報告書に「はじめに」として掲載。

この問いは、直接的には、これまで我が国が作成した世界遺産推薦書の中で、「整備」をどのように訳すかと言う議論が繰り返されてきたことによる²。今回の議論では、(直接的な訳語の選択ではないが)その意味するところについて、「整備」は「包括的な(統合的な)遺跡の管理」と言うべきという方向性が得られた。これ自体は特に目新しいものではなく、例えば「史跡等整備の在り方に関する調査研究会」による「史跡等の保存・整備・活用事業の在り方について(報告)」(平成13年4月19日)では、4つの視点の一つとして「総合的で多面的な個別事業の展開の必要性」を挙げている。しかし、今回の議論のまとめとしては、我が国で関係者が目指している整備の在り方について、海外からの目線においても一定の理解が得られたと考えて良い。そしてそのことは、世界遺産等において特に議論を惹起しやすい復元の議論につながる。なぜならば、「整備」を包括的なものととらえ、その包括性を重視するのであれば、自ずと遺跡への理解を得るための行為、あるいは活用の側面と、遺跡の保存管理の側面が重なり合うはずだからである。

前述の調査研究会報告の「視点」には、「周辺環境を視野に入れた事業展開の必要性」も謳われている。この報告を受けて取りまとめられた『史跡整備のてびき³』を見る限り、この「周辺環境」は必ずしも価値の一部としての周辺環境を意図したものだけではないが、今回事例として取り上げた御所野遺跡と一乗谷朝倉氏遺跡は、周辺環境のみならず、その四季の移ろい、さらには長い時間軸の中での推移も視野に入れた整備が行われており、より幅広い視点での包括性を実現している。そして、そうした視点を重視するのならば、復元整備は遺構の直上で行うのが良いことが明らかであって、遺構と切り離して行われる復元は、もちろん遺構の保護などさまざまな観点から必ずしも否定されるべきではないにしても、十全足りえないと言う議論もまた成り立つはずである。

対外的な説明という観点から付言するならば、いかにもありきたりなことであるが、コミュニケーションの重要性についても再確認したい。今回のプレゼンテーションあるいは討論への参加に際しては、複数回オンラインで説明の機会を設け、研究協議会の意図、我が国における「整備」の現状、その経緯等について一定の共通理解を得る努力をした上で議論を行っている。世界遺産の推薦あるいは保全状況に関わる議論の中でも、

言語の問題、あるいは時間的制約などからこうした前提条件の共有が難しい場面は少なくない。また、内容に対する問いかけに対してプロセスの正当性を訴え、プロセスに対する質問に対して内容の妥当性をもって正当化を図るなど、彼我的議論がかみ合わないケースもよく見られる。こうしたすれ違いを避けるためには、やはり一定の時間は必要であるし、その手間を回避しない姿勢が重要であろう。

文化遺産をめぐる状況は常に大きく変動している。そもそも遺産の価値のどのような側面に重きを置くべきなのか、それを誰が決めるべきなのかといった根源的な問いかけは続いているし、一方で活用と保存のバランスなど、日々解決してゆく必要のある課題も多い。活用の一層の重視、「復元的整備」という概念の導入など、施策面の修正が各地の遺産保護にどのように影響してゆくのかについても、今後その結果が目に見えてくることになろう。

昨年、今年と新型コロナウイルス感染症の蔓延というきわめて特異な状況下で行ってきた「整備」をどう(対外的に)説明するかという課題に関する議論としては、この研究協議会ではその一端に触れたに過ぎない。昨年度の報告書の中で提示された観点の中でも、今年度の議論で取り上げることのできなかった部分は残っている。その意味では、例えば今年度の遺跡学会大会での議論、あるいは昨年度の報告書に寄稿頂いた、海野先生を中心とする復元に関する一連の研究など、関連するさまざまな議論と併せて参照していただければ幸いである。

なお、この総括に続き、「環境・文脈・景観」などの概念規定に関する松浦アソシエイトフェローによる報告を掲載した。ここでは、論旨との関係から、特に訳語の選択については世界遺産に関する議論で一般的に用いられているものとは異なるものもあるが、これに留意しつつ、各種の憲章や世界遺産委員会の作業文書などを読み解く際の参考としていただければ幸いである。さらに、今回の議論に関連する憲章等の中で最も中核をなすと思われる「文化遺産の解説及び展示に関するイコモス憲章」についても、和訳及び英文を掲載している。

² 詳しくは、『整備という言葉について、そして文化遺産保存のありようの現在について』「令和2年度世界遺産研究協議会報告書」(東

京文化財研究所)を参照されたい。

³ 文化庁文化財部記念物課監修、同成社、2005年6月30日

考古遺跡保護の国際思潮

— 環境・文脈・景観についての概念から —

松浦 一之介 (東京文化財研究所 アソシエイトフェロー)

はじめに

今回の世界遺産研究協議会では、報告や討論の中で「setting (環境)」、「context (文脈)」、「landscape (景観)」という用語が聞かれた。これらとの関係で遺跡を保護する重要性は、文化遺産に関連する国際条約や憲章、さらにユネスコの世界遺産条約履行のための作業指針等でも繰り返し強調されている。しかしながら、これらの用語には学問分野ごとに多くの解釈が存在し、共通する明確な定義を見出せない。語義自体や用語相互の関係についてのこのような不明確さは、その保護に向けてどのような手段や制度が必要なのかを考える上での困難につながる。

そこで本稿では、上記の三つの用語に関連する概念や背景を学際的に観察することをつうじて、遺跡保護に関する実務の前提となる国際的思潮の現況を概観したい。具体的には、1. イコモスと欧州評議会の憲章・宣言あるいは条約にみられる「環境」及び「文脈」の語について主に考古学分野における学術上の解釈を概説し、2. 地理学や環境心理学の分野における「場」及び「領域」の概念の検討から「文脈」と「景観」の関係を仮説的に検証し、3. これらの概念を構成する各要素相互間の関係性に内在する「意義」について述べ、それを保護する上で望まれる取り組みの方向性について簡単な指摘を行う。また、これらの検討をふまえ、最後に本論を総括する。

本稿は、筆者の博士課程における研究¹の一部に依拠しているため、主にイタリアの研究者の論述を参照し

ている。同国は、その領域内に存在する記念碑的な考古遺構がヨーロッパ諸国の中でも質量ともに顕著なことに加え、200年にわたる体系的な遺跡保存²と100年にわたる景観と遺跡の一体的な保護の歴史を有する。このことから、イタリアにおける遺跡保護の理念は、国際憲章や条約などにも少なからず影響を及ぼしてきており⁴、その世界的な動向を辿る上でも有効と考えられる。

1. 国際憲章等における「環境」と「文脈」

setting 及び context という用語は、これまでに七つのイコモス憲章や欧州条約で言及されていることを確認できる(表9-1)。それぞれの用語が1964年のヴェネツィア憲章と1992年のヴァッレッタ条約を嚆矢として登場して以降、概念が進化してきた様子が条文からも窺える。

setting は、世界遺産用語としては現在、資産の「周辺環境」⁵と邦訳されているが、ヴェネツィア憲章の採択当時には記念物の「背景」を意味していたと指摘されている⁶。直接的保護対象の近隣への配慮という考え方自体は、同憲章に先立つ1931年のアテネ憲章ですでに導入されており、歴史的記念物の「美的価値の向上」⁷を目的とした間接的保護の規定といえる。さらにこの審美的な保護という考え方は、地上に露出する可視的な考古遺構に限って言えば、17世紀から19世紀にかけて空想もまじえて描かれた「廃墟のある風景」⁸、つまり

¹ MAITSUURA Kazunosuke (2018) *Tutela attiva del contest archeologico in relazione la paesaggio – Sistema a rete dei parchi archeologici*. Università degli Studi di Roma “La Sapienza”, Tesi di dottorato.

² 教皇領の1820年4月7日パッカ枢機卿令や両シチリア王国の1822年5月13日フェルディナンド2世勅令など。

³ 1922年6月11日法律第778号「自然美及び顕著な歴史的価値を有する不動産の保護」。

⁴ 例えば、国際博物館会議(ICOM)が1931年に採択したアテネ憲章は、1883年にローマで開催されたイタリア人による「第4回技術者・建

築家会議」が採択した修復の原則や方法論から大きく影響を受けている。

⁵ 東京文化財研究所編『世界遺産用語集(改訂版)』2017など。

⁶ SPOSITO, Alberto (2007) *Il paesaggio come prospettiva della musealizzazione archeologica europea*, p. 13. In: RUGGERI TRICOLI, Maria Clara (a cura di). *Musei sulle rovine. Architetture nel contesto archeologico*. Milano: Edizioni Lybra Immagine, pp. 11-16.

⁷ アテネ憲章第3章「Aesthetic enhancement of ancient monuments」。

⁸ BUSCAROLI, Piero (1989) *Paesaggio con rovine*. Milano: Camunia.

表 9-1 国際憲章等で言及される setting 及び context

憲章/条約等	対象	条項	条文/内容 (奈良文書のみ内容の解釈、その他は条文の訳)
ヴェネツィア憲章 1964 ICOMOS	記念物遺跡 の保存修復	1	歴史的記念物の概念は、単体の建築作品のみならず特定の文明、重要な発展、歴史的事件の証左がある 都市又は田園環境 (urban or rural setting) も含む。
		6	記念物の保存は、適切な 環境 (setting) の保護を含む。 伝統的環境 (traditional setting) が残る場合、これを維持する。
		7	記念物は、これが証する歴史及び所在する 環境 (setting) と不可分である。
ヴァレッタ条約 1992 EC	考古遺産 の保存保護	1	考古遺産は、地上又は水中の遺構、建造物(群)、周知の遺跡、遺物、その他記念物及び 文脈 (context) を含む。
		5.iii	環境影響評価及びその後の決定は、考古遺跡及びその 環境 (settings) を十分に考慮すべきである。 (※ 仏語正本では settings → <i>contexte</i>)
奈良文書 1994 ICOMOS	真正性	13	真正性の評価が依拠する基盤の一つとしての 文化的文脈 (cultural context) 、真正性を評価する情報源の一つとして立地 (location) 及び 環境 (setting) へ言及。
エナメ憲章 2004 ICOMOS	文化遺産 サイトの 解説	3	文化遺産サイトの解釈は、社会的、文化的、歴史的、自然的な 文脈 (contexts) 及び 環境 (settings) と広く関連付ける必要がある。
		3.2	特定の時期やテーマに焦点を当てても、遺跡の通史的解釈及び遺跡の 現代的文脈 (contemporary context) や意義を考慮すべきである。
		3.4	周辺景観 (surrounding landscape)、自然環境 (natural environment)、 文化的・地理的環境 (cultural and geographical setting) は、すべて遺跡の意義を補完する要素である。
西安宣言 2005 ICOMOS	遺産建造物 遺跡 場の 環境の保存	1	遺産としての建造物、遺跡、場の 環境 (setting) は、その価値及び特性の一部であり、これに寄与する近接又は広域の 環境 (environment) と定義される。
		2	(遺産の) 意義及び特性は、物理的、視覚的、精神的その他文化的な 文脈 (context) 及び 環境 (setting) との関係に由来する。
		3	環境 (setting) の定義は、遺産資源の周辺 (surrounds) の歴史、発展、特性の理解を必要とする。
		4	歴史、地理、自然環境 (environment) の価値、利用その他要素と同様、文化的伝統、儀式、精神文化及び概念は、 環境 (setting) の物質的・非物質的価値及び次元の全体を作るのに寄与する。
ケベック憲章 2008 ICOMOS	文化遺産 サイトの 解説展示	3	エナメ憲章に同じ
		3.2	
		3.4	
バーラ憲章 2013 改訂版 豪 ICOMOS	文化的意義 を有する場	1.12	setting とは、場 (place) に隣接して広がる 環境 (environment) であり、その文化的意義及び特質の一部又はこれに貢献するものを指す。
		1.12 注	環境 (setting) は、建造物、空間、陸域、水域、空域を含み得る。 視覚による環境 (visual setting) は、場から/への眺望及び文化の道沿線の眺望を含む。 その他の知覚による環境の要素 (other sensory aspects of the setting) には、香臭や音響がある。また 環境 (setting) は、有形無形の習慣・活動、社会的・宗教的慣習、他の場所との関わりなど歴史的・現代的な関係を含み得る。
		8	保存は適切な 環境 (setting) の維持を要し、 視覚その他知覚による環境 (visual and sensorial setting) さらに場の文化的意義に寄与する精神的その他文化的関係の維持を含む。

絵画表現に一つの起源がある⁹。また、イタリアにおいて「自然美」と呼ばれた景観に関する法律¹¹がロマン主

義や自然主義を背景として成立したように¹²、当時の景観の概念は、絵画的な眺望美によって定義されたとい

⁹ MANACORDA, Daniele (2007) *Il sito archeologico: fra ricerca e valorizzazione*. Roma: Carocci editore, p. 92.

¹¹ 1922年6月11日法律第778号「自然美及び顕著な歴史的価値を

有する不動産の保護」及び1939年6月29日法律第1497号「自然美の保護」。

¹² LAZZARI, Marino (1940) Il «nostro» paesaggio, p. 505. In: CAZZATO,

う側面をもつ。すなわち、景観との関係の中で遺跡を保護するというこの時代の(ヨーロッパにおける)発想は、記念碑的な遺構とその背景とをあたかも一枚の絵として保存することに主眼を置いていたといえる。

一方、ラテン語の *contextus* (緊密な関係) に由来する *context* という語は、その一般的語義¹³から派生して、特に景観を取り扱う建築学や考古学などで近年使われるようになった。このうち「景観的文脈 (*contexto paesaggistico*)」という成句は、「場 (*luoghi*=places) のありさま」と解釈されており、さらに「地理(学的)文脈」や「地勢(学的)文脈」など学術分野の名を冠して細分されている¹⁴。

考古学用語としての *context* とは、少なくとも西洋においては基本的に「遺物の出土状況又はその周辺の状態」あるいは「同一の層序から出土する一括遺物」を意味する¹⁵。この(狭義の)「考古文脈(*archaeological context*)」を、対象空間の多様な社会的・文化的様相を解釈する基礎という意味で、一定の空間における景観の変遷の再構築に応用したのが、景観考古学である¹⁶。考古学は、三次元の堆積に時間軸を加えた四次元を扱うことから¹⁷、その文脈には(ある特定の時期・時代を切り取った)「同時的文脈(*synchronic context*)」と(ある特定の空間を時間の経過の中でみた)「通時的文脈(*diachronic context*)」の二者がある。このような理論をふまえ、景観考古学が扱う *context* は、「歴史的経験の中で多様に変化し、組み合わせさせた物質資料、構造物、場所」からなる「総体的な組織 (*tessuto complessivo*)」と定義される¹⁸。この(広義の)考古文脈とは、ある領域に所在する個々

の遺跡の立地や自然環境との関係、さらにはそれら相互の有機的な関係性であり、各時代の(生産)活動によるそれらの変化の結果として現前している今日の景観を考古学手法によって読解したものといえよう。

ヴァレッタ条約が考古遺産の構成要素として言及している *context* が、上記の狭義あるいは広義の考古文脈のどちらを指すのか(あるいはいずれも指さないのか)は明確でない。また同条約は環境影響評価に関連する第5条iii項で考古遺跡の「*setting*」(英語正文)に言及しているが、これが仏語正文では「*contexte*」と記述されるなど¹⁹、両者の違いが判然としない。このため、今世紀に入ると各国機関²⁰や国際機関などからこれらの用語を定義する必要性が指摘され始めた。2004年のエナメ憲章では、定義には至らないものの、社会・文化・歴史・自然など幅広い要素と結び付けてこれら二つの用語を考慮しており、両者との関係で文化遺産を解釈する重要性にも触れている。また、これに続く2005年の西安宣言では *setting* を、遺産の「環境(*environment*)」であると定義(第1条)したうえで、それは物質文化と非物質文化の両面において特徴づけられるとの認識を示している(第4条)。さらには、2013年に改訂された豪州イコモスのバーラ憲章²¹は、歴史的関係及び現代的関係にも言及している(第1条12項の注)。

以上のように、1960年代から2000年代初頭にかけての約40年の間に、遺跡を取り巻く *setting* の概念が「記念碑的な遺構(モニュメント)の背景」という審美的な観点から脱却し、モノだけでなく習俗や活動などの幅広い文化、さらには歴史的意義及び現代的意義に

Vincenzo (a cura di) (2001) *Istituzioni e politiche culturali in Italia negli anni Trenta, Tomo I, Quaderni Ministero per i Beni e le Attività Culturali - Ufficio Studi*. Roma: Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato, pp. 503-509.

¹³ イタリア語の *contesto* は、「個々の事象を位置付け、その意味、評価、証明を引き出すことが可能な、ある状況を構成し、特徴付ける周辺または事象の総体」と定義される。Il *Vocabolario Treccani Enciclopedia Italiana* 2010.

¹⁴ SCAZZOSI, Lionella (2006) *Progetto e paesaggio, progetto nel paesaggio, progetto di paesaggio*, p. 18. In: DI BENE, Anna e SCAZZOSI, Lionella (a cura di). *La Relazione Paesaggistica: finalità e contenuti, Decreto del Presidente del Consiglio dei Ministri, 12 dicembre 2005*. Roma: Gangemi Editore, pp. 16-18.

¹⁵ TERRENATO, Nicola (2000) *Contesto*. In: FRANCOVICH, Riccardo e MANACORDA, Daniele (a cura di). *Dizionario di archeologia: Temi, concetti e metodi*. Roma - Bari: Laterza, pp. 90-92.

¹⁶ CARANDINI, Andrea e CAMBI, Franco (a cura di) (2002) *Paesaggi d'Etruria: Valle dell'Albegia, Valle d'Oro, Valle del Chiarone, Valle del Tafone*. Roma: Edizioni di Storia e Letteratura.

¹⁷ MANACORDA, Daniele (2009) *Prima lezione di archeologia*. Roma - Bari:

Laterza, p. 6.

¹⁸ CAMBI, Franco (2011) *Manuale di archeologia dei paesaggi: Metodologie, fonti, contesti*. Roma: Carocci, p. 31.

¹⁹ 欧州評議会公式ウェブサイト、欧州景観条約の各国語の条文参照。<https://www.coe.int/en/web/landscape/text-of-the-european-landscape-convention> [最終閲覧日: 2022年2月10日]

²⁰ 例えば、2007年にイタリア文化省は、これまで「中身(*contenuti*)」である(記念碑的な)考古遺構の「箱(*contenenti*)」として捉えられてきた「文脈(*contesti*)」を再検討している。

Ministero per i Beni e le Attività Culturali (2007) *Il paesaggio "archeologico": Resti e contesti. Prospettive di condivisione su tutela e valorizzazione, X Borsa Mediterranea del turismo archeologico. Paestum, 15-18 novembre 2007*. Roma: Edizioni MP MIRABILIA. [Online]. http://www.beniculturali.it/mibac/multimedia/MiBAC/documents/1257347181815_Opuscolo_Paestum_internet.pdf [最終閲覧日: 2016年7月16日]

²¹ 1979年に採択されたバーラ憲章は、2013年までに4回改訂された。<https://australia.icomos.org/publications/burra-charter-practice-notes/burra-charter-archival-documents/> [最終閲覧日: 2022年2月9日]。

も結び付いた「環境」として捉えられるようになっていたことがわかる。一方、context は、考古学などの学術上は未だに発展途上の概念であって²²、明確な定義が存在していないが、「背景」から「環境」へという setting の再定義にこの概念の導入が影響を与えた可能性を指摘することができる。すなわち、景観との関係性における遺跡の保護を学術的観点から確立する上で、上記のような内容をもつ広義の考古文脈が鍵となることが予想される。

2. 景観・領域・場の概念と文脈

景観 (landscape) という言葉は多義的であり、学術的にも文化的にも定義するのが難しい²³。このような中、2000年の欧州景観条約は、景観を「住民によって知覚される場 (英語正文: an area) / 領域の一部 (仏語正文: une partie du territoire)」と定義した (第1条 a 項)²⁴。これは、現時点で最も先端的な景観の定義とされ、(主としてヨーロッパにおける) 文化遺産保護の分野に多大な影響を与えることとなった²⁵。なお、英仏語の正文間にみられる用語の微妙な差や、景観が生まれるメカニズムを住民の知覚(のみ)に依拠させている点については多くの議論があるが²⁶、とりあえずここでは、景観が領域あるいは場を母体として成立するとされていることを確認しておきたい。

領域 (territory) は、一般には、自然又は人工の要素からなる明確な境界で区画され、行政主体によって管理される空間を指す。一方、地理学が研究の対象とする領域については、学界内部においても異なる定義が併存する。このうち自然地理学がいう領域とは、「地質、地形、土壌、気候などの観点から特定できる地 (区) 域

(area)」を意味し²⁷、そこに居住する集団を考慮せずとも「対象 (object)」として定義できるとされる²⁸。これに対して、人文地理学が解釈する領域とは、人間による自然環境の歴史的な変容、つまり「領域化 (territorialization)」が生んだ「社会的な所産」であって、一つの構造を機能させる単位である要素の連なりという意味での「シンタグマ (統語)」と説明される²⁹。この領域はさらに、「自然の静的な舞台装置」、「人間の多様な活動」、「意義と表象」という不可分な三つの要素によって構成され、このうち最初の二要素 (換言すれば、ある環境下における居住様式の発展) が領域の「外形 (exteriority)」を作り、これに最後の一要素 (価値) が組み込まれることによって、その全体が領域の「自己同一性 (identity)」を決定するという³⁰。すなわち、この自己同一性という語は、領域とそこに生活する集団との関係性を含意しており、これを上述の欧州条約における景観の定義に当てはめると、目の前にある領域を景観に変えるのは、目の後ろにある住民の「記憶と文化」ということになる³¹。

一方、場 (place) とは、一般には、物理的又は観念的に区切られた明確な境界線を持たずとも成立しうる空間を指し、部屋のような狭小なものから大陸のような広大なものまで、その指し示す範囲に大きな差があることが、領域との違いの一つである。このような基本的な意味に加えて、人文地理学が扱う場とは、「住民が感情をもって生活する空間」と定義される³²。この場合は、領域と同一の空間を対象としながらも、そこで生活する集団の主観により比重を置いた概念である。すなわち、「物質的な側面」によって特徴付けられる (自然地

²² 前掲 17, pp. 21-32.

²³ CANIGIANI, Franca (2011) Ragionando su paesaggio/territorio/ambiente, p. 63. In: ZOPPI, Mariella (a cura di) *Paesaggio tra conservazione e trasformazione: una questione nazionale*, Quaderni del Circolo Rosselli, Nuova serie n. 1-2/2011 (anno XXXI, fascicolo 109). Firenze: ALINEA editrice, pp. 63-87. LANDO, Fabio (2003) I segni del radicamento: luogo territorio paesaggio. In: CUSIMANO, Girolamo (a cura di) *Scritture di paesaggio*. Bologna: Patron Editore, pp. 183-196.

²⁴ 欧州評議会公式サイト参照。https://www.coe.int/en/web/conventions/full-list?module=treaty-detail&treatynum=176 [最終閲覧日: 2022年2月6日]

²⁵ 定義を含む同条約の内容は、これ以降に公布されたイタリアの2004年1月22日法律第42号 (「文化財および景観に関する法律」) における景観の規定 (第131条) などに反映されている。

²⁶ BALDESCHI, Paolo (2011) *Territorio e paesaggio*. Firenze: Le lettere.

²⁷ AA.VV. (2009) *Il Bilancio Sociale, Documenti di ricerca n° 12: La rendicontazione territoriale: Le finalità, il processo, gli indicatori*, Giuffrè Editore, p. 16.

²⁸ BANINI, Tiziana (2013) Introduzione: Proporre, interpretare, costruire le

identità territoriali, p. 12. In: BANINI, Tiziana (a cura di), *Identità territoriali: Questioni, metodi, esperienze a confronto*. Milano: FrancoAngeli, pp. 9-27.

²⁹ RAFFESTIN, Claude (2005) *Dalla nostalgia del territorio al desiderio di paesaggio: Elementi per una teoria del paesaggio*. Firenze: Alinea. cit., in AA.VV. (2009) *Il Bilancio Sociale, Documenti di ricerca n° 12: La rendicontazione territoriale: Le finalità, il processo, gli indicatori*, Giuffrè Editore.

³⁰ LANDO, Fabio (2003) I segni del radicamento: luogo territorio paesaggio, p. 189. In: CUSIMANO, Girolamo (a cura di) *Scritture di paesaggio*. Bologna: Patron Editore, pp. 183-196.

³¹ QUAINI, Massimo (2011) Il ruolo di paesaggi storici per prescrivere il futuro, p. 130. In: MANTONE, Maria e RONZO, Maria (a cura di) *Patrimonio culturale e paesaggio – un approccio di filiera per la progettualità territoriali* –, Roma: Gangemi Editore, pp. 125-132.

³² IPPOLITO, Michele (2011) *Approfondimenti di Geografia*. [Online].

http://www.isismontaetrade.it/appunti-per-casa%5Cippolito%5Capprofondimenti%20geografia.pdf [最終閲覧日: 2022年2月9日]

理学の) 領域は³³、「住民及びその経験や日常生活」を介することによって場になる³⁴。同様に、環境心理学における場も、物理的環境を社会的集団に関連付けた概念であって³⁵、「物質的な属性」、「行動」、「概念」という三つの要素が相互に関わった結果とされる³⁶。場の主体である住民(集団及び個人)は、場を彼らの「自己同一性(identity)」〔の一部〕として認識し³⁷、これは、「愛着」と呼ばれる帰属意識と深く関係する³⁸。ここでは(定義が困難な)この自己同一性については詳察しないが³⁹、要するに場という概念は、その空間に特有の活動を行う住民の主観の枠に収まるものといえよう。この主観性がゆえに場は、領域以上に、住民を固有の生活空間に結び付ける「歴史、記憶、経験の総体」としての景観の基礎になると解釈されている⁴⁰。

以上のことから、領域と場という二つの概念は双方ともに、(簡単にいえば)「自然環境とその条件の中で人間が構築した構造物などの物質文化」、そこでの「人間の生産活動や習俗などの非物質文化」、さらには両者に「人間が意味付けをする、あるいは見出す価値」という共通する三つの要素によって構成され、それゆえに本質的に相似した構造をもつことがわかる。また考古学においては、(ある集団の)文化は「物質資料の総体」、「行動と習俗」、「意義の付与」という三つの要素で構成され、それらの相互関係が「文脈(*contesto*)」を構築するとされる⁴¹。つまり、文化を構成する各要素も領域及び場のそれと本質的に同一といえる。

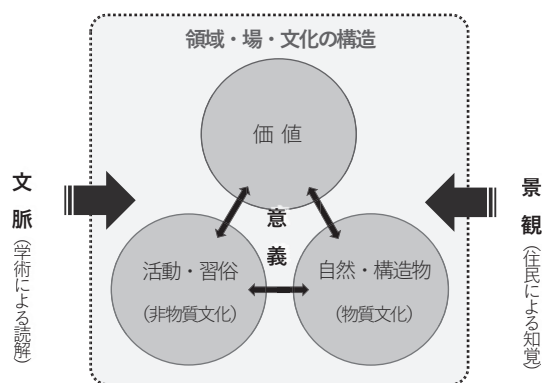


図9-1 文脈と景観の関係

(BANINI 2013, BONNES & SECCHIAROLI 1995, CANTER 1977, DE RUBERTIS 2013, GIANNICCHEDDA 2000, LANDO 2003, PURINI 1976, NORBERG-SCHULZ 1979, RAFFESTIN 2005 の各研究を基に作成)

これらを総合すると、領域・場・文化の構造を学術的手法、つまり「観察者の主観的な行為」⁴²に基づいて読解したものが「文脈」であり、住民がその記憶や文化を介して知覚したものが「景観」であるという構図を仮説的に導き出せよう(図9-1)。このような学術的手法の一つである考古学は、物質文化を切り口に過去の社会を復元するという本来的役割から、文脈に対する主要なアプローチといえる。ただし、(広義の)考古文脈は、他の学術分野による文脈に対して排他的ではありません、領域や場の全体像を把握する上での貢献は限定的であることを指摘しておく。

³³ SCARAMPELLINI, Guglielmo (2010) Identità, cultura, territorio. Da tema di riflessione teorica a strumento di indagine empirica, p. 68. In: SCARAMPELLINI, Guglielmo (a cura di) *Paesaggi, territori, culture: Viaggio nei luoghi e nelle memorie del Parco del Ticino*. Milano: Cisalpino Istituto Editoriale Universitario, pp. 3-130.

³⁴ BANINI, Tiziana (2013) Introduzione: Proporre, interpretare, costruire le identità territoriali, p. 11. In: BANINI, Tiziana (a cura di), *Identità territoriali: Questioni, metodi, esperienze a confronto*. Milano: FrancoAngeli, pp. 9-27.

³⁵ BONNES, Mirilia e SECCHIAROLI, Gianfranco (1995) *Environmental Psychology: A Psycho-social Introduction*. London: Sage publications, p. 169.

³⁶ CANTER, David (1977) *The Psychology of Place*. London: The Architectural Press Ltd.

³⁷ 前掲 33。

³⁸ BONNES, Mirilia et al. (2013) *Immagini, identità, reputazione dei luoghi urbani: per un approccio partecipativo alla progettazione e gestione ambientale*, p. 93. In BANINI, Tiziana (a cura di), *Identità territoriali: Questioni, metodi, esperienze a confronto*, Milano: FrancoAngeli, pp. 92-108.

³⁹ 近年、わか国の文化財保護分野でも地域や地域住民に関連付けて使われるようになったアイデンティティという語は、19世紀以降のグローバル化の中で理想化されてきた概念であり、多義的で

あるとともに、その導入をめぐる多くの議論がある。

SCARAMPELLINI, Guglielmo (2010) Identità, cultura, territorio. Da tema di riflessione teorica a strumento di indagine empirica, pp. 6, 27-28. In: SCARAMPELLINI, Guglielmo (a cura di) *Paesaggi, territori, culture: Viaggio nei luoghi e nelle memorie del Parco del Ticino*. Milano: Cisalpino Istituto Editoriale Universitario, pp. 3-130.

⁴⁰ DE NARDI, Alessia (2009) Paesaggio e popolazione: percezioni individuali e rappresentazioni sociali, p. 92. In: CASTIGLIONI, Benedetta e DE MARCHI, Massimo (a cura di), *Di chi è il paesaggio?: La partecipazione degli attori nella individuazione, valutazione e pianificazione*. Padova: CLEUP, pp. 87-96.

⁴¹ GIANNICCHEDDA, Enrico (2000) Cultura materiale, pp. 101-102. In: FRANCOVICH, Riccardo e MANACORDA, Daniele (a cura di), *Dizionario di archeologia: Temi, concetti e metodi*. Roma - Bari: Laterza, pp. 99-104.

⁴² DE RUBERTIS, Stefano (2013) Identità territoriale e progetti di sviluppo. Un punto di vista cibernetico, p. 35. In: BANINI, Tiziana (a cura di) *Identità territoriali: Questioni, metodi, esperienze a confronto*, Milano: FrancoAngeli, pp. 29-44.

3. 意義の保存

建築学では、場は、学術的な知見のみならず、その「構造」を作る各要素の有機的な「関係性」をつうじて把握されるといい、この関係性を「意義 (significance)」と呼んでいる⁴³。また、場を構成する（地理学がいう各要素に似た）「三つの意義」に対する「感情」をつうじて場の「興味 (atmosfera)」が湧くとされる⁴⁴。この「意義」あるいは「興味」を保存するということは、過去から伝わった場の価値を未来に伝えることに他ならず、場における（農林水産業といった主として一年を単位として循環する生産などの）「活動サイクル」の中でこの価値を回復させ、再び機能させることによって「現代の自己同一性が涵養される」という⁴⁵。場の構造は、時代とともに変化してきたものであり、今後も同一ではありえない。しかしながら、これら各要素の均衡を維持しつつ「常に新しい歴史的な文脈の中にその自己同一性を具体化する」ことこそ、場が自己同一性を保存することであると解釈されている⁴⁶。

今回の世界遺産研究協議会においても言及された、英国政府及びヒストリック・イングランドが強調する文化遺産の「意義」の保存、あるいは豪州及び太平洋地域における文化的景観への「能動的な関わり」といった方向性は、このような脈絡の中で理解することができる。遺跡を物質文化の枠組み、つまり狭義の文化財としてのみ捉えることは、「意義」や「興味」が生まれる基盤となる三つの要素のうち、最初の一つ（又はそれ以下）しか認識していないことに等しい。遺跡を現代的意義の中に位置づけ、それらに新たな価値を付与するためには、景観との関係で遺跡を保護することが必要である。遺跡保護に関する今日の国際的な思潮は、景観の枠に遺跡を挿入した文脈の保護を意図しており、これは近年加速する地球規模での気候変動に対する危機感とも密接に関係している。

以上のことから、広義の考古文脈を保護するために特に必要な要素として、いくつかを挙げることができる。一つは、対象空間の学術的な読解というアプローチそのものである。史跡に専門職員を配置した博物館や資料館を併設し、また今回報告された先進的整備事例のように遺跡と景観との関係に特別な注意を払うことの重要性はこれに関連する。もう一つは、領域の外形性

という観点からは、物質文化の保存とともに、非物質文化の維持にも配慮しなければならないということである。前者は狭義の文化財保護の枠組みで対応できるが、後者は例えば農林水産業など領域の利用規定にも大きく関係する。このような視点はわが国では文化的景観の管理計画などに一部認められるものの、全国を網羅する勢いで施行される景観法に基づく景観計画は⁴⁷このような計画とは性格を異にし、また国土に満遍なく所在する考古遺跡と領域との関係性を意識したものではない。景観及び文化遺産の総体的保護を実現する上で、わが国には目下のところ欠けている要素の一つといえよう。

まとめ

本稿では、遺跡保護についての今日の国際的な思潮を概観するという目的のもと、考古学が取り扱う空間に関連するいくつかの用語が複数の学術分野においてどのように捉えられているかを観察し、それら相互の関係を検証してみた。

その結果、「setting (背景・周辺環境)」及び「context (文脈)」という用語は、いまだ明確な定義を得ていないものの、2000年代以降の議論の中では、物質文化と非物質文化、また歴史的意義と現代的意義の包括的把握に結び付けて考えられるようになり、互いによく似た概念へと進化していることがわかった。また、「文脈」と「景観」とは、いずれも相似した要素からなる「領域」、「場」、「文化」の構造を、学術による読解と住民による知覚という、それぞれ異なるアプローチをつうじて理解するもの、という構図を仮説的に導き出すことができた。そして、常に変化しつづける場の意義や興味の保存とは、上記のような各要素の間での均衡を再び機能させて、今日的な文脈の中で顕在化させることである、と解釈されていることがわかった。

このような保護を実現するには、個々の遺跡を文化財として保存するのみならず、それらと周辺環境との関係性を読解することをつうじて領域の伝統的な利用のあり方を特定し、その再生について規定する計画が必要と考えられる。そのような制度についての研究も、今後の課題の一つである。

⁴³ NORBERG-SCHULZ, Christian (1979) *Genius Loci: paesaggio Ambiente Architettura*, 2009. Milano: Electa, pp. 5, 18, 166.

⁴⁴ PURINI, Franco (1976) *Luogo e progetto*. Roma: Editrice Magma, p. 24.
「三つの意義」とは、「自然の光景」、「居住空間に伝承される記憶の総体」、「構築空間の利用に関する意味深い行動」を指す。

⁴⁵ 前掲32, p. 74.

⁴⁶ 前掲42.

⁴⁷ 令和3 (2021) 年3月31日現在、全国22都道府県、608区市町村が景観計画の策定に至っている。国土交通省公式ウェブサイト参照。
<https://www.mlit.go.jp/toshi/townscape/content/001415533.pdf>



資 料

文化遺産サイトの
解説及び展示に関する
イコモス憲章

The ICOMOS Charter
for the Interpretation and Presentation
of Cultural Heritage Sites

解説及び展示に関する
イコモス国際学術委員会の支援の下に
検討及び修正

Reviewed and revised under the Auspices of
the ICOMOS International Scientific Committee
on Interpretation and Presentation

カナダ・ケベック
第16回イコモス総会にて採択

Ratified by the 16th General Assembly of ICOMOS
Quebec, Canada

2008年10月4日

4 October 2008

前文
定義
目的
原則

Preamble
Definitions
Objectives
Principles

前文

1965年の創立以来イコモスは、文化遺産サイトの研究、記録、保護を担う世界的な専門家組織として、様々な活動をとおして保存倫理を推進するとともに、人類の有形遺産がその全形式及び多様性のもとに広く社会に認識されるよう支援に努めてきた。

ヴェネツィア憲章（1964年）に記されているように、「古建築の保存と修復の指導原理を国際的な基盤に基づいて合意し、文書で規定し、各国がそれぞれの独自の文化と伝統の枠内でその計画を適用する責務を担うことが不可欠」である。この使命にしたがい、これに続くイコモスの諸憲章は、具体的な保存上の諸課題に対応した専門的な指針を策定し、遺産保存の重要性が世界の各地域において確実に伝達されるよう奨励してきた。

これら初期のイコモス憲章は、保存の幅広い過程に不可欠な要素の一つとして、「普及」、

PREAMBLE

Since its establishment in 1965 as a worldwide organisation of heritage professionals dedicated to the study, documentation, and protection of cultural heritage sites, ICOMOS has striven to promote the conservation ethic in all its activities and to help enhance public appreciation of humanity's material heritage in all its forms and diversity.

As noted in the Charter of Venice (1964) "It is essential that the principles guiding the preservation and restoration of ancient buildings should be agreed and be laid down on an international basis, with each country being responsible for applying the plan within the framework of its own culture and traditions." Subsequent ICOMOS charters have taken up that mission, establishing professional guidelines for specific conservation challenges and encouraging effective communication about the importance of heritage conservation in every region of the world.

These earlier ICOMOS charters stress the importance of public communication as an essential

「大衆化」、「展示」、「解説」など様々に記述される) 広報活動の重要性を強調している。これは暗に、世界の文化的伝統に基づく遺産保護という行為のいずれも、その性質上、一つの伝達行為であるということを各憲章が認めていることを意味している。

過去の社会や文明が残した有形の遺物や無形の価値は幅広いことから、何を保存し、どのように保存し、どのように市民に公開するかの選択は、全て遺跡の解説に関わる要素である。これらの行為は、何が意義であり、何が重要であり、なぜ過去からの有形の遺物が未来の世代へ継承されるべきかについての各世代の視点を反映している。

解説及び展示に向けて、明解な論理、標準化された用語や広く受け入れられる専門的な原則が必要なことは明らかである。近年、多くの文化遺産サイトにおいて解説に関する活動が急速に拡大し、精巧な解説技術ならびに文化遺産サイトのマーケティングや管理を目的とする新たな経済戦略が導入されるようになった。これにより、汎世界的な文化遺産サイトの保存及び市民による享受という目標に向けて核心を成す新たな複雑性が生じるとともに、基本的な疑問が生じてきた。

- 文化遺産サイトの解説及び展示に関する広く受け入れられた、また受け入れ可能な目標は何か。
- 特定の文化や歴史の文脈における適切な技術的手段や方法を判断する助けとなるべき原則は何か。
- 具体的な形式や技術が多岐にわたる中で、解説及び展示の形成に資するべき一般倫理上及び専門上の配慮事項は何か。

すなわち本憲章の目的は、文化遺産サイトの保存に向けた取組みに不可欠な構成要素であり、市民による遺跡の享受と理解を促す手段である、解説及び展示の基本原則を定義することである*。

*本憲章の原則及び目的は、現地以外での解説にも同様に適用されるものの、その主な対象は、文化

part of the larger conservation process (variously describing it as “dissemination,” “popularization,” “presentation,” and “interpretation”). They implicitly acknowledge that every act of heritage conservation — within all the world’s cultural traditions - is by its nature a communicative act.

From the vast range of surviving material remains and intangible values of past communities and civilisations, the choice of what to preserve, how to preserve it, and how it is to be presented to the public are all elements of site interpretation. They represent every generation’s vision of what is significant, what is important, and why material remains from the past should be passed on to generations yet to come.

The need for a clear rationale, standardised terminology, and accepted professional principles for Interpretation and Presentation* is evident. In recent years, the dramatic expansion of interpretive activities at many cultural heritage sites and the introduction* See definitions on page 3. of elaborate interpretive technologies and new economic strategies for the marketing and management of cultural heritage sites have created new complexities and aroused basic questions that are central to the goals of both conservation and the public appreciation of cultural heritage sites throughout the world:

- What are the accepted and acceptable goals for the Interpretation and Presentation of cultural heritage sites?
- What principles should help determine which technical means and methods are appropriate in particular cultural and heritage contexts?
- What general ethical and professional considerations should help shape Interpretation and Presentation in light of its wide variety of specific forms and techniques?

The purpose of this Charter is therefore to define the basic principles of Interpretation and Presentation as essential components of heritage conservation efforts and as a means of enhancing public appreciation and understanding of cultural heritage sites* .

*Although the principles and objectives of this Charter may equally apply to off-site interpretation, its main focus is interpretation and presentation at, or in the immediate

遺産サイトの現地あるいはその直近における解説及び展示である。

定義

本憲章の目的にかんがみ、

「解説」とは、文化遺産サイトに対する市民の意識啓発と理解促進に向けたあらゆる活動を指す。これらは、紙又は電子媒体の刊行物、一般向けの講演、現地及びこれに直接関係する現地以外でのインスタレーション、教育プログラム、地域活動、継続的な調査研究、研修、さらに解説の過程そのものの評価を含む。

「展示」とは、より具体的に、文化遺産サイトにおける解説情報の配置、物理的アクセス、解説用施設をつうじて入念に計画された解説内容の伝達を意味する。これは、情報パネル、博物館型ディスプレイ、定型化した徒歩見学コース、講演やガイドツアー、マルチメディアを用いたアプリケーションやウェブサイトといった要素を、必須ではないものの含む、様々な技術的手段をつうじて実施される。

「解説施設」とは、文化遺産サイトの現地における、あるいはこれに付属した、物理的なインスタレーション、設備、区域であって、解説及び展示という特定の目的に利用されるものを指し、新規又は既存の技術を介した補助的な解説を含む。

「遺跡解説者」とは、文化遺産サイトにおいて、遺跡の価値や意義に関する情報を市民向けに伝達する役割を常勤あるいは非常勤で担う職員又はボランティアを指す。

「文化遺産サイト」とは、歴史的及び文化的な意義が認識され、多くの場合において法的に保護されている、場所、地区、自然景観、集落域、建造物群、考古遺跡又は地上にある遺構を指す。

目的

解説及び展示は文化遺産の保存管理の全過程の一部であるという認識の下、本憲章では七つの基本原則の確立に努める。個別の条件に

vicinity of, cultural heritage sites.

DEFINITIONS

For the purposes of the present Charter,

Interpretation refers to the full range of potential activities intended to heighten public awareness and enhance understanding of cultural heritage site. These can include print and electronic publications, public lectures, on-site and directly related off-site installations, educational programmes, community activities, and ongoing research, training, and evaluation of the interpretation process itself.

Presentation more specifically denotes the carefully planned communication of interpretive content through the arrangement of interpretive information, physical access, and interpretive infrastructure at a cultural heritage site. It can be conveyed through a variety of technical means, including, yet not requiring, such elements as informational panels, museum-type displays, formalized walking tours, lectures and guided tours, and multimedia applications and websites.

Interpretive infrastructure refers to physical installations, facilities, and areas at, or connected with a cultural heritage site that may be specifically utilised for the purposes of interpretation and presentation including those supporting interpretation via new and existing technologies.

Site interpreters refers to staff or volunteers at a cultural heritage site who are permanently or temporarily engaged in the public communication of information relating to the values and significance of the site.

Cultural Heritage Site refers to a place, locality, natural landscape, settlement area, architectural complex, archaeological site, or standing structure that is recognized and often legally protected as a place of historical and cultural significance.

OBJECTIVES

In recognizing that interpretation and presentation are part of the overall process of cultural heritage conservation and management, this Charter seeks to establish seven cardinal principles, upon which In-

適した形式や媒体がいかなるものであっても、解説及び展示はこれらの原則に基づくものとする。

原則 1：アクセスと理解

原則 2：情報源

原則 3：環境及び文脈への注意

原則 4：真正性の保存

原則 5：持続可能性に向けた計画

原則 6：包摂性への配慮

原則 7：調査、研修、評価の重要性

これら七つの原則に基づき、本憲章は以下を目的とする：

1. 文化遺産サイトの理解及び享受を容易にし、その保護と保存に必要な市民の認識と関与を醸成すること。
2. 綿密で文章化された意義の認識と、広く受け入れられた科学的で学術的な手法をつうじ、さらには生きた文化的伝統によって、文化遺産サイトの意味を多くの人々に伝達すること。
3. 文化遺産サイトの有形及び無形の価値を、その自然的及び文化的環境、社会的文脈の中で保護すること。
4. 文化遺産サイトの歴史的構造と文化的価値の意義を伝達し、それらを邪魔な解説施設、来場者による圧力、不正確あるいは不適切な解説などによる悪影響から守ることによって、文化遺産サイトの真正性を尊重すること。
5. 進行中の保存の取り組みへの市民の理解と参画を促進し、解説施設の長期的な維持管理と解説内容の定期的見直しを確実に行うことをつうじて、文化遺産サイトの持続的な保存に寄与すること。
6. 解説プログラムの開発及び運用に利害関係者や関係するコミュニティが参画しやすくすることをつうじて、文化遺産サイトの解説における包摂性を促進すること。
7. 技術、調査、研修を含む遺産の解説及び展示のための技術的で専門的な指針を策定すること。このような指針は、それが適用

interpretation and Presentation — in whatever form or medium is deemed appropriate in specific circumstances — should be based.

Principle 1: Access and Understanding

Principle 2: Information Sources

Principle 3: Attention to Setting and Context

Principle 4: Preservation of Authenticity

Principle 5: Planning for Sustainability

Principle 6: Concern for Inclusiveness

Principle 7: Importance of Research, Training, and Evaluation

Following from these seven principles, the objectives of this Charter are to:

1. Facilitate understanding and appreciation of cultural heritage sites and foster public awareness and engagement in the need for their protection and conservation.
2. Communicate the meaning of cultural heritage sites to a range of audiences through careful, documented recognition of significance, through accepted scientific and scholarly methods as well as from living cultural traditions.
3. Safeguard the tangible and intangible values of cultural heritage sites in their natural and cultural settings and social contexts.
4. Respect the authenticity of cultural heritage sites, by communicating the significance of their historic fabric and cultural values and protecting them from the adverse impact of intrusive interpretive infrastructure, visitor pressure, inaccurate or inappropriate interpretation.
5. Contribute to the sustainable conservation of cultural heritage sites, through promoting public understanding of, and participation in, ongoing conservation efforts, ensuring long-term maintenance of the interpretive infrastructure and regular review of its interpretive contents.
6. Encourage inclusiveness in the interpretation of cultural heritage sites, by facilitating the involvement of stakeholders and associated communities in the development and implementation of interpretive programmes.
7. Develop technical and professional guidelines for heritage interpretation and presentation, in-

される社会的文脈において適切かつ持続的でなければならない。

cluding technologies, research, and training. Such guidelines must be appropriate and sustainable in their social contexts.

原則

PRINCIPLES

原則 1：アクセスと理解

Principle 1: Access and Understanding

解説及び展示のためのプログラムは、市民による文化遺産サイトへの物理的及び知的アクセスを容易にすべきである。

Interpretation and presentation programmes should facilitate physical and intellectual access by the public to cultural heritage sites.

1.1 効果的な解説及び展示は、文化遺産サイトの保存に関して、個人的経験を豊かにし、市民による尊重と理解を増進し、その重要性を伝達すべきである。

1.1 Effective interpretation and presentation should enhance personal experience, increase public respect and understanding, and communicate the importance of the conservation of cultural heritage sites.

1.2 解説及び展示は、個人及びコミュニティにサイトに対する自らの認識を省みるよう促し、彼らがサイトとの有意義な関係を構築する助けになるべきである。この目的は、さらなる関心、学び、体験、探求心を刺激するものであるべきである。

1.2 Interpretation and presentation should encourage individuals and communities to reflect on their own perceptions of a site and assist them in establishing a meaningful connection to it. The aim should be to stimulate further interest, learning, experience, and exploration.

1.3 解説及び展示のプログラムは、統計的及び文化的観点から対象者を特定、評価すべきである。様々な対象者にサイトの価値と意義を伝えるべく、あらゆる努力をすべきである。

1.3 Interpretation and presentation programmes should identify and assess their audiences demographically and culturally. Every effort should be made to communicate the site's values and significance to its varied audiences.

1.4 解説施設においては、来場者や遺産サイトに関係するコミュニティの間での言語の多様性に配慮すべきである。

1.4 The diversity of language among visitors and associated communities connected with a heritage site should be taken into account in the interpretive infrastructure.

1.5 解説及び展示の活動はさらに、どのような形であっても、市民が物理的に利用できるものであるべきである。

1.5 Interpretation and presentation activities should also be physically accessible to the public, in all its variety.

1.6 保存上の懸念や、文化的配慮の必要性、活用、又は安全上の理由から文化遺産サイトへの物理的アクセスが制限される場合は、解説及び展示は現地以外で提供すべきである。

1.6 In cases where physical access to a cultural heritage site is restricted due to conservation concerns, cultural sensitivities, adaptive re-use, or safety issues, interpretation and presentation should be provided off-site.

原則 2：情報源

Principle 2: Information Sources

解説及び展示は、広く受け入れられている科学的かつ学術的な手法を通じ、また生きた文化的伝統文化から収集された根拠に基づくべきである。

Interpretation and presentation should be based on evidence gathered through accepted scientific and scholarly methods as well as from living cultural traditions.

2.1 解説は、サイトにかかる口述又は記述された情報、遺物遺構、伝統、ならびに意義を幅

広く示すべきである。これらの情報源は、記録、保管され、市民に公開されるべきである。

2.2 解説は、サイトとその周辺環境についての入念な学際的研究に基づくべきである。有意義な解説は必然的に、歴史上の異なる説、地域の伝統や逸話の反映を含むものであることを認識すべきである。

2.3 伝統的な口承又は歴史上の登場人物に関する記憶がサイトの意義にまつわる重要な情報源を提供する文化遺産サイトにおいては、解説プログラムにはこれらの口承的証言を組み込むべきであり、それは解説施設の設備をつうじた間接的な手法、あるいは関係するコミュニティの構成員が現地解説者として積極的に参加することをつうじた直接的な手法によって行われる。

2.4 視覚的な復元は、芸術家、建築家、あるいはコンピューターモデリングの専門家のいずれによるものであっても、記述、口述、又は図像学的情報源の分析や写真を含む、環境的、考古学的、建築学的、歴史学的なデータの詳細かつ体系的な分析に立脚すべきである。そのような視覚的表現が根拠とする情報源は明確に記録され、同一の根拠に基づく他の復元案があるならば、これも比較できるように提示すべきである。

2.5 さらに、解説及び展示のプログラムや活動は、将来的な参照や再考のため記録され、保管されるべきである。

原則 3：文脈と環境

文化遺産サイトの解説及び展示は、これととりまく広範な社会的、文化的、歴史的、自然的文脈及び環境に関連付けられるべきである。

3.1 解説は、歴史、政治、精神、芸術に関する多面的な文脈の中でサイトの意義を探索すべきである。そこでは、サイトの文化的、社会的、環境的な意義及び価値に関するあらゆる側面が考慮されるべきである。

3.2 文化遺産サイトについての一般向け解説では、その変遷における各段階や影響要因を明確に区別し、時期比定すべきである。これら全

2.1 Interpretation should show the range of oral and written information, material remains, traditions, and meanings attributed to a site. The sources of this information should be documented, archived, and made accessible to the public.

2.2 Interpretation should be based on a well researched, multidisciplinary study of the site and its surroundings. It should also acknowledge that meaningful interpretation necessarily includes reflection on alternative historical hypotheses, local traditions, and stories.

2.3 At cultural heritage sites where traditional storytelling or memories of historical participants provide an important source of information about the significance of the site, interpretive programmes should incorporate these oral testimonies — either indirectly, through the facilities of the interpretive infrastructure, or directly, through the active participation of members of associated communities as on-site interpreters.

2.4 Visual reconstructions, whether by artists, architects, or computer modelers, should be based upon detailed and systematic analysis of environmental, archaeological, architectural, and historical data, including analysis of written, oral and iconographic sources, and photography. The information sources on which such visual renderings are based should be clearly documented and alternative reconstructions based on the same evidence, when available, should be provided for comparison.

2.5 Interpretation and presentation programmes and activities should also be documented and archived for future reference and reflection.

Principle 3: Context and Setting

The Interpretation and Presentation of cultural heritage sites should relate to their wider social, cultural, historical, and natural contexts and settings.

3.1 Interpretation should explore the significance of a site in its multi-faceted historical, political, spiritual, and artistic contexts. It should consider all aspects of the site's cultural, social, and environmental significance and values.

3.2 The public interpretation of a cultural heritage site should clearly distinguish and date the successive phases and influences in its evolution. The

ての時代がサイトの意義の形成に寄与していることを尊重すべきである。

3.3 解説はさらに、サイトの歴史的及び文化的意義に貢献したすべての集団を考慮に入れるべきである。

3.4 周辺景観、自然環境、地理的環境は、サイトの歴史的及び文化的意義にとっての不可欠な要素であり、それゆえに、解説において考慮すべきである。

3.5 サイトの解説においては、その遺産の無形的要素、すなわち文化的及び精神的伝統、説話、音楽、舞踊、演劇、文学、視覚芸術、在地の習俗や食文化など、を考慮すべきである。

3.6 解説プログラムの策定にあたっては、遺産サイトの異文化間交流に関わる意義や、学術研究の成果、古記録及び生きた伝統に基づく幅広い観点を考慮すべきである。

原則 4：真正性

文化遺産サイトの解説及び展示は、「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」（1994年）の精神における真正性についての基本的考え方を尊重しなければならない。

4.1 真正性は、有形的遺構遺物だけでなく人間社会にも関わる問題である。遺産解説プログラムの計画にあたっては、そのサイトの伝統的な社会的役割や地域住民及び関係コミュニティの文化的慣習と尊厳を尊重すべきである。

4.2 解説及び展示は、文化遺産サイトの価値に悪影響を与えたり、その構造に不可逆的な改変を加えたりすることなく意義を伝えることによって、その真正性の保存に寄与すべきである。

4.3 目に見える解説施設（例えば、売店、遊歩道、説明板など）は全て、容易に見つけられるものでありながらも、そのサイトの特性、環境、文化的及び自然的意義に配慮したものでなければならない。

4.4 現地でのコンサート、演劇、その他の解説プログラムは、そのサイトの意義と物理的環境を保護し、かつ地域住民への迷惑を最小限にと

contributions of all periods to the significance of a site should be respected.

3.3 Interpretation should also take into account all groups that have contributed to the historical and cultural significance of the site.

3.4 The surrounding landscape, natural environment, and geographical setting are integral parts of a site's historical and cultural significance, and, as such, should be considered in its interpretation.

3.5 Intangible elements of a site's heritage such as cultural and spiritual traditions, stories, music, dance, theater, literature, visual arts, local customs and culinary heritage should be considered in its interpretation.

3.6 The cross-cultural significance of heritage sites, as well as the range of perspectives about them based on scholarly research, ancient records, and living traditions, should be considered in the formulation of interpretive programmes.

Principle 4: Authenticity

The Interpretation and presentation of cultural heritage sites must respect the basic tenets of authenticity in the spirit of the Nara Document (1994).

4.1 Authenticity is a concern relevant to human communities as well as material remains. The design of a heritage interpretation programme should respect the traditional social functions of the site and the cultural practices and dignity of local residents and associated communities.

4.2 Interpretation and presentation should contribute to the conservation of the authenticity of a cultural heritage site by communicating its significance without adversely impacting its cultural values or irreversibly altering its fabric.

4.3 All visible interpretive infrastructures (such as kiosks, walking paths, and information panels) must be sensitive to the character, setting and the cultural and natural significance of the site, while remaining easily identifiable.

4.4 On-site concerts, dramatic performances, and other interpretive programmes must be carefully planned to protect the significance and physical surroundings of the site and minimise disturbance to the local residents.

どめるよう、注意深く計画しなければならない。

原則 5：持続可能性

文化遺産サイトのための解説計画は、社会的、財政的、環境的持続可能性などを中心的目標に掲げつつ、その自然的及び文化的環境に配慮しなければならない。

5.1 解説及び展示プログラムの開発と運用は、文化遺産サイトの全体的な計画立案、予算編成、維持管理の工程の不可欠な一部であるべきである。

5.2 遺産影響評価の調査においては、解説施設や来場者数とそのサイトの文化的価値、物理的特徴、完全性や自然環境に対して及ぼしうる影響を十分に考慮しなければならない。

5.3 解説及び展示は、保存や教育的及び文化的目的に幅広く資するべきである。解説プログラムの成功を、来場者数や収入だけに基づいて評価すべきではない。

5.4 解説及び展示は、保存の工程の不可欠な一部であり、サイトが直面する具体的な保存上の課題についての市民の認識を高め、サイトの物理的完全性及び真正性を守るための取組みについて説明するものであるべきである。

5.5 サイトの解説施設の恒久的な一部分として選択される技術的又は工学的な要素は、効率的かつ定期的に維持できるように計画し、構築すべきである。

5.6 サイトの解説プログラムにおいては、教育、研修、雇用の機会をつうじて、全ての利害関係者に公平で持続可能な経済的、社会的、文化的利益を提供することを目指すべきである。

原則 6：包摂性

文化遺産サイトについての解説及び展示は、遺産の専門家、主体及び関係コミュニティ、その他利害関係者間の有意義な協働の成果でなければならない。

6.1 解説及び展示プログラムは、研究者、コミュニティの構成員、保存専門家、行政機関、サイトマネージャー及び解説者、観光事業者、そ

Principle 5: Sustainability

The interpretation plan for a cultural heritage site must be sensitive to its natural and cultural environment, with social, financial, and environmental sustainability among its central goals.

5.1 The development and implementation of interpretation and presentation programmes should be an integral part of the overall planning, budgeting, and management process of cultural heritage sites.

5.2 The potential effect of interpretive infrastructure and visitor numbers on the cultural value, physical characteristics, integrity, and natural environment of the site must be fully considered in heritage impact assessment studies.

5.3 Interpretation and presentation should serve a wide range of conservation, educational and cultural objectives. The success of an interpretive programme should not be evaluated solely on the basis of visitor attendance figures or revenue.

5.4 Interpretation and presentation should be an integral part of the conservation process, enhancing the public's awareness of specific conservation problems encountered at the site and explaining the efforts being taken to protect the site's physical integrity and authenticity.

5.5 Any technical or technological elements selected to become a permanent part of a site's interpretive infrastructure should be designed and constructed in a manner that will ensure effective and regular maintenance.

5.6 Interpretive programmes should aim to provide equitable and sustainable economic, social, and cultural benefits to all stakeholders through education, training and employment opportunities in site interpretation programmes.

Principle 6: Inclusiveness

The Interpretation and Presentation of cultural heritage sites must be the result of meaningful collaboration between heritage professionals, host and associated communities, and other stakeholders.

6.1 The multidisciplinary expertise of scholars, community members, conservation experts, governmental authorities, site managers and interpreters, tourism operators, and other professionals should be

の他専門家の学際的な専門性を統合して策定すべきである。

6.2 サイトの解説及び展示プログラムを計画するにあたっては、土地所有者や、主体及び関係コミュニティの伝統的な権利、責任、利益が留意、尊重されるべきである。

6.3 解説及び展示プログラムの拡充や見直しの計画は、市民からの意見や参画に対して開かれたものであるべきである。意見や考えを表明することは、万人が有する権利と責任である。

6.4 知的財産権と伝統的な文化的権利の問題は、解説の過程及びその様々な伝達手段（例えば、現地でのマルチメディアによる上演、デジタルメディア、印刷物など）をつうじた表現にとりわけ関連するため、画像、文字情報、その他解説素材の法的な所有権及び使用権については、計画過程において協議し、明確化し、同意を得るべきである。

原則 7：調査、研修、評価

継続的な調査、研修、評価は、文化遺産サイトの解説に欠かせない構成要素である。

7.1 文化遺産サイトの解説は、特定の解説施設の完成をもって完了したものと考えべきでない。継続的な調査と参照は、サイトの意義についての理解や評価を深めるために重要である。あらゆる遺産解説プログラムにおいて、定期的な見直しが不可欠な要素となるべきである。

7.2 解説プログラム及び施設は、継続的な内容の見直し及び/又は拡張が容易に行えるように計画、構築すべきである。

7.3 解説及び展示プログラムとそれがサイトに及ぼす物理的影響は、継続的にモニタリングならびに評価し、科学と学術の両面からの分析と一般利用者からの意見に基づいて定期的に変更されるべきである。遺産専門家のみならず、来場者や関係コミュニティの構成員が、この評価の過程に関与すべきである。

7.4 あらゆる解説プログラムは、全世代の人々に向けた教育的資源と考えられるべきである。その計画にあたっては、学校のカリキュラム、私的な生涯学習プログラム、通信情報メ

integrated in the formulation of interpretation and presentation programmes.

6.2 The traditional rights, responsibilities, and interests of property owners and host and associated communities should be noted and respected in the planning of site interpretation and presentation programmes.

6.3 Plans for expansion or revision of interpretation and presentation programmes should be open for public comment and involvement. It is the right and responsibility of all to make their opinions and perspectives known.

6.4 Because the question of intellectual property and traditional cultural rights is especially relevant to the interpretation process and its expression in various communication media (such as on-site multimedia presentations, digital media, and printed materials), legal ownership and right to use images, texts, and other interpretive materials should be discussed, clarified, and agreed in the planning process.

Principle 7: Research, Training, and Evaluation

Continuing research, training, and evaluation are essential components of the interpretation of a cultural heritage site.

7.1 The interpretation of a cultural heritage site should not be considered to be completed with the completion of a specific interpretive infrastructure. Continuing research and consultation are important to furthering the understanding and appreciation of a site's significance. Regular review should be an integral element in every heritage interpretation programme.

7.2 The interpretive programme and infrastructure should be designed and constructed in a way that facilitates ongoing content revision and/or expansion.

7.3 Interpretation and presentation programmes and their physical impact on a site should be continuously monitored and evaluated, and periodic changes made on the basis of both scientific and scholarly analysis and public feedback. Visitors and members of associated communities as well as heritage professionals should be involved in this evaluation process.

ディア、特別な活動や催事、季節的なボランティアの参画における利用の可能性を考慮に入れておくべきである。

7.5 コンテンツの作成、管理、技術、来場者案内、教育といった、遺産の解説及び展示に関する専門的諸分野における有資格専門家の養成は、きわめて重要な目標である。加えて、保存の基礎的な教育プログラムの課程には、解説及び展示に関する要素を含めるべきである。

7.6 全てのレベルの解説スタッフ、主体及び関係コミュニティに当該分野における最近の進展や革新について情報更新、提供することを目的として、現場での養成プログラム及び課程を構築すべきである。

7.7 国際的な協力及び経験の共有は、解説の手法と技術に関する水準の発展と維持にとって不可欠である。この目標達成のため、国内や地域内での会議のみならず、国際会議、ワークショップ、専門職員交流が奨励されるべきである。これらをつうじて、様々な地域や文化における解説手法や経験の多様性について、定期的に情報共有する機会が提供される。

7.4 Every interpretation programme should be considered as an educational resource for people of all ages. Its design should take into account its possible uses in school curricula, informal and lifelong learning programmes, communications and information media, special activities, events, and seasonal volunteer involvement.

7.5 The training of qualified professionals in the specialised fields of heritage interpretation and presentation, such as content creation, management, technology, guiding, and education, is a crucial objective. In addition, basic academic conservation programmes should include a component on interpretation and presentation in their courses of study.

7.6 On-site training programmes and courses should be developed with the objective of updating and informing heritage and interpretation staff of all levels and associated and host communities of recent developments and innovations in the field.

7.7 International cooperation and sharing of experience are essential to developing and maintaining standards in interpretation methods and technologies. To that end, international conferences, workshops and exchanges of professional staff as well as national and regional meetings should be encouraged. These will provide an opportunity for the regular sharing of information about the diversity of interpretive approaches and experiences in various regions and cultures.

令和3年度 世界遺産研究協議会
「整備」をどう説明するか (第二部)

World Heritage Seminar, FY 2021
How should we describe *Seibi*? (part 2)

発行日	令和4年3月31日
編集・発行	独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所
住所	〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
電話番号	03-3823-4898
URL	www.tobunken.go.jp
E-mail	info@tobunken.go.jp

2021

令和3年度

世界遺産研究協議会

「整備」をどう説明するか（第二部）

東京文化財研究所



独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所